

---

# 刀嫌いの鍛冶師

珊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

刀嫌いの鍛冶師

### 【Nコード】

N5589N

### 【作者名】

珊

### 【あらすじ】

ある過去を抱え、刀より強い剣を打ちたいと強く願う主人公アリスア。武器屋を営みながら鍛冶を続ける彼女の前に腰に刀を差した同年代の男の子が店を訪れる。思わず刀を持つ人に私の武器を使わせるわけにはいかないと糾弾してしまう。その後、その彼のたった行動はアリスアの度肝を抜くことだった。少年少女の、剣と戦いの物語が始まる。感想待ってます。

## プロローグ（前書き）

よろしくお願ひします。

## プロローグ

この世界のこと

魔法？

ないわ。あるのは御伽噺のなかにだけ。

魔物？

居るわ。世界の命の半分はきつと魔物でしょうね。

火を吐く竜？

居るわ。飛竜も地竜も、とても偉大な生き物たちよ。

妖精？

さあ、居るって言う人と居ないって言う人がいるわ。  
私？

……いるんじゃないかしら。

素敵じゃあない？ 自分のあずかり知らない《現実》があるなんて。

この世界で戦って生きるために必要なものは？

自分の武器と覚悟よ。

少なくとも私に必要なものはそれだったわ。

もし武具が必要になったら？

ダガーからフルプレートメイル。

ゆんづる 弓弦からメイス 金属棍まで。

ありとあらゆる武器を取り揃えております我がアリシア武具店までどうぞ。

カタナ以外ならお高いですがオーダーメイドも受け付けております。

お客様を選ぶことはほぼありませんが、カタナを使う人だけにこのお店をご利用いただくことはできません。

以上をご理解のお客様は、

ご来店をいつでも店主、アリシア・エルトリアがお待ちしております。

## 第1話（前書き）

レンタル料を調整。指摘してくれた方ありがとうございます。  
他にも矛盾点があったりするかもしれませんが、追々修正させていただきます。

## 第1話

朝。

夜が明けてすぐに。

もう本能に近い行動として私は勝手に目が覚める。

それから伸びを一つ。

顔にかかる長髪と背中側の寝癖を手櫛で整えてから寝巻から作業着に着替える。

パタパタと階段を降りてあくびを噛み殺しながら朝食の用意をする。

割と朝からがつつりいつてしまう私だけど、結局全部流れていくから体型を気にしたことは無い。

今日はいくつか武器を追加しなければいけない日だ。

行儀悪くコーヒーをすすりながら作業場に移動する。どうせ開店までに時間はある。

竈に火を入れる。真っ赤に燃えていく様をじっと見てみると、まるで時が止まったかのように思えてしまう。

直感でいつもの温度になったと察した私はコーヒーの最後の一口を流し込み、立ち上がる。

まとめて管理している場所から金属素材インゴットを取り出し、炉の中に放り込む。

少し時間がたち、十分に熱せられたそれを取り出し、金床に置く。と、もはや相棒と言えるハンマーを取り出す。

さあ、私の本当の仕事はここからだ。

結局、開店時間までに出来たのは予定の半分だった。造形にこだわってしまったって開店時間に外から呼びかけられるという失態になってしまったけれど、納得のいくものが出来た所為か、とても気分がよかった。

ありがたいことに開店時間の前から並んでいた数人のお客さん（更ありがたいことにリピーター）は怒った様子もなく、武器の研磨が数件とオーダーメイドを一件依頼された。

もつともオーダーメイドを頼んだ人は私が掲示した額に「うへ…」という声を上げながら顔を青くしていたが。

研磨だけを手早く用意し、すぐさま売り場に戻ると、一人の男性客が入ってきたところだった。

「いらつしやいませ」

その言葉を営業スマイルと一緒にかける。

そのすぐ後に私は一瞬凍りついた。

たった今入ってきた彼の腰に差してあった武器が異国から入ってきた『カタナ』だったからだ。

独特の刃紋と、他の武器には無い反りが特徴の異形の剣。

カタナが使われるようになってから大分時が経つためさほど珍しいわけではない、が扱いが難しく、素人が扱ったらそこのモンスタより危険な為、装備する人は珍しかった。



ただ私が凍りついたのは、私がカタナに根源的な恐怖を覚えるからだ。

カタナに向けた視線を無理やりはがし、装備者のほうに目を向ける。

その男、いや男の子は私と同じ年頃だった。大体16〜17歳くらい。

男の外見で私は更に不安になった。

ごく稀にだが自分を強い、熟練だと見せかけるためにカタナを扱う人間がいるのだ。

ただ男の私の作った武器を見る目は真剣で、その心配はないとなんとなく思った。

「……あの」

一通り見て回った後、男が声をかけてくる。

「はい、何をお探でしょうか？」

私の対応に、ほっとしたような顔になってから言った。

「カタナは置いていませんか？」

「申し訳ありません、誠に勝手ながら店主の都合でカタナは取り扱っておりません、オーダーメイドもカタナに限り受け付けていません」

予想通りの質問に少し不機嫌に答えてしまう。だが気にした様子もなく男は続けた。

「店主って…君？」

「はい、店主のアリシアです」

以後お見知りおきを、と付け加える。

「あの…俺と同じ年頃みたいだから、カタナは作れないってこと？」

悪気はなさそうな聞き方だったが、私はカチンときて早口で言った。

「…材料には基本的に砂鉄から精製した玉鋼を使います。水減し、小割、選別、積み重ね、鍛錬、折り返し…これは一度ではありませんが省略します。そして心鉄形成、皮鉄形成、造り込み、素延べ、鋒造り、火造り、荒仕上げ、土置き、赤め。焼き入れをして、鍛冶押し。下地研ぎ、備水砥、改正砥、中名倉砥、細名倉砥、内曇地砥。そして仕上研ぎから砕き地艶、拭い、刃取りに磨き、帽子なるめ、最後に柄収め。以上の工程を以て造られるカタナは幾度もの折り返しとその他の工程によって独特の反りと刃紋を持つ。また特別な玉鋼でできた刃は他にはない切れ味を持つ…その代わりに工程は圧倒的に長く、根気も必要なため出来る人が少ない」

「……………」

啞然としている男に構わず続ける。

「私は別にカタナが造れない訳じゃないわ、単に造りたくないの。嫌いなもの、分かった？それが分かったらお帰り下さい。アリシア武器店でカタナを扱うことは永劫ありません」

そう言っつて辛辣に出口を指差す。

だが少し時間をかけて男は自分を取り戻した後、こう言った。

「…じゃあ、カタナ以外の武器を頼んでもいいかな？」

「カタナを使うお客様にお売りできる商品はございません」

「…ちよつと待ってて」

そう言っつて店を出る。

私の耳に彼の言葉は小さすぎて入っつて来なかつた。

自分でもびつくりするほどキツイ言い方に店を出て行っつてしまつた彼に少し罪悪感を覚えた私がいた。

まああれだけ言っつたらもう来ないよね、と小さく呟き、彼がこのことを触れまわっつて店の評判が落ちたらいやだなーと思いつながらぼんやりと棚を整理していると、ちりんちりん、と店のドアに付いたベルが鳴つた。いらっしやいませと言おうとしてその方を見ると、さっきの彼が息を切らせて立っつていた。

「…用はもうないんじゃないの？」

冷たく言っつと、彼は息を切らせたまま言っつた。

「君の…はあ…剣が使いたつと思っつて…ふう、刀を処分してきたんだ、これならいい？」

言葉通りその腰には何もなかつた。

「私はカタナを使う人より嘔吐きのほうが個人的に嫌いよ」

自分の武器をあつさり手放す冒険者はいない。しかもカタナはそれなりに高価なのだ。そんなことをするバカはいない。

「本当に処分したさ、ほらこれがその金」

ガシャッと鳴らしながら彼が袋を取り出す。

「…バカね、救いようがないほど」

「ひでえ言い草…」

「…私は嘘を吐く人と同じくらい自分の武器を簡単に捨てる人が信用できない。武器は冒険者にとって命なんだから。あるいは…あのカタナは飾りかしら」

「ぐっ…」

小さく呻く彼に更に追撃を加える。

「もし仮に、万が一、億が一。貴方がカタナを使いこなしているのだとしたら他の武器に変えるのはバカのことよ。あれは形状、硬度、特性、切れ味から言って打ち合うための武器ではないの。避けて避けて避けて必殺の一撃で両断する。もともと野性的な冒険者には似合わない上に、重量系の魔物に腕を振るわれて盾代わりによくものなら一撃で叩き折れる。言い方は考えるけど、そんな戦い方をしていた人が一日二日で魔物と正面から打ち合うような戦い方を出来るとは私には思えない。…もちろん、カタナを片手剣みたい

に使うバカがいるなら別だけど」

「…やっぱり刀好きなんじゃないのか？そこまで詳しく語れる奴俺は他に知らないぞ」

嫌いだからこそ詳しいのよ、と言ってから彼の目を覗き込んで聞く。

「…どうしてそこまでして私の武器を使おうと思ったの？」

「武器を見て惚れた」

「…そう」

私は壁に近寄るといくつかまとめて置いてある片手直剣の中から刀身が華奢でカタナに近い剣を抜き出すとカウンターの中に入る。

はてなマークを浮かべる彼に黙ってなさいと目線を送るとカウンターの内側にある鞘を取り出しそれに剣を納めて彼に投げ渡す。

「お、とと。何これ、どうしろと？」

「とつとと腰に下げて。行くのよギルドに」

ギルド 町の外のそこかしこに出現する魔物の討伐依頼、あるいは物資の採集依頼を受け付け、町に住む人の安全を確保するための機関。まあ言うまでもないだろう。

「は？」

「私の武器が使えるか見てあげる」

「あなた…戦えるのか!？」

「Aランク+++よ」

すまして答えると彼が目を剥く。

「な!？」

彼が驚くのも無理はない。私は上から一番目に位置する強さだからだ。

S , A + + + , A + + , A + , A , B + + , B + , B , C + , C ,  
D , E , F の十三段階にランクは分かれる。仕事内容に差は出るし、Dあたりまでははつきり言って一般人のバイトと変わらない。ただしAランクからは名指しの依頼が来ることもある。Sランクはギルドマスターなどに与えられる特別称号のようなもので、強さ的には実質的にA + + + の私と変わらない。

「職人やっててA + + + って…」

「コネなんか使ってないわよ」

「…すげえな」

私は彼の独り言のような言葉を流しながら工房側に引っ込もうとする。

「どこ行くんだ？」

「着替えるのよ」

ああ、と納得した様子だったのでそのまま引っ込み、着替えを手にする。

肘下辺りまでの黒いジャケットに同色のゆったりしたズボン。鈍色の胸当てを付けて、愛剣の一本を背中に、もう一本を腰から背中側に回すように差す。右手ですぐに背中の中剣を抜けることを確認して、左手でも腰の中剣を同じように確認する。

いくつかの道具を確認した後、私は姿見で装備し忘れがないか確認する。

…うん、よし。

鏡に映る私は長い黒髪に黒い装備でちょっと近寄りがたい感じにする。最後に髪を撫でつけて踵を返した。

「…真つ黒の装備に長い黒髪…背中に一本、もう一本は腰から背中側に差す変わった剣の差し方…あんた、もしかして黒の女神…？」

彼が思わずといった様子で私の姿を形容してから漏らした一言に私は苦い気持ちになる。

それはいろいろあった結果なので仕方がないことではあるのだけれど。

その渾名は、正直私に似合わないと思う。

「…さあ？」

そう言うてからあることに気づき、私は彼に目を向けて聞いた。

「聞き忘れてた、貴方の名前とランクは？」

「……」

「聞いてる？」

私が小さく小突いて我に返った彼はややこわばった声で言った。

「えっと、名前はカレン。カレン・シャロン。ランクはBだ」

「カレン…か。いい名前とランクじゃない」

そういうとカレンはちょっと不機嫌になりながら言った。

「ファーストネームもファミリーネームも女っぽくて苦手だ。それにランクはまだAにも遠い」

子供みたいに言うカレンにくすりと笑ってしまっただろりと睨まれてしまう。

「まあまあ。とりあえず今日は適当に鉱石採集と討伐受けて貴方を見させてもらうわ、剣はレンタル。一週間100エンね」

「げ…割高じゃないか？」

銅貨1枚が1エン。

銀貨1枚が100エン。

金貨1枚が10000エン。

銅貨10枚 10エンもあれば1食食べられる。



銀貨1枚でそれなりに良い宿屋に泊まれる。

武器 片手剣なら安いところなら銀貨5枚もあれば買えるかな？  
家は400万くらいで買えると思う。

「ツケといてあげる。ある時払いでいいわ、催促もなし」

「信頼されてるんだな」

「諦めてるのかもしれないわよ？」

「…必ず払う」

ぶーたれたカレンを押して店の外に出すと、ドアに鍵をかけてC  
LOSEDの板をかける。

「さ、行くっ」

「おっ」

今日出会った人といきなりギルドに行くなんて、と一番不思議に  
思っていたのはわたしだろう。

## 第2話 (前書き)

あとで通貨についてを変更するかもしれません。  
矛盾が出たら申し訳ないです。その時は遠慮なく指摘をお願いします。

## 第2話

「あやや？アリシアちゃん！なんや随分久々やんか！もつとこまめに顔出してーな、うちの素出せる人がマスターだけなんてさびしすぎるやろー」

私がギルドの入り口をくぐった途端、ここいらでは珍しい言葉遣いで　私は聞き慣れたそれだが　話しかけてきたのは受付嬢のスノウだ。

私と同年代に見えるが10年も容姿が変わっていないため、もはや年齢不詳。

「カウンターに乗り出すと落っこちちゃうわよ」

「あら、華麗にスルーかいな、うち寂しいわー」

何時ものことですよ、と言ってからカウンターの隣にある依頼のまとめて貼っている板に近づく。

「そっちなん？アリシア名指しの依頼溜まってらんやけど」

「今日は自分の為に来たわけじゃないの」

へ？と疑問符を浮かべるスノウに目を丸くして突っ立っているカレンを指差す。

「カレン君やん」

「知ってたの？」

珍しい名前やからな、というスノウに納得して頷いてから貼つてある依頼の中から鉱石場の魔物退治依頼とその道中の魔物の掃討依頼の二つをピツと剥がす。

「…まあた二つ一気に。確かに許可されてんねんけどなー、あんたがマイナス1なの納得してない奴らもおるんやからどうせならそこに貼つてない依頼受けてくれへん？」

受付嬢のちよつとげんなりした顔を見て思わず吹き出す。

「ごめんねスノウ、でも名指しは大概遠くに行く羽目になるじゃない」

「んー、そうなんやけどな、どうしても受けたい欲しいやつもあるねん。これはアリシアにしかできんやろなあって確信する依頼も来てるんよ」

少しシリアスな空気になってしまう。

「…んー、じゃあカレンを連れていく依頼は今日明日中に終わるだろうからその後なら受けるわ。なるべく近場が良いんだけど…有る？」

おお、珍しい！ と感嘆符を上げるスノウを小突く。ただそれが本当なのは私が一番自覚している。

カウンターの奥に消えてやたら大きな鈍く黒光りする皮の本を取ってくるスノウ。私にとっては見慣れたものである。

「確か…あ、あつたで」

本をめくって少ししてからスノウが上げた声を聞き私は彼女に聞き返す。

「どんな依頼？」

「ん…隣国で氷竜の縄張り争いが起こってるうちゅうからそれを討伐か撃退の依頼や」

「縄張り争いつて事は…2匹？」

1匹退治と2匹退治の難易度は単に2倍ではない。同時に相手取る羽目になることも当たり前のようであり、特に縄張り争いでは両方が同じ場所を警戒して常に緊張状態なので番を相手取るよりも危険だ。

「いや、これ3頭や」

ちよつと申し訳なさそうに言うスノウの声を聞いて、今度は私がげんなりする番だった。

「…はあ、3匹同時相手になりそうな依頼ね」

「なかなか手間取ってるうちゅう話らしいで？あと三日来なかったら王国騎士団が出る予定だったらしいしな」

でもそれでもきつと無理やろうな、と小さく呟くスノウ。私もそれに同意するように頷く。

当然ね、と思う。

どこの国でも、王国騎士団というものは人間が人間を殺すために造られた組織だからだ。

「じゃあそれ受けるわ。明日中には出発できるようにする」

「お、さんきゅーな、これでマスターの愚痴も少しは収まるわ！」

嬉しそうに言うスノウに私は確信した言葉を言う。

「嗚呼、本命はそっちね」

あはは、と誤魔化すスノウを睨んでからカレンに目を向ける。彼が所在なさに立っていたから。

「何してるの？依頼はもう決まったわよ」

「…いや、なんでも…」

本当は彼が何を言いたいのかが私には分かっていた。

おそらくはスノウの言葉遣いのことだろう。私やこのギルドのマスターなどにしかこの言葉遣いはしないのうえに、マスターが顔を出すのは大概奥なので、彼は初めて聞いたのだろう。

「スノウの言葉遣いのことならこれが素よ。親しい人にはこうなの」

「改めてよろしゅうな、カレン君」

にっこり笑うスノウに向かってカレンは「は、はい」とらしくもない歯切れ悪い声を出す。

「もう知ったんだから、暇なら愚痴でも聞いてあげて頂戴」

「あ、ああ」

出発しようと思ったがあることを思い出しスノウに向き直る。

「スノウ、鉱石採集の依頼を出しておいて」

「ん、了解。いつものやつやな」

「うん」

いつもの、というのはもう私が何度もこの依頼をしているからだ。

なんでもありの鉱石採集。実際にスノウが判定して額は決める。

銀貨5枚以上の判断をされたら私の店のオーダーメイドを割引価格で受け付けるか素直に報奨金を受け取るかを選べる。

実際のところはそこまでの量、質に達した人はまだいないのだけ  
れど。

じゃあよろしく、と声をかけてからやっと動きを取り戻したカレ  
ンにも声をかけてギルドのドアをくぐった。

「…なあ、本当に何者なんだ、アリシアって」

馬車に揺られながらそう言ったカレンはさっきのことをまだ気にしているようだった。

それもそうだろう。本来一度に受けられる依頼は個人でもパーティでも原則一つ。たとえ他のAランク以上でもそれは変わらない。それにスノウのことだ。彼女の営業スマイル以外の表情を見ることが出来る人はほとんどいない。

「ただのカタナ嫌いの鍛冶師よ」

「そのまんまだな」

「うん」

蛇足だがこの馬車の料金は原則で無料。ギルド所有の依頼場所に行く専用の馬車だ。

揺られ始めてはや数時間。鉱石採集場は町の近くにあるのが原則だからそろそろ到着だろう。

ヒヒーン、と馬の嘶きが上がり、馬車が停止する。

カレンがこちらを見て、視線で問う。私は視線を合わせて頷く。

馬車の運転手が降りてきて馬車の後ろ側から私たちに声をかける。

その格好は私よりずっと黒の割合が多い。全身黒で、顔にはヴェールということから、この運転手は女性らしい。男性なら目深にフード、女性ならヴェールということが決まっている。知る人は少ないが、この運転手たちは全員Aランク以上の強さを持っている。

「到着いたしました。ここまです。ご依頼の成否に関わらず、馬



車に戻る前に合図をお上げください。ではご武運を」

抑揚なく、無表情に言われた言葉に私とカレンは呟くように返すと差しだされた花火とマツチを受け取る。

彼女がここまで義務的なのはそういう教育を受けているからだ。感情を徹底的に排除し、私情で動かないように教育する。

このシステムを造ったのはこの世界で一番最初に造られたギルドらしい。そこに申請をして実際に依頼を受け付けるようになればどんな弱小ギルドにも一人は送られる。このシステムを知るのはギルドマスターだけだが、両親が特殊だった私は知っている。

それを公表しない所為か、この人たちにはいろいろな噂が立っている。

曰く、人間ではなく人形だとか、半分竜の血が流れているとか、血が青いとか：e t c

くだらない。

「どうした？」

「なんでもない、ちょっと考え事」

「それはいいけど、そろそろ来るんじゃないのか？」

確かにちよつと無防備だった、と気合を入れ直す。採集場は森の中に道を開拓して造られている。ただ樹はそこまで多くなく、剣を振るのには邪魔にはならない程度だ。

不意にぐるぐる、と唸り声が響く。

「来たわね」

すら、と剣を抜く。カレンも同じように臨戦態勢になる。

がさがさ。

そんな音を立てて現れたのは2本の尾と大きな体躯が特徴の赤みがかつた毛皮を持つ狼だった。

名前はツィテイルウルフ。C+ランクモンスター。カレンでも充分相手取れる程度のモンスターだが…。

「6匹は多いだろう…」

カレンが肝を冷やしたような声で言う。

「全部で30近くの群れらしいからマシよ、フォロー入れるから自由で戦ってみて」

30近く、と言ったときに、げ、と出すカレン。

「…わかった」

一瞬悩んだようだが 恐らく私に守られるような戦い方が嫌なのだろう 頷いた。

どん、と思い切りカレンが地面を蹴った。

### 第3話

私が戦いを始めて一番最初にしたことはウルフ達の目を1匹を残してすべて私に向けることだった。

1匹のウルフの顔を袈裟がけに切り裂き、怯んだ1匹から視線を逸らして後ろの1匹の目に脳を傷つけないレベルで剣を突き込む。ぐるるああ！ と上げた苦悶の叫びを無視して残りに向かう。

カレンは3匹を相手にしていたが、彼の後ろにももう1匹ウルフがいる。

それが跳びかかろうと足に力を入れたところで走り込んで脇腹に突きを繰り出す。思った以上に力が入ったらしく、剣は根元まで埋まり込んだ。

剣先が少し上を向いていて、あっさり背骨を断ち、ウルフの背中から白銀色の切っ先が飛び出した。

思わずちつと舌打ちする。カレンの戦いを長く見るために倒さずにいようと思っていたのだが勢い余ってしまった。

すぐさま剣を引き抜きカレンを見やる。

彼は時間差で跳びかかるウルフを辛うじて避けて1匹に斬りつけるところだった。カタナ使いだっただ割に片手剣の持ち方は悪くない（カタナは個人次第だが本来両手持ち）。

ただ避けたときに斜め後ろに跳んだ1匹を見落としたらしく、残りの2匹の攻撃の内1匹は避けられそうになかった。

それを数瞬の間に無意識に判断し、カレンとウルフの間に割り込む。

「!？」

目を剥くカレンを無視して跳ぶウルフを回し蹴りで叩き落とす。

「油断しない！」

「悪い！」

一瞬のやり取りの後に地面を蹴り、傷つけたウルフ達の真ん中に立つ。そして足元にあった拳ほどの石をカレンが最初に傷つけた1匹に全力投擲する。

ぐしゃ。

「あ……」

わずかな呻き声をあげてそれは絶命する。ちょうど顔を上げたところだったために潰してしまったのだ。これで私の所に向かってくるウルフは3匹。

カレンがこちらをちらりと見る。

「こっちは気にしないで集中しなさい!！」

私の声にすぐさま頷き相手を見る。それでいい。

蹴りを喰らわした1匹は脳が揺れたようで少しふらふらしながら立ち上がるうとしてしている。これならば早く時間が稼げる。

最初に斬られた2匹は片方しかなくなった目に形容しがたい炎をたぎらせながら跳びかかってくる。

上段と中段。頭を狙った方は剣で防いでから弾き飛ばし、お腹を狙ってきた方は腰を90度動かして抜いていない方の剣の柄で顔を殴打する。キヤインと呻きひっくり返るの確認。

剣で弾き飛ばした方も背中から落下したことを横目で確認しながらカレンを見る。

相手が1匹になった所為か、多少リラックスした表情で一撃を避けすれ違いながら脇腹を斬る。バランスを崩して落ちたところに剣を振り下ろし首を落とす。

うん、腕は悪くない。剣の斬れ味も良好。

「次っ！」

その声を出したのは私だ。すぐさま駆け寄ってくるカレン。脳を揺らした1匹と柄で殴打した1匹はまだ頭を振っている。

唯一弾き飛ばした奴が私に向かって来たが、私とウルフの間に走り込んだカレンが突っ込んでくるウルフに向かってタイミングを合わせて剣を突き出す。口から突き込まれた剣はもう1本の背骨のようになるが重さによってすぐに地面に落ちる。

カレンはその重さに思わずといった様子で剣を取り落とす。

そこに突っ込んでくるのは蹴りを喰らった1匹。カレンが剣をもちや肉の鞘になったウルフから取り出そうとするが、僅かに突っ込んでくる方が早い。今度は私が前に出てタイミングを図って斜め下に斬りはらう。

しっかりとタイミングの合った一撃は吸い込まれるように首に入り、斬り飛ばした。

だが切り離された脳が出した最後の指令で首のない肉体が突っ込んでくるのは止まらなかった。私は意識せずにそれを蹴り飛ばす。

そして剣を構えなおしたカレンが残りの1匹の顔を真一文字に真っ二つにしてこの戦いは終わった。

「…終わった？」

「うん」

一息ついた私の代わりにカレンが最後の仕事をしてくれた。

その仕事は「討伐証明部位の切りとり」だ。

討伐証明部位と言っても、全ての魔物にとってそれは同じものだ。

それは「心玉」と呼ばれるもの。この世界の生き物ならどれも持っている。人間だけは例外らしいが。

これは名の通り心臓の真ん中にある。

ただその形と大きさは種族固有でそれぞれ違う。だからこそ証明材料になるのだが。

そして材料も不明。血液の鉄分という考えもあったが、植物系の魔物にもあったので否定された。

毎回ギルドで預かり（正しくはあの黒ずくめが依頼終了時に預かり成否判断する）個人が持つのは原則禁止。依頼の詐称を防ぐためだ。ギルドマスターなど例外はいるが。

因みにあの黒ずくめは一見血の匂いしかなくこれを嗅ぎわけ。だからこそ隠そうとするバカがいないのだ。

「そろそろ行く？」

「さっきはほとんど1対1でそれを見たけど次は多対1を見るからね」

うへ、スパルタ。と嫌そうに言う彼を促して先に進む。

「と、とりあえずこれで終わりか」

「…だらしない」

肩で息をしながら言う彼に言う。

「28匹だぞ!？」

吃驚した様子で言うカレン。

「たった、ね。まあ本来B＋ランクの依頼で原則4人以上でしか受けさせてもらえない依頼だったけれど」

『たった』は私にとってだけど。

「はあ!？」

さっきよりもさらに大きな声を出すカレン。

そもそも依頼は安全面を考え自分のランクより一つ下を受けるものなのだから当然と言えば当然だが。

一つ目の依頼を終えたとき、月が昇り始めて数時間が経っていた。戦闘が続けられたのは今夜が満月で月明かりがかなりあったからだ。と言っても危ないことは何度かあったのだが。

「どつする?野営かこのままもう一ついくか」



「……野営しよう」

当然と言えば当然の言葉だった。カレンは約20匹を相手にしたが、剣で受けるより避ける方が圧倒的に多く、今までの武器の性質だが、かなり疲労しているようだった。

「じゃあ焚火を用意しておいて。ここなら坑道からは離れているから問題ないわ。焚火には陽香を入れるのを忘れないで」

分かったと応えるカレンの声を聞きながら胸当てと腰の剣を外す。背中の剣と上着はそのままにここを離れようとする。私の手には水筒とタオル、そして肌着の替えがある。

「どこ行くの？」

「体を拭きに。覗いたら斬り落とすわよ」

「何を!？」

「知りたければ覗きに來たらいいじゃない」

ぶつきらぼうに言って歩き出す。まあ焚火の準備もあるし来ないだろうと思う。顔を青くもしていたし。

五分ほど歩いてから周りに気配がないのを確認し、上着と肌着を脱ぐ。僅かな汗のにおいに眉を潜めるけれど、上着自体は平気のよう。体も耐えがたいというほどではない。私の昔からの体質そのものは幸運だった。

上着と肌着を樹に掛けてタオルを水筒の水で濡らす。よく絞って

腕を撫でる。私は力が強いが、筋肉質というわけではない。不思議ではあるが、10代の乙女が筋骨隆々、というのは遠慮したいし都合が良い。

ふと来た方を見ると、煙が上がっていた。焚火の準備ができたのだろう。

私がさっき言った陽香のことについて説明しておいた方がいいだろう。

陽香はギルドが開発したらしい独自の香り、野営が想定される場合にだけ配布される。焚火に投入することで就寝時に魔物に襲われるのを防ぐことができる不思議なお香。

因みに特別な材料がいるが私も作れる。そして無臭。

拭き終わり、下着だけだった上半身に肌着と上着を着て、今度は下半身を下着だけにして拭く。

母に言われてどんなときでも体を清潔にすることを意識している自分に少しおかしな気分になる。ギルドに属する討伐や掃討依頼を請け負う女性は体格のいいひとが多いため。

精神は肉体に影響を受けるの言葉通り、豪胆な女性も多い所為か、気にしない人の方が多いからだ。

ただ、汗の発酵した匂いが自分から漂っていることは想像すらしたくないように意識させられてきたせいで、こんなに緊張感のないことをしているわけだ。

下半身を拭き終わり、ついでに髪も軽く洗ってから身だしなみを

整える。

そしてもう一度剣を背負ってから来た道に戻った。

「…どうしたの？」

戻ってすぐにカレンの顔を覗き込むと真っ赤になっ  
ていて奇声を上げて飛びのいた。

「…んん？」

気配は感じなかったし、ちゃんと暗がり  
にいたはずなのに…と考えてからああ、と納得し頷く。

「…なんだよ」

ジト目で聞かれる。

「想像まで禁じてはいないから気にする  
必要はないわ」

「っ …!?」

その反応が思いのほか楽しくひとしきり  
からかってから用意しておいた保存食を焚火であぶって  
から渡す。

「…ありがとう」

「100エン」

「なんでそんなにとるんだよ!？」

作るのに時間と手間がかかるからよ、と言ってから自分でその半分の量を食べた。

その後私は樹を背もたれに2本の剣を抱え胸当てを横に置いて目を閉じようとする。

「あかさ」

「何？私が眠る前に済ませてね。大丈夫だとは思っけど襲わないこと」

「しない!…じゃなくて何でそっちの剣は抜かなかったんだ？」

カレンが私が抱えているうちの1本を指差す。

「ちょっと思い入れのある剣だから。今の私が打てるどの剣よりレベルは数段上なんだけど使いにくくて」

性能的にはなく、精神的に。

「…そっか、ごめん。でも二刀流じゃないのか？」

カレンはちょっとさびしげに言った後に聞いた。

「確かに二刀だけど。」

それは難しいし神経を使うから、ちょっとした保険みたいなもの

なのよ。道具と策の一つだと思ってくれれば近いわ」

なるほど、と頷いた後に俺の腕はどうだったと聞いてきて、話は変わる。

「…悪くないわ、ついさっきまでカタナを扱ってた割には。

ただ、カタナ使い特有の癖は残ってるみたい。

最初の戦闘で剣を落としたのは、カレンが右利きだけど正統派のカタナ使いだからよね？ああいうことが一人の時に起こったら命取りだから右手の握力を鍛えた方がいいわ、まあこのまま私の武器を使うなら、だけど」

正統派の名前は確か『ケンドー』とか『ブシドー』とかいう名前だった気がする。

そして台詞の最後の言葉はちょっと素っ気なくなる。我ながら素直じゃないものだ。

「使うさ。だから打ってくれ」

「カタナ以外なら、ね」

定型句のように言う。

「勿論：なあ、なんでそんなにカタナが嫌いなんだ？知識といい観察眼といい、正統派だって分かる所とところといい、好きでもそこまで詳しい奴は少ないぞ？」

「…復讐するためよ。詳しいことは言いたくないけど…」

うつらうつらしていた私は、カタナ使いなら、どころか、子供でも必ず知っているはずのある七振りのカタナのことと、それに両親が殺されたことを話してしまっていた。

ただ不思議と、私がそれを後悔することはなかった。

それを聞いたカレンが詳しいことを深く聞かずに見張りは任せると言ってくれたのは嬉しかったが、ちょっとだけ目を開けて陽香があるんだから無駄な事しないでさっさと寝て頂戴、と冷たく言ってから目を閉じて眠りに落ちた。

## 第4話

この日の朝、私は不思議な感覚の中で目が覚めた。

どこか愉しんでいるような謳<sup>うた</sup>。それでいて、確実な狂気と共に私の中にしみ込んでくる被支配感。

まるで、眠りに落とされるように狂わされていく感覚。

それは絶対に人間の唄う歌ではなかった。

俄かには信じられなかったがそれを謳っていたのはカレンだった。

男性音域はおるか、女性音域すら混じったその合唱のような斉唱に溺れてしまいたいという欲求が私の中にあるのが恐ろしく思えて私は震えた声でカレンの名を呼んだ。

一瞬びくりとしてその声が止むと、私の方を見るカレン。

「あ…ごめん、起しちゃった？」

「今のは…何？」

カレンの言葉を無視してそう聞く。

私はその人を超えたものを知っていた。いや同じ様なものを持っていたからだ。

カレンは少し考えた後、呟くように言った。

「……海妖婦の謳だよ」

その一言で私は確信する。私とカレンは驚くほど似ていると。

「やっぱり、そっか」

「え？」

「カレン、あなたは妖精にあつたことがあるの？」

その一言にカレンが目を丸くする。

この世界の妖精は幽霊と同じような扱いだが私は知っている。

妖精は存在する。

「…俺の父さんは海に船から投げ捨てられた所をセイレーンに拾われて育てられたらしい。母さんは森の中に捨てられて音楽妖精ブーカに拾われた……その二人が出会った結果が俺。ははっ、笑えるだろ」

その乾いた自嘲的な笑みの続きの言葉を遮りながら私は言った。

「笑わないわ、私は妖精を信じてる」

カレンの目に僅かな光が宿ったが、少し顔を上げた後すぐに俯いでしまう。その姿を見ながら私は続けていった。

私の父は職人妖精レブラコーンに、母は鍛冶妖精ドワーフに育てられた、と。貴方と同じで、私もあなたと同じような人間以外の技術を持っている、と。



今度こそ今までで一番驚いた顔をしながら顔を跳ね上げた彼に背を向けて私は保存食をかじり始めていた。

「そろそろ着くわよ」

「お、おう」

あのあと根掘り葉掘り聞き始めた彼は私の本気のチョップ一回で黙った。

しばらく悶えていたからこれで大人しくなるだろう。

気を取り直して私たちが向かったのは二つ目の依頼の場所、坑道。その依頼書を見ながらカレンが不思議そうに首をかしげた。

「どうしたのよ」

「これってさ、なんで坑道に入れるようにすること、なんだろ？坑道の周りをうろついているだけなら動きの速い奴を囿にしたらすぐ完了の筈なのにどうして3回分も失敗マークが付いてるんだ？」

確かにそれは私も不思議だった。そこまで難しい依頼でもないのにB++なのも気になる。そこまで都会ではない私たちの町では最

高と言つていい難易度なのだ。

その答えは、坑道にたどり着いたときに出た。

「……なるほどね」

「………こんなことあるのか!？」

私は大きな溜息を、カレンは大きな感嘆を漏らした。

巨大なモグラである。

縦3、5m横2m程の木枠で囲った長方形の坑道の入り口に巨大な土竜型の魔物、ビッグモールが「挟まって」いた。

「……とりあえずちやっちゃとやっちゃいませよ」

「この状況はスルーなのな……」

「気にしたらそこで終わりよ。大型相手にどう立ち回るか見せて」

えっ!?!と声を出すカレン。名前も姿も間抜けだがビッグモールは単体でもB+ランクのモンスターなのだ。しかも大型については四人以上のパーティを組んで相手にすることを前提にランクが決められる。

一人で相手にすることになると恐らくB++……流石にAまでは届かないだろうがそれなりにキツイ相手になる。

「相手は動けないんだから慎重に立ちまわれば問題ないわ。後その

剣はかなり頑丈に造ってあるから武器防御も意識して戦うこと。片手剣は基本盾も同時装備なんだからそれを想定して。フォローは入れるわ」

私の早口な言葉を一言も漏らさずに聞いてから頷いた彼は駆け出した。

駆けだした勢いそのままカレンは跳躍し左手を柄頭に添えてビッグモールの頭に突きを『落とす』。

私はそこであることに気付く。恐らくカレンはビッグモールの特徴を知らないのだ。

地面の奥深くを掘り進むモールは勿論手の甲と爪がかなり発達している。堅い。

もう一つの特徴は、手や爪と比べ物にならない『頭』の硬度だ。モールは地面を掘り進む以上岩盤にぶち当ることがある。それを横着なモール達は迂回せずに頭突きで砕くのだ。だから頭は骨、皮、毛と全てにおいて異常な硬さになる。

そしてもうひとつ注意すべきは腕を振るう速さ。筋肉の塊に武器のついたあの腕を喰らったらダメージはかなり大きい。

予想通り剣をあつさり弾かれたカレンは一瞬体勢を崩される。そこにモールが腕を振るう。

「防いで！」

「っ ……！！！」

自分の右側から襲う左手の攻撃を辛うじて防ぐことのできたカレンだが、衝撃までは吸収しきれない。吹き飛ばされて樹に激突してしまう。

「…まだ早かったみたいね…。…後で謝らなきゃ…」

そこまで酷いけがはしていないだろうが、言葉にして決める。フオローを入れるとも約束していたのだし。

今度は私がモールの前に出る。

「…行くわよ」

どんっ、と地面を蹴る。周りの景色と空気がブレる。

懐まで一気に走り込み右腕を横薙ぎに振るう。

どおん！と大きな音がして同じく横薙ぎに振るわれようとしていたモールの腕だけが弾かれる。

腕に心地よい痺れが広がる。そのまま腕を引き絞り、驚愕の色が浮かぶモールの目を真っ直ぐ見ながら突きを繰り出す。懐の奥まで

入り込んでいた私の剣は不釣り合いな程小さなモールの目を貫き脳を破壊する。

おおおおおおおっつ！！！

巨大な口から吐き出される臭い空気の塊を体で受け止める。勿論息は止めている。

その咆哮を上げたままモールが腕を無茶苦茶に振り回す。バックステップを4回繰り返してその範囲から余裕を持って離れると、数秒後にモールの目が再び私をとらえた。

そして今度は爪が地面をとらえる。ビキビキビキ、と音がする。出ようとしているんだ。

どこか遠いところでそんな考えが浮かんだが私はその際に動くことはしなかった。

咆哮を上げながら力を加え続けたモールは遂に坑道の入り口を破壊して脱出した。

「……………」

だんだんと小さくなっていく咆哮を上げながら近づいてくるモールを私は見続けた。

一步。

一歩。

三歩、と。

私が近づいた。

そしてモールの目から光が失われていくのを見ながらもつ一步近づき、首に向かって剣に振るった。

「…んむ」

カレンが呻く。

私はモールから心玉を取り出した後、カレンをお姫様抱っこしてあの黒ずくめの馬車に運び込んだ。  
走り始めてから1時間程になる。

ゆっくり目を開けたカレンはのっそりとその体を起こした。  
やがて焦点の合った目を私に向けると言った。

「モールは？」

「倒したわ」

「…そっか」

うん、と頷くとカレンが頂垂れる。

「…辛気臭くなるから止めて。良いじゃない倒したんだし。私この後すぐに帰って研磨の仕事こなしてから氷竜倒しに行かなきゃいけないんだから」

「…あ、そうだったな、悪い」

小さく言つとよしっ、と自分で気合を入れ直すカレン。

「あのさ、今楽器はないけど俺の謳聞いてくれないか？ちょっとは役に立つと思うんだ」

私は朝のセイレーンの謳を思い出してちょっと身震いした。

「…セイレーンは人を惑わせて海に沈める怪異の妖精だったはずよね」

そう言つと慌てて取り繕うカレン。

カレンが言うには朝の声出しをしていただけで、他意はなかったらしい。（朝一番にはセイレーンの発声法がいいのだとも）

「セイレーンの謳が毒になることもあるのはあれが自分の為の謳だからなんだ。今俺が言ってるのはプーカのほう。音楽妖精の謳は誰かの為の謳だから」

「…ふーん」

じゃあ、いくぞ。と言ってからカレンは大きく息を吸い込んだ。

その口から溢れた謳はセイレーンのものとは似ても似つかなかった。

セイレーンの謳を狂氣的な美しさと表現するなら、プーカの謳は自然から生まれた温かな陽気さと優しさだ。

ただその時の私に分かったのはどちらも本来人がたどり着ける領域ではないということだけだった。

世界中の命に守られ、愛されているような気持ちになりながら私は穏やかな眠りに落ちていった。

どこか遠くで声が聞こえる。



誰かが騒いでいるような…なんだろう…。

「ちよま　だ　で。スノ」

「やかま。だま　きや」

んん？

聞き慣れた声がした気がした。  
眠気に抗い目を少し開ける。

「おきーや！！」

がんっ！！！

「っ　！？あぐっ　！？」

頭部を襲った硬い感触と熱を持ったすさまじい痛みにて全ての感覚が支配される。

私は頭を押さえ、馬車の中でのたうつ。

「ほら！どや、ちゃんと起きたやろ！」

「そんなことしたら誰でも起きます！」

痛みに耐えて周りの状況を知ろうとすると、私の耳に入ってきたのはスノウの声とカレンの敬語だった。

「どうやら私は頭突きされたらしい。スノウが石頭なのはよく知っている。」

「…いきなりこれは酷いんじゃないの…?」

ひどく不機嫌な声が自分の口から出る。

「寝とんのが悪いんや!こつちが毎日毎日ギルドでマスターにぐちぐちぐちぐち言われながら絡んでくる酔っ払いをしばきながら頭悪い奴の相手しなげらと営業スマイルしよんのにアリシアは何気持ちよさそうに寝とんねん!」

「個人的な憂さ晴らしをしないでよまったく…酔っ払いぼこしてるんだからそれで満足しなさいよ」

「普段飄々としてるあんたの別の顔が見たい時もあんねん」

にやにやしなげら言うスノウにげんなりして溜息を吐く。

「とりあえず研磨の仕事片付けてからもう一度来るわ。報酬はカレンに全部渡しといていいから」

「うん。嗚呼、飛竜便とびりゅうびんで送ることになったからそこまで急がんでええで」

「わざわざ飛竜便が来るの?」

「もう来てるで」

そう言ってギルドのほうを顎で差す。

飛竜便とは文字通り竜で人を運ぶことだ。

本来人に従うことのない飛竜を従わせることができるのは竜の中の竜と呼ばれる魔物の中でも特に力を持ったものの特別な心玉で首輪を造り、存在そのものを縛っているからである。

数が極端に少ない所為でめったに使われることはない。それほど緊張状態ということだ。

そう思った私は全速力で駆けだしていた。

数分でシャワーを済ませ、工房に立てかけてある依頼の武器を砥石で研ぐ。速度こそかなり速かったが、手を抜くことはなくしつかりとこなした。

そのままその武器達を抱え、背中の剣を外して自分用の武器をまとめてある場所から『ある武器』を取り出す。勿論腰の剣はそのまま。

そして売り場のドアに武器研磨の依頼をした人はギルドにて代金

を払った後受け取ってくださいと走り書きしたメモを貼るとギルドへの道をまた全速力で駆けだした。

## 第5話

「割と早かったなあ」

「急いだからよ」

ちよつと切れたままの息を整えながら言った。そして脇に抱えた武器達をスノウに渡す。

「よろしくね」

「いつもながら図々しいなアリシア」

「何時ものことですよ」

まあええわ、と一旦切ってからスノウが再び口を開いた。

「今一人あんと一緒に行く予定の奴がおるから挨拶しといてな」

「分かったわ」

こつちや、と言って武器を抱えたままギルドの中に入る。

「あいつや」

スノウが指差したカウンターから一番近い席に座っていたのは私より小柄な少女だった。

茫然とする私を見てスノウが近寄ってきて耳元で囁いた。

「あれ、アリシアより年上やで」

「ええ！？」

「昨日の夜フラツと来た奴やねんけどな。ランクはAでアリシアの事話したらちよつと盛り上がってしまつて酒も入つてたし勢いで依頼の事も話したら行きたいって言ったんよ。アリシアに聞いてみつて言つといたから見たつてくれる？」

私は思わずため息を吐くが戦力は多いに越したことは無い。最も、使えればの話だが。

「それは構わないけど彼女名前は？それから武器は？」

「名前はレイン・グラティアやて。武器は大剣<sup>クレイモア</sup>」

「…名前にも共感したの？」

あはは、と乾いた笑いを漏らすスノウに少し呆れながら件の彼女に近づく。

「あの…初めまして。お話はスノウがしたと思いますが私がアリシアです」

正面に立って礼をしながら言う。私は顔を上げて初めて彼女の顔を見た。

彼女は芸術と表現するのが正しいとしか言えないような顔をしていた。

大きくて深い蒼穹の色をした瞳。それを彩る長い睫毛。セミロン  
グに整えられた流れる様な茶髪。

健康的に色づいた肌（ほんの少し日に焼けている）は滑るように  
光っていて、まるでどこかのお姫様のようだった。

「…レイン。20歳<sup>はたむち</sup>。表へ出てあたしの腕を見て」

因みに私は16。

「…はい」

そう答えるとレインは無表情なままちよつと眉を八の字にした。

「敬語は無し。貴方の方がランクは上でしょ」

「あ…うん」

それでよし、と言って彼女は横に立てかけてあった自分の武器を  
手に取り、背中に背負う。

…正直、似合わない。

不釣り合いなほど大きな彼女の剣は床をゴリゴリ擦っていた。

「……………」

せめてもう少し短い方が良さそう。

「出発は一時間後や、それまでに決めてな」

「了解」

スノウの声に短く返して私は自分の武器を抜こうと背中 of 柄に手を掛けた。

それを見たスノウがあっ、と声を出す。

「ええの？」

「どうせ酔ってたんなら冗談半分に話したでしょ」

うっと思を詰まらせたスノウを後でどうしてやろうかと考えながら得物を抜いた。

「……それは何？」

私の抜いた剣に目を向けてレインが聞く。

当然だろう。私の抜いた剣は刀身がある竜の体色と同じ深い紫色だったからだ。黒に近い深い色のそれは鉱石でも宝石でも出せるはずのない異形の色だった。

「……竜の王の剣、とだけ」  
ドラゴンスレイヤー

これはレプラコーンと人間の技術で造り上げた剣だ。



竜の中の竜の力がそのまま宿るこの剣は私の父が打った剣の内でも最高の物の一つだ。私はまだこのレベルの剣は打てない。

レプラコーンの技術の真髄は魔物の肉体や宝石など、金属以外のものにある。それを人間の技術の鍛冶で混ぜたのだ。それも両方知っている父や私にしかできないことだが。

「…なる程」

そう言うってから今度はレインが得物を抜く。武骨な鈍色のそれは先細りではなく最後の最後に僅かに切っ先が細くなっているだけで勘の幅がほぼ変わらないものだった。幅は30cmほど。

両手で中段に構えたレインは小さく「来い」とつぶやいた。

私は頷くと一息に吐き出した「フッ」という自分の息が消える前にレインの懐に走り込んでいた。

だが私を待っていたのは振り下ろされた彼女の太剣だった。

「っー」

がつん、と大きな音がして私の振った剣がレインの剣を跳ね上げる。レインが驚愕の表情を浮かべるが私の意識はレインの剣が立てた別の僅かな音に向いていた。

「……………」

私はあの音を知っている。まぎれもなく手入れの行き届いていな

い武器が立てる断末魔寸前の悲鳴だ。どうして最初に抜いたのを見たとき気が付けなかったんだろう。

私は追撃を加えず一気に後ろに退いた。

「ごめんなさい」

「え？」

「…それから、うちの店をご鼻屑に」

そう言ってもう一度走り込む。一瞬動揺したレインだがすぐに剣を盾のようにし自分の目の前に翳す。

私は剣が悲鳴を上げた場所とは別の、それでも確実に剣の息の根を止める場所に向かって突きを繰り出した。

ビッグモールを相手にした時よりずっと強い力で繰り出された剣は吸い込まれるようにその場所へ直撃し、けたたましい音とともにレインの剣をその場所から叩き折った。

「!?!?!」

レインがその出来事を認識する前に私は彼女のど元に剣を突き付けた。

「……私の負け」

唇を？みしめながらレインが呟いた。

「まさか、剣を碎かれるなんて」

飛び散った自分の剣の欠片を見ながら彼女は茫然と呟いた。

「…これ、どれくらい使ってたの？」

私は剣を納め、レインの剣の欠片を拾いながら聞いた。

「…ギルドに初めて所属したときから使ってた」

「じゃあこれが私の一撃で砕けたのは単に私の力じゃないわ」

ゆっくりと私の目を見たレインは訳がわからないという表情をしていた。

「レインはこの剣を相当大事にしてるみたいね」

手入れの行き届いていないと表現したが、それは半分間違いだっただ。この剣はとても愛されていた。ただ、ドワーフやレプラコーンの技術以外にはこれを防ぐことはできないのだ。

「…魔物の血液はね、少しずつ武器を侵食していくの。どんなに心をこめて手入れしても、最高の技術で手入れしても、人間の技術で魔物の血液による浸食は止められない。

すぐに拭きとって一緒。どうにもならないことの内の一つなの」

「…このこはもう戦えないということ？」

私ははっきり伝えた、もうこの剣は死んでしまっているぞ。

「……………」

「……これは？」

時間ぎりぎり、あと5分ほどしか時間が無くなってしまっていたが、私はレインに私の店の両手剣を手渡していた。ついこの間造った剣だ。

「使つて」

私の得物より幾分大きいそれをレインに押しつける。

「重い…けどまるで吸いつくみたい…。この剣は何で出来ているの？」

刀身を僅かに鞘から抜き出したレインは信じられないといったようにうすで言う。

「…秘密よ」

お母さんから教わって精錬した聖銀ミスリルで打つたなんて言っても信じられないだろうし。

「…でも私は…」

レインが欠片と二つの刀身を集めてまとめておいてある方をみる。私はその時おかしかったのかもしれない。あるいはレインの剣に向けられた愛に酔っていたのかもしれない。

「それは私が魔物の血を浄化してもう一度甦らせるわ。だからそれまではそのこを使って頂戴」

その瞬間、ぐりんとレインがこちらを向く。その目は大きく見開かれている。

「そんなことが…?」

「出来るわ」

それを言うと、彼女は瞳を潤ませながら言った。

「スノウの言っていたことは本当の事だったんだ…」

その後彼女がつぶやいた言葉を聞いた私はスノウにツカツカと歩み寄ってありつたけ勢いをつけて頭突きをした。

本気だったせいかな、私より石頭なはずのスノウがのたうちまわった。

何を言ったか?

恥ずかしいからいやよ。

「なあ、ほんとにカレン君連れて行かないん？」

ちょうど私たちが準備を終えて飛竜にまたがったときにスノウがそう聞いてきた。

「…そんなにカレンが嫌いなら素直にそう言えばいいのに…」

この依頼に連れてくなんてお腹をすかした狼に生肉を投げる様なものだ。

「ちゃっわわ！…まあええか、頑張つてな」

「うん、それじゃあね。…それからちゃんと禁酒してね、帰ったらマスターに聞くわよ」

殺生なあ…というスノウの声を無視して飛竜に上昇の合図を出す。

自業自得だ。

ドンツ！と音を立てて飛翔を始めた飛竜から最後に手を振っているスノウに手を振り返してから私は目の前を進む黒ずくめの乗った飛竜を追いかけた。

## 第6話

バサ、バサ、という羽音をたてながらゆっくりと飛竜がその高度を下げていく。

そして、ずうんという低い音とともに地面に降り立った。

「大丈夫？」

私はたった今降りた飛竜の頭を撫でながらレインに声をかける。

「…飛竜便はできれば遠慮したい…」

レインは顔を青くしながら首を横に振る。

「速さしか考えてないから仕方ないのよ。この子たちは特別なの」

聞く余裕がない、とのろのろ首を振るレインをみて肩をすくめているとレインを乗せていた飛竜を操っていた黒ずくめがこちらに歩いてきて言った。

「今夜はここで休憩にさせていただきます。野営の用意はこちらでいたしますのでゆっくりおやすみ下さい。明朝こちらで起こしますのでよろしく願います」

黒のフードの下から定型句のようにそう言っていると彼は荷物から道具を取り出し、野営の準備を始めた。

「…そういえば、なぜアリシアは一人で乗っていたの？」

多少顔色のよくなったレインが聞いてくる。

「私は一人で問題ないからよ。あの子も素直だったし」

「…まるで話していたような口ぶりなのね」

その言葉にぎくりとする。

「…まあ良いじゃない。とりあえず休んだ方がいいわ明日は早いらしいっ」

「…歩いて言っちゃダメかしら…」

残念ながらもね、と苦笑しながら言つと、レインは溜息を吐きながら樹に寄りかかる。

すでに夜の帳が降りてから大分経つのでそのまま寝てしまっただろっ。

そう判断してレインの前に自前の保存食を置くと再び2頭の飛竜の前に立つ。

黒ずくめは用意を終えた後は何も言わず座禅を組むように座っている。

私とレインたちを乗せてきた飛竜は体こそ休めてはいたがぴりぴりとした緊張感をまとったままだった。黒ずくめと同じように仕事の途中では眠らないように訓練されているのだろう。

「…大丈夫。陽香も焚いているし何も来ないわ…眠りなさい」



私は無意識に穏やかな声音を出して、子供をあやすように飛竜たちの頭をなんどもゆっくり撫でる。

黒ずくめは人だ。人間に人間を変えることはできないけれど、他の生き物なら別だ。

私がこの子たちと意思疎通ができるのはお父さんのおかげだ。魔物を材料として扱うレプラコーンは、どんな生き物とも意思疎通ができるのだ。それも、レプラコーンの息子であるお父さんが教えてくれたこと。

私が撫で続けているとやがて2頭の飛竜は寝息を立て始める。起きる様子が無いことを確認すると私は満足しレインの近くの樹に寄りかかって目を閉じた。

「よろしいですか？」

「…いい」

黒ずくめの問いにレインは嫌そうな声で、私は頷くことで肯定の意を返した。

「真昼には上空で合流し、そのまま依頼を行っていただきます。…

では」

黒ずくめが言うと飛竜は上昇を始める。私が乗る飛竜も長い首を曲げ、こちらに向けてきたときに頷くと、大きく翼を広げ、飛び始めた。

「どつという戦闘をするか決めているの？」

飛び始めてすぐにレインが聞いた。（恐らく気分を紛らわそうとして）

「…うーん、正直あまり」

「大丈夫なの？」

まあ、ね。と曖昧に言ってから私は続けた。

「この子の力を借りれば1匹はすぐに終わると思う。あと2頭は残りの二人とレインが組んで片方を相手してくればなんとかするわ」

「…自分が何言ってるか分かってる？」

呆れどころか、憐憫を含んだ視線を向けられた。

「…氷竜は単体なら精々B++でしょ。それに何度か相手してるから問題ないわ」

「竜種については一人で相手にすると大概A+まで引き上げられるでしょう…。それに何度か相手にしたって言ったって」

大丈夫、と遮ってから私は飛竜の鞍の上に立つ。

「!?!ちよっ!?!」

レインの声を聞きながら私は僅かにつま先でとんとんと飛竜に合図する。

ぐるっ、と短く低く唸った飛竜は私が鞍の手をかける部分に足を掛けた瞬間にレインたちの乗る飛竜を遙かに上回るスピードで斜め上に急上昇した。

鞍の上に立ったまましばらく飛行し、やがて意思疎通がすんなりいくようになったのを確認した私は鞍に跨り直してレインたちの元へ戻った。

レインに散々怒られた。

どうしても必要なことなのに…。

レインの説教が途切れた時に黒ずくめが「合流地点です」と呟いた。

私はすぐに進行方向を見やる。目を凝らすと僅かに飛竜らしき色が近づいてくるのが見える。

私は見計らってぼんぼんと飛竜の首を叩く。

指示通りに飛竜が空中で滞空するとちよつと向かい合う形になる。向かい合う相手は二人の黒ずくめと二人の冒険者と2頭の飛竜。

「…ずいぶんガキだな。しかもゴーストが付いてねえ飛竜ってのはどういうことだ？」

やや不審そうな低い声が黒ずくめの後ろから出された。ちなみに「ゴースト」というのは黒ずくめの通称だ。

私はこの通称は嫌いだ。あまりに彼らにとっては皮肉な言葉だから。

「…お話は移動しながらお願い致します」

合流した側のヴェールを被った黒ずくめが言う。

後ろからわかったよとさっきの低い声が答えた。黒ずくめたちが頷き合うと4頭の飛竜は進行方向を同じ方向に変えた。

しばらくしたあと、私の乗る飛竜にさっきの男の乗る飛竜が接近してくる。

「…お前、何もんだ」

そう言った男の鞍には槍が括りつけてあった。体格はそれなりに良く、金属鎧を着ている。

「…アリシアです。よろしくお願いします」

「…そういうことじゃねえ。お前はゴーストか？」

私はその問いに小さく否定で答えた。

「…お前が黒の女神だと聞いたが本当か」

「…ええ、まあ」

今度の問いは肯定。

そしてその後簡単な自己紹介をし、もう一人とも同じ様にする。

男の名はエディ、もう一人はエデッサというらしい。

その後は沈黙が空間を支配したが、しばらくした後、不意に低い雄叫びが轟いた。

「…予想よりもこちら側に移動していたようです。どこに下ろしましょ」

黒ずくめが聞いてくる。

「私はこのまま行くわ。レインは二人と一緒に行って」

了解、と肯定の合図を出したレインを確認した後、私は飛竜に合図を掛けた。

途端に耳鳴りがするほどの加速感が体を包む。

視界の端に微かに映ったレインたちの乗った飛竜は進行方向を斜め下に変えていた。恐らく着陸するつもりなのだろう。

それに対して私は高度を上げながら空を駆けていく。

しばらくした後私の視界に映ったのは互いに威嚇し合う2頭の飛

翔中の氷竜。

それぞれ少し赤く汚れているが、その白さを隠すほどではない。本来存在する標高の高い山ではないため緑の中にある不自然な白は正直あまり美しいものではなかった。

「…覚悟はいいわね？」

私がそう聞いた相手は他でもない私の乗る飛竜だ。

小さく唸った飛竜に私も頷き、鞍の上で剣を抜き放つ。

「…行けッ！」

高度を上げながらの移動だったので私たちは氷竜の上に来た時はそれなりに高度があった。

飛竜が私の指示通りに翼をたたみ風の抵抗をギリギリまで減らすと高度が下がり始める。

私が飛竜に指示したのは「垂直落下」。

私たちにより近いほうにいた氷竜に向かってスピードを上げながら頭から突っ込んでいく。

ゴウゴウと耳元で風が鳴る。

距離が近づく。

肉薄する。

湧き上がる恐怖を無理やり押さえつけて私は勢いをそのままに氷竜の首に向かって剣を振り下ろした。

## 第7話

氷竜の首の太さは私の腰の2から3倍くらい。私の振るった剣はスレイヤ一撃で首を完全に切断することは叶わなかった。

「っ！」

首を切られながらもこちらの方向を向こうとする氷竜に対して私は次の指示を飛竜の腹を足で軽く蹴って出した。

翼を畳んでいた飛竜はそれを氷竜に使い左側だけ展開した。その瞬間凄まじい推力と圧力が生まれ、推力は急転換で私が僅かに方向を変えた剣を再度切りつけた場所の奥に導き、圧力は私を飛竜の背から叩き落とそうとする。

「…くっっ…！」

圧力を受けて軋む全身と剣を握る腕に思わず呻き声を漏らしてしまいながら抗う。それになんとか耐えきった私は推力に従い2撃目を振るった。

だがそれは浅く、ガリガリと骨を削る感触までしか手には伝わって来なかった。

あとはもう放っておけば絶命するだろうが私はさらに追加の指示を飛竜に出す。

左翼の推力の残りではぼ水平の姿勢になっていた私たちは右翼を展開した飛竜の力で氷竜の傷口を覗き込む形になる。



むせ返るような血の匂いに表情を変える間もなく私は視界を赤に支配される。

飛竜へのこの氷竜の戦いで最後に出した指示はそこに突っ込むことだ。

「いつ、つけえ！」

掛け声とともに私の振りかざした剣は氷竜の首を完全に切断した。

もう1頭を手堅く手早くテキパキと倒した私は乾いても独特の臭さを放つ血に気分が悪くなり、着衣泳でそれを清めた私は、多少疲れた表情を見せる3人に不可思議なものを見る目を向けられた。

「…本当に、2頭倒したのか」

エディが唾然とした様子で聞いてくる。

「…ええ、倒しました」

「…その武器のおかげか？」

しばらく黙考し、エデツサと一瞬視線を負わせた彼は私の背中から覗く剣の柄を見ながら聞いてくる。

私はこの質問には即座に答えた。

「はい。この剣でなかったらもう少しかかっていたと思います」

「…その剣を打ったのは？」

少し考え、父ですと答えた私の声は咳くようなものだった。

「…紹介してくれ」

「…すみません、父は5年前に死にました」

それを聞いて驚くような顔をしたのはエディだけではなく私以外の3人ともだった。

「…そうか、すまない…」

さっきの私のように咳くように言った彼に気にすることはしないですと定型句を述べようとしたところに、あの無機質な黒ずくめの声がかかった。

「心玉の確認が取れましたので、これにて依頼完了と致します。お疲れ様でした。報酬はギルドに到着し次第お渡しさせていただきます。4名様で受けられたためそれぞれ銀貨20枚 2000エンとさせていただきます。帰還の準備ができましたらお呼びください」

そう言つと一歩下がって俯き、全ての動作を停止する。

私は いやおそらくここにいる全員も同じ気持ちだろうがこの動作をされるとどうしても急がなければという気持ちになる。私の推測を裏付けるようにいそいそと動作を始めた3人と共に再び空に舞い上がったのはそれから約10分後だった。

「……ってことはアリシアは飛竜に乗って戦つたってことか!？」

私の話を聞き終わった直後に目を輝かせたカレンを見て私はしまつたと思つた。

本来飛竜は移動手段であり、絶対にそんなことはあり得ないのだ。ギルドからも人に見られないようにときつく言われており、そこまで言うなら何故許可したのかとも思つたが、噂程度でも広がる、と面倒なことになる。

そんなことを考えた私はいつも私が受けている「約束」よりも更に強くカレンに「誓約」させた。

因みにこんな話をしているのは私の店の売り場内である。カレンに出会う直前に受けたオーダーメイドの武器の準備をしていると現れたカレンに話が聞きたいと迫られた私は仕事を後回しにして3日

かけて帰って来たばかりの体に鞭打ち話をしていたのだ。

「…了解…」

私とした「誓約」に至るまでの出来事に顔を青くしたままカレンはそう了承した。

「なあなあ、今度はいつ一緒に行けるんだ？」

その事を振り払うように無駄に明るい声でカレンが言った。

その無理やりにひねり出したような質問に私は少し呆れながら応える。

「あのねえ、私は鍛冶屋なの。必要な鉱石があったらギルドに依頼を出して手に入れる。基本的に依頼は受けないのよ」

「じゃあ俺に剣を打つかはいつ判断されるんだ？」

そうね…と私は少し考え込む。カレンは正直面白い。成長を見るのが楽しそうだというのが今現在の私の評価。

彼は磨く人次第で輝きも価値も変わる宝石の原石のようだった。ただここに彼を上手く磨ける人間はいない。

だから私は彼を間接的に育ててみようと思った。

手をかけず、様子を見ず、ただ自然に。

彼がどんな戦士になるかを見てみようと思った。だから保留ということになっている。

蛇足だが、カレンは盾を装備するようになった。カタナの所為で武器防御に躊躇が生まれてしまったため、私が渡したものだ。

私が作ったものじゃないけれど。  
剣も今は返却済み。

既成品なら格安で手に入れることのできる鍛冶屋……というか私の特権で手に入れたものを進呈した。

ただ鑄造で造られたそれでは彼の淀みない剣筋を完全に生かすことは無理だろうと思い、レベルの低い金属素材インゴットではあるが、カレンに新たな剣を打とうとも考えている。

そろそろ仕事をする、という私の言葉に「見たい！」と声を上げたカレンに苦笑で応じて工房のドアをくぐった私はすでに真っ赤に燃えている炉を見て頷き、予定の金属素材を炉に投げ込んだ。そして工房に入ってきたカレンに厳かに注意事項を告げた。

「話しかけないこと」

「静かにすること」

「恐らくかなり時間がかかるから熱にやられない内に出ていくこと」

「売り場に耳を傾けて対応しておくこと」

最後のはまあ…剣の貸し出し代金を待つ条件の一つ…ということにしておく。

真っ赤に焼けた金属素材を取り出しながらカレンの顔を見ると、カレンが小さく頷く。

私は小さく頬笑みで返してからハンマーを振り上げ、最初の1回目を聞こえるであろう快音に期待しながら振り上げた。

## 第8話

今日の天気は生憎の雨だったが、私の気分は悪くなかった。理由は簡単、物好きにもびしょぬれになりながらやってきたカレンがレプラコーンの謳を披露しているからだ。

斉唱の筈なのに伴奏やオーケストラの騒がしい音が聞こえてくるその謳は私の心を明るく陽気な気分にならせた。

「……………どうだった？」

長い余韻を楽しんでいた私に気を使って間を開けてくれたカレンに心の中で感謝しながら素直に感動を伝えた。

「…そっか、よかった」

ほっとしたような顔で言うカレンに思わず私は吹き出してしまう。

「な、なんだよ」

「だって…こんな謳が唄えるのにどうしてそんなにほっとしたような顔をするのか不思議に思えて…」

その疑問にカレンは嗚呼…と歯切れ悪く唸るように言った。

「…人に聞かせたことなんかないんだよ」

「ええっ？」

私はさつき以上に大きな声を出してしまった。最もこれには小馬鹿にしたような感情が含まれる余裕は少しもなかったが。

「…まあこれで稼ごうと思ったこともあったんだけど、なんか母さんに申し訳ない気がしてできなくてさ。まあアリシア相手なら母さんも怒らないだろうし」

な、という彼の同意を求める言葉に私は思わず「私を知るわけないでしょ」と冷めた応対をしていた。

なんだよー、とちよつと不貞腐れた顔をしたカレンにちよつと罪悪感を覚えた私は工房の中に引っ込み、ひと振りの剣と盾を手に持つて彼の前に出た。

「…なんだ？」

「一応、私がカレンに打った武器よ」

「え！？」

カレンがさつきの私の2回より大きな声を出す。

罪悪感はずかしくもあったのだが私はカレンの装備にガタが来ているのを見抜いたからこれを出すという行動を起こしたのだ。

「それ、切れ味悪いでしょ？」

「あ、ま、まあ。こいつじやなかなか片手じゃ振り抜けない相手も何体かいたな…」

カレンが腰の片手剣に目を落としながら言う。



「これは数%ずつだけどいくつかの鉱石を混ぜて切れ味と硬度を上げた剣」

カレンが顎を落としたのが見えたが、それを見なかったことにして言葉を続ける。

「こっちはこの間カレンと一緒に行ったモールの頭の骨を使って造った盾」

「はあ!!?」

今までで一番の声には私は思わず目を細め眉を八の字にする。

「…声大きい」

「あ…悪い」

そう謝ってからカレンは続けて言った。  
剣と盾について説明をしてくれ、と。

「合金の剣なんて2種合金しか聞いたこと無いんだが」

「え?それは鉄の割合を一番にしてそれから他の金属の機嫌を聞きながらちよつとずつ混ぜていっただけよ?鉄が主で入れた割合も大したことはないからそんなに難しいことじゃないわよ」

「…それ、ドワーフの…?」

まあ、ねと小さく言う。

金属の機嫌を聞くことはドワーフにとって特別なことではないので私としては誇りにすることではあっても、見せびらかすものではないと考えている。

同時にカレンがそんなことを言うまでもなくわかっていると考えた私は前のように「誓約」させることはなかった。

「…で、モールの頭ってというのは…」

私の腕の中にある盾を見ながらカレンがこれまた信じられないと言った顔で言う。

「あ、うん。切り取ってちゃんと加工したの」

「あれを切り取ったってのかよ…」

呆れていると表現するのが良いような気さえする調子でカレンが言う。

まああれの硬さを身を持って知ったカレンには苦々しい話なのだろう。

「コツと秘密があるのよ。まあ魔物の一部を武器に使うのなんか私くらいだから知っても意味は無いんだけれど…」

「…確かになあ」

自分がモールの頭を切り裂いている所を想像しようとしているのか、難しい顔をしながらカレンが頷いた。

「んじゃあ、まあ受け取ってくれる？」

ぐいっと二つの武具をカレンに差し出す。

「…でも…その…」

「なに?」

「……いくら?」

その上目づかいな目に私はまた吹き出した。

中性的な印象があるカレンがそれをやると…その…。

…やっぱり割愛。

「いいわよ、ツケで」

「でもね…」

ちよっとずつ返すから、と食い下がろうとするカレンに私は「一括で」という凄まじい威力の突きを与えてから武器を押しつけた。

「…何だこの剣」

渡された剣を鞘から抜いたときにカレンはそんな風に声を漏らした。

当然と言えば当然である。私の打った剣はの僅かに虹色…というかそれぞれの角度で色々な光を放っているのだから。

まあ純度が純度なので大した濃度ではないからかなり目をこらさないと分からない程度の僅かな可視光なのだ。

その筈なのだがカレンがそこまで剣に注目してくれたことに私が嬉しく思ったことは秘密だ。

秘密と言えばもう一つ。カレンに渡した剣の材料には宝石の類も使われている。

じゃないと緑や赤の色なんて出せないし。

ふわー、と言いながら剣を振り回すカレンをちょっとたしな窘める。

私の店の売り場は武器屋だけあって素振りのスペースはあるが、そこ以外だと危険なのだ。

「ちょっと」

「へ？」

私は有無を言わずカレンの腰に差しであった鑄造の剣を抜くと、カレンに「盾を構えて」と言っつてモールの盾を構えさせる。

私が何をするのか察したカレンが構えに力を入れた瞬間に私は右手に持った剣を叩きつけた。

。。。

べぎいん、と鈍い音を立てて私の手の中の剣が中ごろから折れる。

カレンが啞然とした顔をする中、今度は私がカレンの盾を構える。安いそれは剣と同じように軽かった。

「来なさい」

「…おう」

少し前より変化した構えで剣を構えた彼は私の構えた盾に振り下ろす。

カレンの本気の一撃はそれなりに盾を削り取ったが分断するまでにはならなかった。まあ私の腕を断たれても困るのでその点は助かったが。

「貸して」

カレンから剣を受け取ると私は目の高さまで盾を軽く投げ上げた。

「？」

カレンが疑問符を上げた瞬間に私はカレンが付けた傷とは別の方向に、十字架のようになるように剣を一閃した。

「！」

だが盾の傷が十字架になることはなく、上下に分かたれた。

「…おいおい」

「腕次第ってことよ」

「…へえへえ」

その後はまばらにやってくるお客の相手をしながらカレンと雑談をしながらこの日を過ごした。

第8話（後書き）

感想待ってます。

## 第9話

カレンに武器を渡してから約10日。

約3週間ぶりに私はギルドを訪れていた。

間が空いてしまっても気にせず、「何時もの通り」ギルドの扉をくぐった先にいたのはこのギルドの主だった。

見た目は20代後半のそれなりに整った細い顔立ち。その男は深い蒼のローブに身を包み、一見何も装備していないように見える。

だがこのギルドマスターの強さとそれを打ち消して余りある面倒くささを知っている私は迷いなく踵を返した。

「…アリシアか」

「……」

無視してもう一步。

直後、カウンターの前に立っていた彼は踵を返しドアを開けた私の正面　あり得ないことにドアの外側に立っていた。

「……おはようございますマスター」

…どうやったらそんなことができるんですか？

そんな風な考えも込めながら挨拶する。



「他人行儀過ぎるぞアリシア……」

「マスターには敬意を払うべきだと思ひまして」

お前の親父がそんな風に教育するわけ無かるう、と言われた私は止むなくもう一度踵を返しながら言った。

このマスターのしゃべり方は古臭い。外見とは真逆だ。

「わかったわよ、おじさん」

私はマスター……いや、おじさんの反応を見ずにスノウの座るカウンターに歩み寄る。

「……おじさん帰ってきてたの？」

そう言った声は咳きのようにひそひそしたような小ささだった。

「ついさつき帰ってきたところや、別に引き合わそうと思つとつたわけやない」

「……どうだかね。そだ、鉱石収集の依頼は？」

肩をすくめながら言う。

女性にあるまじき「けっ」という舌打ちと共にスノウはカウンターの下から一抱えはある皮で出来た袋を取り出した。

スノウがほい、と差し出したそれを受け取り、カウンターの上で袋を開け幾つかを手に取ってみる。

「……こんなものなのかなあ……」

「んー、予想はしとったけどそんな反応かいな…」

スノウの多少がっかりしたような声に小さくしょうがないでしょ、と答えてから続ける。

「このあたりの鉄鉱石の含有量が減ってきてるみたいなのよね…」

「んー、多分ちゃうねん」

「へ？」

スノウの言葉に反応したのが悪かったんだと思う。目を輝かせたスノウがまくしたてるように話したのは厄介な依頼だった。

「ふーん…」

「な、な？頼むで」

スノウが私に話したのはこのあたりで最も質のいい鉄鉱石の採れる坑道を荒らす魔物の退治だった。

「…どうしてそこからのの？」

スノウがあのだ大本からその依頼書を取り出したのを見て私は理由を尋ねる。

「あー、これな。この依頼はまだ標的が何か特定できてないんや、高位モンスターとしか。討伐まで含むとこの難易度…ちゅうかアリシア個人への依頼になる」

「なんてはた迷惑な…じゃあ調査だけの依頼は出てるってこと？」

おう、と答えたスノウの声を聞いた私は即座に依頼板に手を伸ばす。

がしっ。

即座に手を掴まれる。

「ちょお待ちいや」

「いいじゃない調査だけでも」

「駄目や」

何故か必死な形相の彼女に思わず怯む。

「じゃあ頼むで」

「…分かったわ」

私の言葉を聞いたスノウが大きな、それでいて多量の安堵を含んだ溜息を吐いた。

私がそれに違和感と危機感を覚えたときにはもう遅く、おじさん

の手が私の肩を掴んでいた。

「…え」

「いくぞアリシア」

「へ…？」

どうということ…とスノウに問いかける前にごめんなー、と謝っているのが見えた。

「…はあ」

私が溜息を吐いた瞬間にギルドの扉が開き、誰かが入ってくる音がした。

「…アリシア？」

振り向いた途端に私の名前を呼んだのは少し汚れた格好をしたカレンだった。

格好に反して軽い足取りでカウンターに近づくカレン。

「何の依頼？」

「ん、討伐」

へー、と相槌を打つ。討伐と言えば大概、というかほとんどがパーティーを組んで行うものだ。ちょっとは成長したらしいカレンに今度何か奢ってあげようかな、などと考えているところにスノウが言

ったことに私は思わず間の抜けた声を出してしまうことになる。

「ちゃんと出来たみたいやな。これでカレン君はランクがB+に上昇や」

「えっ？」

私の出した声に視線が集まる。

思わず押し黙ってしまう私にカレンが助け船を出してくれる。

「…そういや、どっか行くのか？」

「あ、うん。討伐依頼に」

「儂とな」

おじさんが横から言う。そこで初めておじさんに気付いたようにカレンが慌てて腰を折る。

「あ…おはようございますマスター！」

「気にせんで良い。…む、それはアリシアの造ったものか？」

カレンの左手にある盾とそこに差した剣に目を向けながら言う。カレン、いつの間に剣の場所を変えたんだろう。

「は、はい」

「ふむ…中々…。アリシア、カレンにはあの事を話してあるのか？」

武具をもごもごとした口調で評価した後、こちらを向いて聞いてくる。

「あ…まあね。ていうかおじさんカレンの事知ってたの？」

その疑問におじさんは「ギルドメンバーの事を知らぬわけがなからう」と胸を張って言っていた。

「ふむ…アリシアの認めた者か…。よし、1日出発を延ばす。カレン、儂がアリシアと行く予定の依頼に来んか？」

いきなりそんなことを言い出したおじさんに私は動揺し、声をかける。

私個人に来た依頼だ。カレンを連れていくのはまだ早い。

「ちょっと、おじさん」

「良いんですか!？」

私の声は何故かやたら嬉しそうなカレンの声にかき消された。

「カレン!？」

「うむ、勿論じゃ。じゃがとりあえず今日は休むといい」

はい!とやたら元気に言うカレンとおじさんを思い切り睨む。

おじさんもカレンも大いに怯んでいたが、結局意思を変えることはできなかった。

研磨を頼む、というカレンに鉱石の並々入った袋を押しつけて工房に帰ってきていた。

「…どうしておじさんがいるの」

工房の裏側に一緒に廻ってきたカレンの為に鍵を開けながら付いて来たおじさんにちよつと剣呑な目つきで聞いた。

「ちょうど武器を切らしたので。アリシアの武具なら3撃は耐えられるし」

「壊す予定の人には売れないわ。鉱石たちの機嫌が悪くなったら堪えないし」

おじさんの、いやこの戦士の戦い方は誠に武器屋が喜ぶ 例外だが 戦い方だ。 私は

彼の使う武器は大概一撃で壊れてしまう。それほど圧倒的な脅力なのだ。それは鉄甲などでも同じで、それ故におじさんは多量の武器を持つ。

だけど私にとっては迷惑極まりない。  
主に、先に述べた理由あたりで。

それに私の武器は鑄造ではないのだ、手間暇かけて造る大事なものの。

「…儂がただぞんざいに扱っているわけではないと知っておるじやろっ?」

「…まとめて置いてあるのを使って」

そう、彼は壊してしまった武器を必ずひとかけら残さず集めて取っておくのだ。そのためおじさんの部屋はいつも鉄錆の匂いにする。

「言い忘れておったがの」

剣、槍、斧、と選び手に取りながらおじさんが言う。

「なに?」

「今回の依頼の奴はの、『魔剣持ち』かもしれん」

「うそっ!?!?」

まだ確定ではないがの、というおじさんの言葉にちよつと落胆してしまふ。

モールの盾を手に取り、磨き始めたところでカレンが声をかけた。

「なあ、『魔剣持ち』って?」

「え、知らないの?」



うん、というカレンに驚きながら、私はしばらく言葉をまとめてから声を出した。

「まず…魔剣っていうものは、何らかの理由で偶然魔物の体内に取り込まれてしまった武具が心玉と融合してできたものなの」

「そうなんだ…」

感嘆した様子のカレンと同じように頷いてから説明を続ける。  
因みにそれが槍だろうが防具だろうが『魔剣』と呼ばれる。

「それを体内に持つものが『魔剣持ち』。どういう理屈かは分からないけど魔剣持ちはとても強くなるから任務のランクが二つあげられるのよ」

現に今回もB++からA+に上がっているし。

「そ、そんなに？」

「うん」

青ざめてしまったカレンに私は「残念ながら」と続ける。

「『魔剣持ち』が体内に持つ魔剣の全てが強い力を持つわけではないの。大概は奇形だったりしちゃう。その中で人間でもまともに使える一握りが本当の『魔剣』なのよ」

「じゃあ今回手に入れるかもしれないものが使えるものかも…」

「うん、わからない」

そかあ、と肩を落とすカレンを宥めながら今度は剣の研磨に入る。

「…なあ、心玉が武器と融合しちゃってどうしてその魔物は生きていられるんだ？」

鋭いカレンの指摘に私は舌を巻いた。

「…まだ詳しくは説明されてないわ」

そうか…。と黙り込んだカレンにちょうど研磨を終えた得物を差し出す。

「すっかりご機嫌になったわよ」

「あ、ありがと。えーと…」

そう言いながら懐を漁る。

「全額揃った？」

「う…」

動きを止めて黙り込むカレンにじゃあいいわ、と声をかけてから工房を出て売り場を漁っているおじさんに声をかける。

「決まった？」

「おう」

「そつと差し出されたのは斧が1つ、剣が4本、槍が3本。

「さんぜ…」

「これでいい」

二枚の金に輝く硬貨を放ってくる。私は何も言わず受け取る。どうせ何時もの事だ。言っても聞きはしない

その後カレンとおじさんを帰し、私は体力のぎりぎりまで鍛冶を続けていた。

## 第10話

「アリシア、酷い隈…」

私の顔を見たカレンの第一声はそれだった。

「……うるさい」

私はあくびを噛み殺しながらそれだけ言った。

大変なんだ、武器の芯まで浸食した魔物の血を浄化するのは。

ただ疲れで瞼が重くなるとあのレインの表情が浮かび、どうしても眠れなくなってしまふのだ。早く終わらせないと私の命に関わる。

「無理しなくても…」

その原因になった人は朝早いのに私の見送りに来ていた。

「早く受け取って欲しいからさ。造形は変わっても文句は言わないでね？」

「勿論。アリシアが造ったものなら何でも」

微笑みを向けてくるレインに小さくお礼の言葉を言ってから馬車の中に入る。

「…では行くかの」

「うん」

私がそう答え、カレンに目を向け、彼が頷きで返すと馬車は地面を蹴り始めた。

「…そうだ、今ある範囲で良いから情報を教えてよおじさん」

「うむ、それがよからうよ。…今のところは犠牲者が14人。それだけじゃ」

私は思わず眉を寄せる。

「どうしてそんなに？」

「最初に坑道に鉱石採集に行ったC＋ランクが3人のグループが行方不明になったのじゃ。ただ時間無制限の依頼での、黒ずくめも様子を見たんじゃが逃亡と判断されての。その後Bが1人にCが3人のグループが同じ様に失踪。

依頼を取り下げて調査で送った別の町のギルドのBが7人のグループの最後の連絡で何かがあることが分かった。…残念ながらその程度じゃ」

「他はともかく、Bが7人のグループが一度にやられたっていうのは異常ね…」

大概のギルドのポリウムゾーンはDかCからBだ。

その依頼も余裕を持って、いや持ちすぎるレベルの7人で受けたのだろうから尚更おかしい。

「…だからわざわざおじさんが出張ってきたのね…」

私の指摘におじさんの目に僅かに動揺が走った…気がした。  
一つの瞬きの後にそれは消えてしまっていたが。

「今回魔剣は私が貰っていいのよね？」

「儂は、構わんぞ」

儂は、を強調するおじさん。

その意味を察し、私はカレンに目を向ける。

「…あ、ああ。俺が魔剣を貰ったってしょうがないしな。今回俺が  
頑張るのは死なないことだ」

その言葉に私はニコッと笑う。

「よかった。…そうだカレン。厳密には、というか大雑把な分類で  
言うならカレンはもう魔剣の所持者なんだよ？」

「は？」

カレンの予想通りの反応に思わず笑いを漏らしてしまう。

そんな私に不満そうな顔で何度も聞いてくるカレンに、私は理由  
を語る。

「私の造ったそのモールの盾、それが魔剣」

「なんで…あ」

何かを悟ったような表情になるカレン。

「そう、魔物の一部を使ってるから。天然の魔剣は心玉と魔物の肉体と武器の融合で造られる。私のは魔物の一部を使って造られる。「心玉と融合していること」で分類するなら違うけれど、「魔物の肉体の一部が融合していること」なおかつ「他の武器と比べて性能が高いこと」だったら私がレプラーコーンの技術を使って打つ武器は魔剣って事」

いつかの滅竜剣もそれにあたることになる。

「そんな風に考えたことは無かったな…。はー、こいつが魔剣、ねえ」

カレンが感嘆のため息を漏らすと同時に私は大きなあくびを漏らしてしまう。

目に涙を浮かべたままカレンを見ると、思い切り苦笑される。

「今なら鍛冶はできないんだし、何か唄おうか？」

ちよつと考えたあと「お願いするわ」と短く言う。

「おじさんがいるけど、いいの？」

カレンの謳は一応特別なものはずだ。

そんな私の心配を余所にカレンは「マスターなら問題ないさ」と微笑して、口を開いた。

流れてきた旋律は、優しくて温かいからきつとプーカのものだ。

「…ほう、いいの」

おじさんが微笑を浮かべて聞き入っている様子と、柔らかいカレ  
ンの表情を最後に、私は意識を手放した。

「……しあ……アリシア、ついたぞ？」

優しく揺さぶられながら柔らかい声で名前を呼ばれた私はゆっく  
りと目を開ける。

「……起きた？」

「……ん」

頷いた後に小さく伸びをする。

……おじさんがいない。

それを言葉にする前に、周りを見回した私をみてカレンが伝えて  
くれた。

「マスターなら黒ずくめと話してるよ」

「そっか……」



「よく眠れた？」

私は恥ずかしくなり、小さく頷くだけに留めた。  
それを見てカレンが浮かべた微笑に私は…

なんだか私らしくない…。

そこで思考を無理やりに中断し意識を切り替える。

私は守らなければいけないのだ、この小さな剣士を。私の武器を  
誰かのための武器にしてくれる彼を。

「研ぎ澄ます。研ぎ澄ます。研ぎ澄ます。」

私を、剣を、意識を。

私は、守ろう。

「カレンは、私が守る」

自分に言い聞かせるように言った私に、カレンが苦笑する。

「嬉しいけど、それはすごく複雑なんだけどな…」

「なら早く強くなりなさい」

「…だな」

頷いたところで、馬車の幕をおじさんが捲って顔をのぞかせた。

「用意は良いかの？」

「うん」

私が答えるとおじさんは幕を捲り上げて私たちが出やすいようにしてくれる。

馬車の外は、黄昏の色に染まっていた。

でもこの色は…。

「夜明け？」

「一晩移動しておったからの」

「じゃあ私は丸一日寝てたの？」

うむ、と肯定するおじさんに私はくらくらと来た。

およそ24時間。そんなに私は疲れていたのか。

「儂も似たようなもんじゃぞ、恐らく途中からセイレーンの謳に変えたからじゃろっ」

「ええ？」

思わずカレンの方を見やる。そしてカレンを問いただそうとして、一瞬固まる。そしておじさんが何を言ったのかもう一度反芻し、おじさんの方を再度向く。

「カレンの謳の事…なんで知ってるの…？」

「なんも難しいことはないぞ？アリシアの秘密を知る人間がどんなもんか聞いてみたくなって聞いたら答えてくれたんじゃよ」

予想通りではあった。私しか知らない秘密では無くなったことが少し寂しいような気がして…そんな考えが形を成す前に私は背中の剣を僅かに抜き出し、高く音を立てて戻すことでそれを打ち消した。

「さあ、いっ」

「じゃな」

「おう！」

私たちが坑道の入り口に着いた時には馬車を出てから15分程度

しかたつていなかった。

「随分近くまで送ってくれたわね…」

「儂が頼んだんじゃよ。骨はなるべく早く拾って欲しいからの」

「おじさん、私がここで骨にしようか？」

背中 of 剣に手をかけながら言うとおじさんは「怖い怖い」と言いながら両手を上げる。

冗談には言っていないことと悪いことがあるのよ。

「先頭は私。真ん中がカレン、しんがりはおじさん。異論は認めない。戦闘に入り次第カレンは距離をとること」

それを聞いてカレンは悔しそうに顔を歪めたが、やがて頷いてくれた。

坑道の中は、入口こそ朝日が入り込んでいたが、中はかなり暗かった。

「なるほどのう…証明を壊しておるのか…Bの連中は恐らくこの暗闇でやられたんじゃろうのう」

砕けた照明の残骸を見ながらおじさんが言う。

「…まずいわね。カレン、暗視はできる？」

「…無理」

カレンの言葉は予想通りだったが、私は頭を抱えなくなった。ただそんな時間は無いのだ。

「おじさん、ここにどこか開けた場所は!？」

「…たしかしばらく行った場所に広間のようになつとる場所がある。そこまで行ければ…」

「了解!カレン走って!」

私は一歩後退して左手でカレンの手をとり、思い切り地面を蹴る。カレンが泣き言らしきことを言っていたが無視する。

ものの数十秒も走ると、私たちの目には目的地が　カレンにはまだ無理だろうが　暗い闇の口を開けているのが見える。

「飛び込むよ!」

スピードを落とさず、大きく口を開けた闇に飛び込む。ざざざつ、と地面を削りながら緊急停止。

そこで私は無意識に抜刀し剣を横薙ぎに振るった。

重い衝撃が腕に伝わり、剣が振るった方向とは逆に弾かれる。

「もういる!カレン下がって!」

私は掴んでいたカレンの手を離し、叫ぶ。

本能が言っていた。

こいつは違う。

私が今まで相手にしてきたどんな魔物よりも強い。

どんな魔剣持ちとも違う。

「なんとまあ…こやつは…」

おじさんが武器を構えながら言う。そして私の目も輪郭だけだった敵の姿を暗闇に浮かびあがらせた。

「…こいつは…！」

その姿の名が頭に浮かぶ前にこいつが動く。

私は地面を蹴ってそいつの腕を受け止めた。

まともに受けてはまずいと直感し、力の方向を肩の上にならずらしてそいつの腕が流れたところに剣を叩き込む。

「やあっつ！！！」

だがその前の動作で力が緩み、私の剣は僅かに皮膚を切るにとどまる。

そのまま腕を引き絞る。私の単発では最も重い攻撃である突き。タイミングも、速さも、威力も。

当たると認識したときにはこいつは私の剣から逃れていた。

恐らくそれは強靱な足の筋肉が可能にしたもの。

それがもう一度足に力を込めた瞬間、そこに槍が飛び込む。今度は横に避けたそいつを見ながら、槍を投擲したおじさんが横に並ぶ。

だいじょうぶかのか？という問いに頷いて答えるとおじさんは続けて「やれやれ」と言った。

「まさか神話の獣と闘うことになるのはの」

「その形をしているだけでしょ」

そう、そいつはある獣の形をしていた。

巨大魚の姿をしていたとも、ドラゴンの姿をしていたともいわれる神話の獣。

ベヒモス、ビヒーモスとも呼ばれるが大概はこう呼ばれる。

「…バハムート…」

私はその名を呼びながら、ある決意をしていた。

## 第11話

「ふっ！」

懐に飛び込むという無茶をしてまで放った一撃が出した結果は繰り出された左腕の一撃を弾く事だけだった。

このバハムートは神話と違い闘うことに特化しているようだった。右手は手の甲に剣が癒着しているように見える形状。

左手は籠手を装備したように硬くなっていて肘から下は傷つけられないほど硬い。モールもこれで殴られたら頭蓋骨骨折するだろう。

ある意味では最強の片手剣士かもしれない。  
バハムートというよりはバハムートもどきだ。

私は大技主体から切り替え、  
小さく突き、斬り払い、弾く。<sup>バライ</sup>

突き、斬り払い、弾く。

突き、払い、弾く。

突く、突く、斬る、斬る、弾く、刺す。

戦いが加速していけばしていくほど私の意識は冷えていく。  
不意に、左手が繰り出される。

薙ぎ払うような動きを私は足の裏の蹴りで叩く。



が弾く事は構わず、思い切り弾き飛ばされる。

「っ  
「！」

骨盤に足を埋め込まれるかと思った。

「らしく、ないのうっ！」

おじさんが飛び出し、やたらと大きな大剣を両手でバハムートもどきに叩きつけた。

バハムートもどきが右手でそれをガードした所為で、バギンという音と共に大剣が折れ飛ぶ。

ただノーダメージとは行かなかったようで、ガードした場所が欠けている。

おじさんはあるうことが振り切る前に武器を切り替えて槍で突きを繰り出すことで攻撃後の隙を潰した。

おじさんが用意した武器は私の店で買ったものを含めて11本。すでに3本を失っているからあとどれくらい戦えるかわからないが、倒すには至らないだろう。

私はおじさんから見える位置で地面を蹴る。それを見たであろうおじさんが斧を叩きつけることで隙を作ってくれる。

離れ際に頷いたおじさんに頷き返すと私はもう一度相対する。

相手にあった隙が消える最後の瞬間に私は

左腰にある剣を音高く抜き放った。  
そして私は左右の剣を入れ替える。

「!？」

後ろでおじさんが息を飲むのが聞こえたが私は両手に剣を構えたまま走りだした。

5メートルほどあった距離を二歩の跳躍で潰すとまず右手の剣を突きだす。

これは左手で受け止められる。  
だがその威力はさっきとは段違いでそのまま左手を貫通する。

「ギユアツ!？」

そんな奇声を上げて下がるうとするバハムートもどきに更に左手で斬りつける。

肩口を斬りつけられた相手は退こうとするのを止め、奇声を上げながら突進しようとするが、

「黙りなさい」

私はそんな一言と共に引き抜いた右手の剣で心臓から脇腹に向かって深く斬る。

構えられた右手が僅かに怯んだのを視覚以外の何かで認識した私は左手でそれを跳ね上げると右の剣を心臓に突き込む。

だが私を待っていたのは硬い衝撃だった。

腕が不快に痺れるのを感じながら思い出す。

忘れてた、魔剣持ちは心玉が武器になっているんだから心臓を狙っても意味がないのだ。

魔剣をそのまま体外に抉り出せばいいが、それはできないようだった。

私の技後硬直が解けるまでバハムートもどきは動かず、私は次の一撃によって首を落とすことで今まで相まみえた中で最も強い敵を屠った。

「ビビビビヤッ」

「…もうすぐ。あ…！」

切り開いたバハムートもどきの胸から覗いたのは大きな金属素材インゴットだった。

「てつきり盾か何かだと思ったのに…」

「ふむ。今までにない魔剣じゃの。武具の形状をしておらんとは…」

カレンは少し離れた所で所在なさげに立っている。

「でもこれがとても優秀な何かであることは間違いないよ。お母さんたちの最高傑作でも傷一つで済んだんだから」

私は自分の腰の剣を見ながら言う。

「そうじゃのう。もしこれで剣を造れたら儂が使っても壊れんかもしれんが…」

口をつぐんでこっちを見るおじさん。

「駄目だよ、約束は約束。私が貰う」

わかつとるわい、と残念そうな顔をするおじさんを見て少し笑ってしまふ。

そして私は覗かせた真ん中が僅かに傷ついた金属素材をバハムートもどきの血と肉に顔をしかめながら持ち上げようとした。

そのあまりの重さに小さく声を上げてしまふ。

私の持つどの剣よりもずっと重いそれに驚く。

気を取り直して持ち上げたそれをおじさんに見せる。

「そんなに重いのかの？」

「うん、ほら」

そう言っって手渡す。おじさんは私以上に驚いたようで目を見開く。

「重さは金の比じゃないのっ…」

「硬さもね」

「どんな武具を造るつもりじゃ？」

私は満面の笑顔でこう答えた。

「勿論、剣よ」

私は戻ってきてそのまま自分の店にカレンを招いていた。

「カレン？」

ちょっと心配になって顔をのぞきながらカレンの名前を呼んだ。やたらと怖い顔をしている。

「…あ、ごめん、何？」

「いや、すごく怖い顔してたから」

その言葉にカレンは小さく謝罪の言葉を述べて俯いてしまう。

「あれのことなら、気にすることはないよ？おじさんもまだ早かったって謝っていたんだし、許してあげてくれない？」

私の言葉をカレンはそうじゃないんだ、と小さく否定してから言  
った。

「世界は広いなあ、って…」

やたら深刻な顔で言うカレンに私は思わず吹き出してしまう。

「ちよ、ひど…」

「あっはは、ごめんごめん」

一度言葉を切ってから私はでも、と続ける。

「自分と世界を、目を逸らさずに見つめられたら、きつと強くなれる」

それだけ言うと、顔をばっと上げたカレンとは対極に私は顔を下げ  
げる。

そして魔物の血の浄化に必要な材料を取ると、工房に引っ込んだ。  
また眠れない夜になりそうだ。

## 第12話

「…おわつつつたあああああつ　　！！！！！！」

終わっているのは私の頭じゃない！

断じて！

レインの剣の修理、というか蘇生がだ。

やや太さが減じられたが、ミスリルと水銀と金を配合したため重さは僅かに増えている。

修理ではない。

蘇生、「甦り」だ。

「そつだ…名前…付けようかな」

三日徹夜の後跳ねまわった所為で疲れて息も絶え絶えになった所で私はやっと冷静さを取り戻した。  
誰にも見られなくて良かった…。

私はしばらく考え込み、一番最初に浮かんだ名前を柄の内側に彫り込んだ。

『不死鳥剣』



この剣は甦る、例え百度壊れようと、千度砕かれようと。私は続けてすぐそばの布に包まれた「あれ」を持ち上げる。

相変わらず重い、がこれを剣にできれば最高の剣ができることだけは確実だ。

私はまだ強くないといけないようだけれど。

私は気合と期待と複雑な想いを込めて炉の中に金属素材メタルを投げ込んだ。

5分。

10分。

15分。

30分。

1時間。

私は諦めた。

どうやら今の炉の温度では足りないらしい。

そう認識した途端、今まで麻痺していた疲れが体をむしばんでいく感覚が分かった。

私は最後の気力でインゴットを取り出し、僅かに紅くなっていただけだった。道具を片づけ、下着だけの姿になった所で私はベツドに崩れ落ちた。

…あれ…？

謳が…聞こえる…？

それはいつか聞いた事のある謳。

聞くものを労り、優しき旋律で癒す。

そんな、謳。

でもそれを謳う彼はここにはいないはずなのに…。

夢、かな？

私に訪れた眠りの帳しほりはこんな夢を見せてくれるのか。

私の記憶の中にある彼の謳で私を癒してくれるのか。

こんなに幸せな眠りがあるだろうか。

私はなんとなく手を伸ばしてみた。

こんな夢の中に一人でいるのはもつたいない。

彼がいたら、あなたの謳がどれだけ素晴らしいか、教えてあげられるのに…。

……手が、温かい……？

私の手は誰かに握られているみたいだった。

夢現のまま私の手はその誰かの手の体温に蕩けてしまっ……。

……て？

私はゆっくり目を開けた。

「お、おはよう」

「……おはよう」

予想通りというか、案の定私の手を握っていたのはカレンだった。

「私の下着姿の観賞会は楽しんでいただけたかしら？」

寝る直前の記憶を手繰り寄せながらわざと冷たく声を作って言う。

私の体には布団が掛けてあったが、その下は眠りこんだときと同じ下着姿だった。

「や、俺は見えてない！ちゃんとすぐ布団をかけた！」

顔を真っ赤にしながら言うカレンはとても嘘を吐いているようには見えなかった。

それを観察する余裕があるほど、布団をかけてくれる前に見られてしまっただろう姿もどうでもよくなるほど、私は機嫌が良かった。

「それはもういいわ」

「へっ？」

間抜けな声を出すカレンに向かって微笑みながら続ける。

「ギルドに行きたいんだけど、一緒に来てくれない？」

「あ、ああ。俺で良ければ」

頷いたのを確認したところで私は布団を剥ごうとする。

「わ、ちょっと待った！」

「大丈夫、私今機嫌がいいのよ。多少見られたくらいじゃ動じないほどにね」

変わらず笑いながら言うと、カレンは顔を真っ赤にして部屋から出て行った。

うん、紳士的だ。

あるいは臆病かな？

どっちでもいいけど。

私は鼻歌を歌いながら着替えを済ます。

今日は依頼に行くわけではないので簡単な黒基調の動きやすい服。

ドアを開けるとカレンがちょっと仏頂面で立っている。

ちょっとからかい過ぎたかな、なんて反省してからカレンを促し

て工房に降りる。

そして私は工房の中にあるレインの剣を取り上げてカレンの前に  
「どうよっ？」と突き出す。

「…その…」

「ん？」

「…恥ずかしい話なんだが、言葉にならない」

呆けた顔で言うカレンに思いつきり吹き出す。

カレンがさらに仏頂面になったが、私は気にせず、自分の甦らせ  
た剣とカレンの呆けた顔を交互に見、思い出しながらほくほくして  
いた。

「スノーツ！」

私はギルドの扉を突き破る勢いで開けるとカウンターに駆け寄る。

「な、なんや、やけに機嫌ええな」

「レインは!？」

「レイン?……もしかして完成したんか!？」

私の問いの意味を察して今度はスノウが顔を近づけてくる。  
私は距離を気にせず、うんと大きな声で答える。

「ほら！」

「ごっ、とカウンターの上に鞄、更に布でくるまれた長大な塊を置く。」

「なあ、ちよつと見」

「レインに聞いて？」

ええーっ！と抗議の声を上げたが無視。

再度レインについて尋ねると、カレンほどではないが、ちよつと仏頂面になりながら言った。

「一昨日近場の掃討依頼を受けたところやからそろそろ帰ってくるで。適当に出すから座つとき」

「わかった！じゃあステーキ！」

なんだかひどく子供っぽくなっている自分がしつかりわかるのだが、そんなこと構わないと思うほど気分が良かった。

「無茶言つなや！」

そんなやり取りをしていたら、外で馬車の音がする。

私は弾かれるように立ち上がると、ギルドのドアを入れて来た時以上の勢いで開く。

ギルドの前に止まった馬車からちょうど出てきたのはレイン。

ではなくおじさんだった。

「お、おじさん!？」

三日と開けずに来るとは珍しい。

そんなことを考えているとこちらをみたおじさんが唇を吊り上げた。  
…まずい。

本能的にそう判断した私が逃げられる場所は……なかった。

前には馬車、後ろにはギルドの入り口、以上。

「アリシア、ちょうどええのう。お主に頼みたいことがあるんじゃないが」

満面の笑みのおじさんを見ながら私はどうやって切り抜けるかしか考えていなかった。



### 第13話

「……おじさん」

「なんじゃ?」

「どうしてこうなったの?」

「……返す言葉もないのう」

おじさんの腰にしがみ付いて馬車から下りてきたのは二人の小さな少女だった。

容姿から見て双子だろう。

痩せていて纏っているのは質素なワンピースのような服のみ。

年齢は10くらい。

「返してきなさい」

「いや、彼女らは奴隷市を潰した時に連れ出したうちの最後の子じや。片割れの容姿を見て分かると思うが、アリシアしか当てがおらんのだじゃ」

私はあえて口にしていなかったが、子供ながらに美しく整った瓜二人の容姿は、あまりに瓜二つで、あまりにかけ離れている。

片や目の覚める様な白金色の髪に同じ色の瞳。

片や色の抜け落ちた真っ白な髪に血を零したような淡紅の瞳。

そして最大の違いでもある健康的な肌と病的なまでに白い肌の色。恐らく色素欠乏とか色素異常とかそういう類の先天性の病気だろう。

たしか…アルビノ？

「あ、あのっ！」

おじさんの腰から離れて声を出したのは健康的な方の少女。悲痛な色を浮かべて言う。

「私、何でもしますっ！お姉ちゃんを面倒見てもらえませんか！？私なら売り払って貰っても構いませんから！」

一体、どんな体験をしたらこんな言葉をこんなに小さな少女がこんな言葉を吐くようになるのだろうか。吐かなければいけないようになるのだろうか。

「…おじさん」

私は少女の目から視線を外さず言う。

「なんじゃ？」

「どうして私を選んだの？」

「…この子らもまた七刀の犠牲者であるからじゃ。…そして何より、アリシアなら容姿など気にせんじゃろっ？」

儂の身の上では世話できんしのお、といたずらっぽい笑みを浮かべながら続ける。

「アリシアが代わってくれるのなら話は別じゃが」

「嫌よ」

折角の特別ランクなのにお、とぼやくおじさんに話がまずい方向にそれたと思った私はおじさんを見据えて言った。

「…いいわ、私が面倒をみる。…あなた、名前は？」

私の言葉に目を輝かせたが、質問には困ったような笑顔になる。

「わたし達、物心ついた時から奴隷商人をたらいまわしにされて名前が無いんです。もし御迷惑でなければ、ご主人様が付けてもらえませんか？」

「……わかったわ、あなたもこっちにおいで」

私はもう一人の方に向かって手招きする。

しばらくギョツとおじさんの腰を握っていたが、健康的な方の子に目を合わせると小さく頷き、駆け寄ってくる。

「……そうね…。あなたたちは双子だから…私の名前を2つに切つてあげる」

そう言うと双子は全く同時にコクコク頷く。

「あなたはアリス」

髪の白い子に目を合わせて言う。

アリスはまたコクコク頷く。

「あなたはシア」

今度は健康的な子に目を合わせながら。

シアも同じ様にコクコク頷く。

「覚えておいて欲しいのは、私の名前があなたたちの名前の一部にある限り、私たちは家族だということよ。今までが今までだからわからないこともたくさんあるだろうし、不安な事も多くあるだろうけど…。その時は私を頼ること。それを約束して」

私の言葉は届いただろうか。

双子は私の言葉に一度だけ力強く頷いた。

「…アリスアール？」

あ、忘れてた。

いつの間にか蚊帳の外だったカレン。

「その子たちの面倒見るんだよな？」

「うん」

「買い物あるだろ？付き合おうか？」

そう言えばそうだ。

「お願いするわ」

そう言つとシアが不思議そうにこちらを見ている。

「…シア？」

「この方はご主人様の旦那さまですか？」

…女の子はませるものなのかなあ…？

「うっん、この人の名前はカレン。私の店のお得意様よ。今のところツケ払いだけだね」

「ちょ、アリシア人聞き悪い！」

抗議を「本当のことじゃない」、「と一掃してから双子に向き直る。

「二人のサイズは適当に見つくるうけど構わない？」

「勿論です」

「よかるうよ」

……………！？

「アリス…？」

私は淡紅の瞳の少女の名を呼ぶ。

お願い、聞き間違いであって！

「なんじゃ？ご主人」

それを聞いた瞬間に私はおじさんに肉薄していた。

背中に手を伸ばして…あ、今日は持つてなかったんだ。

仕方なく思いつきり冷たく剣のような視線を向けることで我慢する。

「おじさん…？」

「わ、儂の所為じゃないぞ？私は何も吹き込んでおらん！」

「じゃああれはなに！？」

冤罪じゃー、と叫ぶ声がギルドにこだましたという。

「…わねはどひひ？」

「素敵です！」

「ご主人のセンスなら安心じゃな」

……………私、頑張って説得しようとしたよ。

結局、アリスの口調が変わることは無かった。

容姿的なものは変えようがないから二人にフードつきのローブを着せ 二人ともなのは不自然に見えないようにだ 私は服屋で二人の服をみつくろっている。

当たり前だがカレンは荷物持ち。

「…あの、ご主人様」

アリスがおずおずと言った様子で聞いてくる。

呼び方は二人とも説得できなかった。

「何？」

「あの…嬉しいんですけど、こんなに買ってもらっては申し訳ない  
というか…」

「…あのね」

私は頭一つ以上低いシアの頭にぼん、と手を置くと小さく呟く。

家族でしょ、と。

どこにも遠慮なんていらんだ。

私は奴隷として二人を買ったわけではないし。

二人には店番くらいしてもらえばいい。

「ご主人、僕も店番をしなければいけないのじゃろうか…？」

横からアリスがフードから僅かに流れる白髪（白髪）を握りながら言う。

「…そうね。店番が嫌なら…」

「お姉ちゃん！ご主人様が言ってくれてるのにどうしてそんなこというの！」

不安そうなアリスを控えめにしかるシア。

私が追い出すと思ったのかな？

流石に私の意図しようとしていることには気付けないか、と苦笑する。

「違うわシア。ねえアリス、良ければシアも」

「鍛冶を、してみない？」



## 第14話

「…あの、ご主人様？あと一つだけ欲しいものがあるんですけど…」  
「儂もじゃ。…この通りじゃ」

私の家に戻った二人が一番最初にしたことは私に頭を下げることだった。

さらされた二つのつむじに向かって宥めの 正しくは頭を下げないで欲しいという 言葉を言った後、訳を聞く。

もじもじしながら、開き直りながら、二人は同時に同じことを言った。

「剣です」

「剣じゃ」

……。

「…理由は？」

二人はまたしても同じことを言った。

「ギルドで働きます」

「自分の食いぶちくらい稼がせてほしいのじゃ」

「駄目」

即答した。

10歳の女の子をあんなどころで働かせられるか！

「大丈夫です…これでも私たち、剣闘士をさせられてたんですよ？」

やたらと明るい声でシアが言う。

「…け、剣闘士…！？」

「そうじゃ。最初は犬から始まり、鴉、狼、猪。それから小型、中型、大型の魔物。なんでもござれじゃったな」

からから、と。

年に見合わぬ笑みを含みながら言うアリス。

私は息をのむ。こんな小さな子が。

たった二人で。

「…でも、腕力とか…剣を持てるレベルじゃ…」

それを聞いたシアは笑みを浮かべる。

そのニコ、と擬音で表わされるであろう笑みは 出会ってから  
の短時間ではあるがその中で最も とても痛々しい笑顔だった。

シアがその表情のまま言う。

「わたしたち、投薬されてるんです。それも、割ととんでもない物をよりどりみどり、とんでもない量で」

私も、荷物を運び込んだ直後のカレンも、声が出なかった。

そして二人の表情が無言で言っていた。

「こんな化け物を自分の近くに置くか？」と。

……。

くすり、と思わず笑ってしまう。

「その程度の事で、私は動じないわよ？」

自分の本心を言葉で紡ぐ。

その程度で化け物？

人間は人間にしかなれないわよ。

そして私は言葉を続ける。

「私はそれ以上にとんでもない体験をした人間を親に持つてるんだから。」

まあ　そのカレンはどうか知らないけどね？」

最後の一言は目一杯の皮肉を込めて。

そしてカレンは予想通り。

それでいて私の期待通りの答えを出してくれた。

アリシアと同じだ。俺の親も、と。

「熱以外での金属の加工？」

「うん」

私はカレンに寝落ちする前の話をした。  
アリスとシアは入浴中。

「……………ごめん。俺の知る限り無いよ」

「だよな……………」

私は大きな溜息を零す。

ここの炉はやたらとお金をかけて作られているらしく、  
温度調整が容易な上に限界温度もかなり高い。

昨日は何時もの温度だったからかなあ、などと考える。

「……………限界温度でやってみようかなあ……………」

「え、限界温度じゃなかったのか？」

まあね、と曖昧に答えておく。

温度が高すぎて液状になっても困るんだよね、一つしかないし。

それに…

「多分無いとは思うけど、昔は狭い中で高温の金属に向かうから失明したって人も多いらしくてね…」

「え!？」

それを聞いたカレンは15分ほどそれならやるべきではないという旨の「説得」し続けた。

「わかった、分かったわよ。……ねえカレン、あの子たちのことどう思う?」

苦し紛れの話題替え。

でももう一つ目的がある。

いつの間にもやら聞き耳を立てている疑り深い彼女たちに本心だということに分からせるためだ。

「…?」

気付いていないニブチンが一人。

いぶかしげな表情をしたが、すぐにニヤリとする。

万が一にも、気付いたからではない。

「言つたる、俺や父さんたちに比べたらずっとまともだよ。」

詳しくはあいつらに言つてないけどさ、俺らが妖精の息子たちの子供だつて知つたらどんな顔するだろうな？」

ニヤニヤしながら言うカレンの声はやたらと楽しそうだった。

「じゃあ、1曲お願い」

「へ？」

はやくはやく、と促す。

これである二人にもわかるだろう。

自分たちがどれだけ「人間」なのかを。

訳が分からない、といった感じの表情をしていたカレンだが、深呼吸一つのあと、表情が変わる。

まるで花弁がつくる波紋を待つ水面のような雰囲気。

凜とした、それでいて触れれば消えてしまう儚さ。

私は初めてこの表情を見たときから、何よりカレンのこの顔が好きだった。

そしてその水面のような雰囲気には波紋を落とすのは他でもない彼自身の謳声なのだ。

花弁が舞い散る。

そして

謳が、うっん、カレンの演奏が終わった後、私は隠れている双子に向かつて言った。

「どう？お二人さん。

今のがカレンの、プーカの謳よ

あなたたちのほうがよっぽど人間らしいでしょ？」

直後、ガチャーンツと盛大な音がした。

「な、なんだ!？」

「あ、やっぱり気付いて無かったんだ」

くすくす笑いながら立ち上がり、二人のところへ行くと、手を貸して立ち上がらせる。

「気付いてたんですか!？」

まだ目を回したままのシアが言う。

へえ、目ってホントにうずまきになるんだ。

…じゃなかった。

「まあね。剣闘士だったとしても気配は消せないだろうっしね」

「カレンは全く気付いておらんかったようじゃが？」

同じく目がうずまきのアリスが言う。

まだポカーンとしているカレンに目を向けると私は思わず笑ってしまふ。

「あつはは、あれはニブチンだから仕方ないの」

「誰がニブチンだ！」

抗議したカレンに3人分の視線が集まる。

……………。

……………。

……………。

「あ！……………あのさアリシア」

そのまま数十秒が経過した頃、カレンが声を不自然に張り上げて言う。

「何？ニブチン」

そう言うとカレンは何故かニマ、と歪んだ笑みを浮かべる。

「…何その顔」



「いや、俺よりアリシアの方がニブチンだって確定したからさ」

ええ？と私は首をかしげる。

どこにそんな要素が…。

……特に思い当たることはないんだけどなあ？

私がうんうん唸っていると、カレンが変なトーンで言った。

「ここで問題です」

「ええ？」

意味が分からないですカレンさん。

「俺たちがギルドに行った一番最初の目的は何だったでしょう？」

「何って…レインに剣を……あ」

その自分の言いかけた言葉で思い出す。

わ、忘れてた　　っっー！！

私はカレンに二人を見ておくようにと頼みながら全力でギルドへ急ぐ羽目になっていた。

第14話 (後書き)

感想待ってます。

## 第15話

ちょうど戻って呑んでいたところだったレインは剣を受け取ると感激して泣きだしてしまった。

それだけなら良かったんだけど…。

「スノウ、止めるべきなんじゃなかったの？」

レインが代用していた自分の店の剣を腕の中に抱えながら私はジト目で言う。

「無理や、うちにあれは止められん。ていつか止めようとする奴叩き斬ってでも行ったやる」

ちよっぴり腰の引けた声で言うスノウ。

「…うん、私も止めようとは思わない」

レインは受け取ってそのまま新しい依頼に行ってしまったのだ。それも討伐依頼。

追いかけてようか迷ったが、キラキラしたし過ぎているような気もしたが 笑顔で断られてしまったてどうしようもなかった。

「…そうや、あの双子、どうや？」

スノウが唐突に言う。

「…問題ないわ。あの見た目の所為で二人とも苦労しただろうけど、もうそんな思いはさせないわ」

「……はあ。なあ、どうして今日会ったばかりの……言い方が悪いのは勘弁してな？……得体の知れん子の面倒見ようと思っただん？」

スノウがちょっと申し訳なさに、目一杯選んだような言葉で言った。

「……うん。多分、私の方がよっぽど得体が知れないからだと思うけど……」

「へ？」

呆けたような返事、というか反応をしたスノウを見ながら続ける。

「私が一時期鍛冶ほつぼりだしてひたすら強くなるうとしてた時期があつたでしょ？それから比べたらあの程度可愛いものよ」

私がそれを言い切ると、スノウは大きな溜息を吐いた。

「……なによ」

「心配するだけアホらしなってるわ。……まあ、そんなところも含めてマスターはあんたに特別ランクを与えたんやろうけどな」

その言葉に私は止めてよ、と言う。

誰も聞いていないとは思うけど、用心に越したことはないんだ。

「カレンにだって話してないんだから……」

「あや、意外。でもこの調子だと……」

スノウがにやりとする。

「俺に何を言っただけだ？」

件の彼の声がした。

「ほらな？」

スノウがにやりをより深くする。

私はでこピンをくれながら振り向く。

アリスとシアもフードをかぶって傍らにいる。

私は思わず頭を押さえる。

「：大したことないで、アリシアがカレンくんになんていっとるか  
は知らへんけど、アリシアのランクが」

「ちょ、スノウ！」

私の制止を無視してスノウは言い切った。

「S・(マイナス)ランクだって事や」

「…なるほど、S・ランクってというのはアリシアの為の特別なランクってことか」

「そやそや」

私のした簡単な説明をカレンが反芻したものをスノウが肯定する。

私はそんな二人をアリスとシアの頭を撫でながら恨みがましく見やる。

「ご主人様ってすごい人だったんですね…。アシュモアさんが言っていた通りです」

おおっ、おじさんの本名久々に聞いた。  
ギルドでもいったい何人くらいが覚えてるだろう…。

「ご主人？」

久々に出たおじさんの名前に軽く感嘆していると、言って来たシアに替わってアリスが覗き込んでくる。

「あ、ごめん。なんでもない」

「なあアリシア」

今度はスノウが覗き込んでくる。

「何？」

「アシユモアって誰や？」

……。

気毒なおじさん。

「おじさん…もといこのギルドマスターの事よ」

「ええ？」

驚いたような顔をするスノウ。

「マスターの名前ってそんなんやっただけ？」

「…そうよ」

流石に呆れてくる。

「マスターはマスターやなかったんか…」

「なんでちょっとショックを受けてるのよ…」

まあおじさんの名前が呼ばれることなんてほとんどないからな仕方ないのかなあ、と考える。

「へえ、マスターはアシユモアっていうのが」

カレンが言う。

「知らなかったんだ？」

ああ、と頷くカレン。そして続ける。

「ギルド契約したときに初めて会ったんだけどその時も《マスター》とだけ紹介されたような…」

「…スノウの所為だったのね…」

変なところが無能の受付嬢に視線を向ける。

「そんな目で見んといてや」

呟くように、そして語尾を小さくしながらスノウが言った。  
自業自得だよ。

「そう言えばさ、S・ランクって基本的に普通のランクと何が違うんだ？」

「そうねえ…」

このランクの特殊さは幾つかあるが、大概の資格を私は使ったことが無い。

使う機会も気もなかったただけだけれど。

「…じゃあ、Sランクの特殊な点をカレンは言える？」

えーと、とどもってから小さく指折り数え、それからカレンは言



葉にした。

「ギルド員を追放する権利と、ギルド員を動かす権利。

本部からの特別援助金と、ゴー、じゃない黒ずくめを1人以上  
人数に関わらずギルドに無料で雇う権利。

定例ギルド長会議に出席する権利……くらいだよな？」

「うん、よくできました」

私は笑顔を浮かべてあるものを渡す。

「なんだこれ…アリシア武具店割引券？」

「そ、1000エン分。

それから、S-ランクは今カレンが言った中からギルド員を追放  
できる権利を抜いたものを便宜上は差してるわ」

その早口の言葉と割引券に当惑しているカレンを余所に私は家族  
に目を向ける。

なんだか…家族なんて考えられることが妙にうれしい。

「ご主人様？どうしたんです？」

「うっん、何でもない」

ぼむぼむとシアの頭に手を乗せる。

「??？」

戸惑うシアに私の顔には自然と笑みがこぼれてしまう。  
今度はもう一人の家族を呼ぶ。

「アリス、おいで」

「なんじゃ?…ご主人、やたらと嬉しそうじゃの」

どうやら子供は感情に敏感らしい。

「…家族が増えたからじゃないかしら」

早口にそう言うと、アリスとシアが互いに目を見合わせた。

その視線がこちらに向く前に私は顔を逸らし、スノウに声をかける。

「私達帰るね? レインが帰ってきたら調子を聞いておいて」

「了解や」

私が双子に合わせていた目の高さを戻した所で後ろから声がかかる。

「あ、アリシア。俺も店に行っていいか?」

今から、と付け加えたカレンに私は迷わず頷く。

今夜は夕食を新しい家族とゆっくり食べよう。

せつかくだからカレンにも幸せのおすそ分けをしよう、と考える  
私の顔からは笑みが消えなかったとあとで聞いた。

## 第16話

朝の空気の中で私とカレンは剣を振るっていた。

「なあ、アリシアっ」

私は木剣で突きを繰り出しながら呼びかけにこたえる。

「なに？」

カレンはそれをモールの盾で受け止めながら続ける。

「アリシアの剣が優れてるのはやっぱりドワーフの技術のおかげなのかつ？」

今度は薙ぎ払うように横一文字に振るう。

それを防いだカレンは1歩後退する。

私もとんつ、と1歩後退する。

剣を中段に構え直してから言った。

「うーん…基本的に店の武器にドワーフの技術は使っていないよ」

「えっ!?!」

カレンが驚きを表した瞬間に私は距離を潰した。

な、とカレンが言葉を紡ぐ前に盾に向かって剣を斬りおろす。

「っ…」

があん、と音を立てて持ち主の体に盾が押しつけられる。

「がっ　　！」

衝撃で浮き上がった盾を今度は内側から叩き、跳ね上げると続けて剣も跳ね飛ばす。

とどめに足払いをかけて尻もちをついた所に剣を押しつけてこの一本は終了。

「ほいほいドワーフの技術の武器なんか世に出せないわ。自分の為の剣と、一部の例外を除いて造らないわ」

「……俺とか？」

仏頂面のまま言うカレンに頷く。

「それから、売り場に出してる剣の作り方はね…皮肉だけど、カタナのそれに近いのよ」

「刀の？」

きよとんとしたカレンに自嘲気味な笑みを見せながら私は答える。

「うん。お母さんたちから教わったものだから、それを变えるつもりはないけどね。私はそれしか知らないし」

そう、私の『それ』はカタナ…その中でもチヨクトウと呼ばれる反りのないカタナを造る技術に近いものだ。

それを考えるたびに皮肉だな、と思う。

それを考えながら目の前の彼を見ていると、あることを思い出す。

「…そういえばカレンはもうカタナを使わないの？」

考えただけのつもりだったが、私の口は馬鹿正直に言葉にしていた。

「…んー。多分」

「多分？」

「うん。アリシアに嫌われたくないしな」

おどけて言う彼に木剣で軽く一撃をかます。

頭を押さえてしばらく唸っていたが、それが収まった後、カレンは目に真剣な色を浮かべて言った。

「…俺の親が七刀使いの一人に殺されたって話はしたよな？」

カレンの口から出た予想外の話題に私は罪悪感を覚えるが、表情に出ていた私を気遣って…あるいは無意識にだろうか、カレンはいつもよりも更に穏やかな声で言う。

「その時俺は怖くて何もできなかったんだけど、立ち直ってしばらくして刀の事について調べてから考えたんだ。俺が七刀を刀で壊してやるうって。七刀をこんな使い方させてちゃいけないって。だから刀を武器に選んだんだけど…」

私を見る。

何かの答えを求められている気がして、私は無意識に口を開く。

「…人生の理由にするようなカタナをなんであっさり捨てたの？」

「あ、あー」

意味不明な音を出し始めたカレンにちよつと心配になる。

「最初にアリシアに話した通りだ」

「…なんだったっけ？」

私があっさり言い切ると、カレンがずっこけた。

「…古いような気がする…」

「…いいよ別に」

嗚呼、拗ねちゃったよ。

私はカレンの機嫌をとるのにかなりの手間暇をかけることになってしまった。

「およ、依頼受けるん？」

戦闘用の格好でギルドに現れた私にスノウが意外そうな声を出す。

「カレンに付き合っただけの短いのをだだけどね。アリスとシアほっとくわけにはいかないし」

「コブ付きは大変やなあ」

「誰がコブ付きよ」

そんなやり取りをしていると、依頼板に酔っていたカレンが切り離れたものを持ってくる。

「これお願いします」

「はいよー。AA討伐か。助かるわ、これ誰も受けんと結構迷惑しとった依頼なんよ。」

報酬が多少割に合わんけど構わんか？」

はい、と頷くカレンを見て私はスノウに「見せて」とアイコンタクトする。

手渡された依頼書には「アシッドアントの巣の破壊および掃討」とある。

報酬は20000エン。



A Aとは、アシッドアントの略。

アシッドアントと言えばCランクの巨大なアリ型モンスターで大了したことはないが、巣を潰すとなれば話は別だ。

巣に潜む雄アリのランクはB、近衛と兵アリはB+、女王アリはB++にもなる。

しかも厄介なことに女王を倒されるとパニックになり特攻を仕掛けてくるようになる。

捨て置かれた理由はこの依頼主が小さな村で報酬が割に合わないからだろう。

相場なら下手をすると10倍はいく。

そして厚かましいことにこのA+ランクの依頼をカレンは私を使って受けようとしているのだ。

まあ、本当のところは単に本人があれだからだろう。

「…お人好し」

ぼそつとつぶやくとカレンがビクツとする。

「まあまあ、そこがカレンさんの良いところやろ。けどちょっと山奥やで？一週間はかかるで？」

……。

「私の話聞いてた？」

ジト目で見る。

うっと呻いた後黙り込んだカレンを睨み続ける。

……。

「…わかったわ。その代わりに一回戻ってアリスたちに報告してから出発よ」

私が大きな溜息と共にその言葉を言うとはっ、とカレンが頭を上げるが、私はそこに頭突きを喰らわす。

本気の一撃はカレンを失神させた。

「…やりすぎや」

スノウがドン引きしていた。

私は面倒よろしくね、と冷たく言つとギルドのドアをくぐった。

どん、という音と共に私はアントの頭に剣を突き立てる。

硬い頭の殻を貫いて命を奪うと突き立てた剣の柄頭に手を当て、そこを支点に周りで顎を開けたアントをまとめて蹴り飛ばす。

一瞬怯んだ奴らのうちの正面の1匹の顔を真つ二つに両断すると、剣を体側に引きながら後退する。

その瞬間にいましたがた私のいた場所に別のアントが突っ込んでくる。

両断したアントの頭から噴き出した体液をそのアントが体で受け止める。

じゅう、と音がして形容しがたい匂いがする。

私はそのアントの首を一撃で落とす。

同じ様に噴き出す体液から逃れるために上に向かって跳ぶ。

その下で2匹のアントが顎をかち合わせるのを認識しながら片方の頭に着地すると動かれる前に2匹まとめて頭を両断する。

そのまま一回転しながら周りにいた残りを一掃する。

「あ…！」

目に入った光景に私は躊躇なくアントの頭を踏みつぶしながら跳躍する。

嫌な感触に顔をしかめながらカレンの背中に迫っていた3匹を背中から切り裂く。

真ん中は絶命したが、もう2匹は標的を替え、顎を鳴らしながら迫る。が一息に放った2発の突きで仕留める。

それと同時にカレンが相手にしていた最後の1体を仕留めたのを見ながら肩を叩く。

「行くよ！<sup>かたむけ</sup>蛹の部屋はすぐだから！」

カレンが頷いたかどうかも確認せず、私は10メートルほどを疾走してその先の小部屋に飛び込んだ。

真っ先に目に飛び込むのは、クリーム色の物体。

続いて入ってきたカレンが「うえ……」と声を漏らす。

仕方無いだろう。

そこにあるのは百余のアシッドアントの蛹なのだから。そしてそれを守るのは十数匹の兵タイプのアント。

「……兵アリは任せて」

私の言葉にコクリと頷いたカレンを見ながら剣を一閃する。

ちようどこちらに突進した兵アリを1匹仕留めた私は、兵アリの注意がカレンに向かないように真っ先に駆けだした。

## 第17話

兵タイプのアシッドアントの厄介なところは通常タイプが体の中に持っている「だけ」の酸のような性質の体液を口から吐き出すことができること。

そして何より 通常タイプ以外の全てに言えることだが 驚異の生命力だ。

頭を潰しても腹を切り裂いてもしばらく生き続けるこいつらを倒すには徹底的に砕くか首を落とすしかない。

更に言うところのこいつらの首の周りは鎧のようになっている。

……でもまあ、ね。

一人でこいつらの巣を潰した時を思い出しながら開かれた顎を横から薙ぎ払って閉じさせると後ろの敵を無視してそいつの首を狙う。鎧の継ぎ目は弱いのだ。

狙い通りに成功させると酸を吐きだそうとしていた後ろのアントの顎を下から斬り上げる。

上に飛び散り、こちらに向かって落ちてくる酸を横に移動して避けながら前に跳んで首を落とす。

首を無くしたそれが新たな酸を振りまく前に後ろに大きく跳ぶ。

そして次の敵を

私が行動しようとした瞬間に生きている全てのアントが同時に「ギギギイイイ！」と咆哮を上げる。

「!?!」

私は一斉にアントが向いた方向を見る。

そこには蛹を片つ端から斬るカレンの姿。

まずい…こんな特性が!?

私は焦る。

こいつらを以前倒した時は一人で、兵タイプを全滅させた後に蛹を倒した。

そのとき気にならないのは当たり前で、今回気にする必要があったのも当たり前なのだ。

兵タイプは、卵や幼虫、蛹や食糧庫。その全てを守る番人なのだから。

苦虫をかみつぶしたような気分になりながら私は懐に手を突っ込むと小さな瓶を取り出す。

こいつらにとって麻薬のような効果を発揮する糖度30%以上ある果物を特別な製法で匂いを強くして生成した<sup>デコイ</sup>罠用の道具。

私はそれを床に叩きつけようとして、迷う。

こいつらはどちらを優先するだろう、と。

私の結論は瓶のふたを開けて、それを頭から被ることだった。

服に染み込んでくる冷たい感覚に顔をしかめながら地面を蹴る。

走り出した私に目を向け、迫ってきたアントは4体。残りの内の3分の1。

舌打ちしながら2匹を一息で屠ると残りを無視して蛹に体ごと突っ込む。

ぐしゃあ、と吐きたくなくなるような感触と共に蛹の中身が飛び散るともう一度耳障りな咆哮が響く。

「カレン！援護して！」

「あ、ああ！！」

盾で顎の噛みつきを防いでいたカレンが答える。

私はそれを見ながら目の前に迫っていた1匹の息の根を止める。

二人で、パーティで戦うというのは、やっぱり私には合わないのかもしれない。

まだまだ、先は長そうだ。

私はこの戦いの最後になる1撃を叩き込み、最後の1匹…女王の頭を壁に縫い付けた。

それがしばらく痙攣し、動きを止めると後ろでどさつと音がする。

「…終わったんだよね？」

息も絶え絶えでカレンが言う。

「倒れた後に言わないでよ。…もう終わったわ」

この巢の破壊という依頼の厄介なところは終わった後に来た道を自分で戻らなければいけないという点だ。

「……なあ、どうやって帰る？」

「…私は、どうしたらいいのかしらね？」

私の言葉には皮肉が込められている。  
続けてその皮肉を露わにする。

「《歩いて》いくか。《担いで》いくか」

「ぐっ……」

まあカレンの答えは決まっているだろう。

でも結局カレンは私がこの部屋に転がる全てのアートの心玉を回収するまで無言で唸っていた。

「…頼む」

「了解」



ニコッと笑みを浮かべて私はカレンを背負う為に背中 of 剣を外した。

「割に合わないって意味がわかったよ」

スノウから受け取った報酬を見ながらカレンが仏頂面で言う。

彼が覗き込む袋には報酬を私と半分にした100000エンが入っている。

「…良いこと…ううん、悪いこと教えてあげようか？」

それを聞くと、カレンが額の皺を深くする。

「…聞いてやる」

これから彼がするであろう更に不機嫌な顔を想像して噴き出しそうになるのをこらえながら私は言った。

「私が前に受けたときの報酬が250000エンでした」

淡々と言うように心がけたが、私のセリフには端々に笑いが滲んでいた。

「な…!?!」

カレンがしたのは予想に反して　いや、私が想像し忘れていた  
だけだろうが　驚愕の顔だった。

「そ、そんなに変わるのか…!?!」

「ん…まああれはパーティっていうか獵団クラスの大きさのパーティ  
イ組む人たちが受ける依頼だからね。正直どうして依頼板にあった  
のか不思議なくらいよ」

「そ、それ…」

カレンがぶるぶる震えながら言う。

「なんで最初に言ってくれなかったんだよ!」

喚き散らすカレンを、自業自得でしょ、と一刀両断してから双子  
の待つ家へ急いだ。

## 第18話

「ふっ わあ…！」

「おお これが…！」

慣れない所為で玉のような汗を額に浮かべながらも歓声を上げた双子に私は向き直る。

私の手にはいましたが水で冷やされながらも、まだ温もりを持って生まれたばかりだということを主張する1本の片手剣。

色は通常の鉄よりも僅かに白みがかっている銀と鉄との合金の剣。これはまだ人間の域…の筈の剣。

私がアリスとシアに鍛冶を教えるのに一番最初にしたことはただ「見せる」こと。  
理由は簡単だ。

私の一番古い記憶が母に抱きあげられながら父が剣を打っているのを見ていたことだったから。

私はアリスたちと同じ、あるいはそれ以上に汗だくになってしまっている。

見せ始めてから3日。

まだまだ時間はかかる。

「さ、お昼にしようか…と言いたところだけど、その前にお風呂に入るっか」

汗が染みて貼りついてしまった作業用の黒い肌着のような服の胸元をパタパタと開閉して風邪を送る。

多少は気分がマシになるが、冷たさはかえって際立つ。

兎に角早く着替えたいし、慣れていない双子には水分も取らせなければならぬ。

いつもよりずっと早く切り上げたのもその所為だ。

打ちあがった剣を今日の分とまとめて一か所に置くと、炉の火を始末して作業場から出る。

その作業がこうも簡単にそして短時間に終わるのは、この家を残してくれた。それでいて鍛冶と趣味ならなんでも叶うように改造及び改装してくれた。お母さんたちのおかげだ。

家自慢になってしまいかもしれないが説明しておこう。

まずは作業場。

装置のスイッチ一つで火を入れてくれる特別製。

炉はお母さんたちが「火竜の息吹」などのたまっていたほどの火力を誇る。

金属の在庫は青銅から金、果てはレアメタルと呼ばれるものまで切らした事は無い。

そして二人の……ドワーフとレプラコーンの技術を合わせて造ったナイフがある。

刃渡りは精々20cm。魔物や金属を熱を加えずに加工する時に使うもの。

ダイヤモンドなどの炭素の塊には特に必須となる。

それらを筆頭に諸々、王国お抱えの鍛冶屋が目を剥くような設備があるこの作業場は、私の技術を十二分に引き出してくれる。

続いてはお風呂…かな。

無駄に大きいのが特徴。

お母さんの拘り<sup>こだわ</sup>でやたらと大きく作られているお風呂は私達が3人で入っても問題ないほど広い。

他にも…

「ご主人様　？まだですかー？」

「ごめん、今行くわ」

時間をかけ過ぎたみたい。  
私はお風呂場へ急いだ。

「むーっ」

「うーっ」

私のある部分に集中する視線は、それを湯気が隠してくれていないことを意味していた。

私は視線に耐えられずその部分を腕で覆う。

私のその部分は決して大きいわけではない。

お母さんは「小さかろうと私に似て綺麗な形になるわよ」なんて事を言っていたが…。

じゃなくて！

私の胸は精々Cカツ　　ってそれでもない！

「…大きいのう」

「そ、そりゃアリスが大きかったら逆に怖いでしょうよ」

アリスはまだ十歳だし。

「それだけならまだしもですね…」

なぜかぶるぶる震えているシア。

「なんですかこの白い肌！さらさらの髪！ずるいずるいなんです！わたしたちにもください！」

「無理言わないの…」

体を洗いながら私は閉口する。

閉口の理由はそれだけじゃない。

この双子は気付いていないのだ。

自分たちの異質な程の美しさに。

まあその理由としてはおそらく奴隷商人に酷い扱いをされていたからなんだろうけれど…。

私はアリスの髪にお湯をかけるとシャンプーを手に取る。

この二人は、美しい。

アリスにもシアにもある美しさの一つは、この髪だ。

色素が抜けているせいで不健康に見えてしまう白髪はくはつだが、日光が当たると銀に輝いていてとてもきれいだったりする。

しかもこの…指通り。

指が滑るようなこの感触は女性なら誰でも羨むものだろう。

一通り洗い終わると、さっさと流してトリートメントもしてしま  
う。

ずっと触れていたくなるような髪も、考えものだと思っ  
てしまっ  
た。

アリスが自分で体を洗い始めたところでシアの髪も洗い始める。

私がこんな風に二人の髪を洗っているのは二人の髪の洗い方がそ  
の…少々乱暴だからだ。

始めてみたときに思わず全力で止めてしまったほど。

いつ禿げるかわかったもんじゃない。

よく今まで平気だったなあと感心した。  
それに二人の肌は陶磁器のようなのだ。

私も多少は自負があるが、この二人が成長したら敵わないと思う。  
ただ多少痛々しいのは普段見えないところにある胸や腹部や背中  
の傷。

剣闘士をやっていたときについたものなのだろうが、憤りを覚え  
てしまう。

残るタイプの傷はかなり厄介だが、必ず消してやる、と息まいて  
いたりする。

「ご主人、もう浸かっていいかのう？」

洗い終わったぞ、と尊大に言いながら聞くアリスに私は苦笑しな  
がら頷く。

「いやっほーっ」

「…アリス、飛び込んだじゃ駄目」

助走をかけていたアリスをちょうど洗い終えたシアの頭から離し  
た手で持ち上げる。

「むっ…仕方ない」

暴れる様子が無いので下ろす。

私が湯船に入ると、シアがアリスを叱りつけているのが見える。



曰く、「ご主人さまの迷惑になることはするな」なんちゃら。

ほほえましい光景だ。

こつちを見るアリスの子犬のような目に負けて助け舟を出す私はやっぱり甘いのかもしれないなあ、などと考えながら私はシアを宥めるのだった。

今回の事件は、これから起こる。  
工房側の入り口を焦り気味に叩いたのは、スノウだった。

「ど、どうしたの？」

「依頼…カレンくんが…」

「え？」

彼女は息も絶え絶えだ。  
ギルドから走ってきたのだろう。

「カレンくんがB+ランクの掃討依頼を受けたんや。その場にいたBとCの連中と受けたんやけど…報告では火竜が…現れたらしいん

や。その場でカレンくん以外は逃げたらしいんやけど…近くの村を守るために残ったらしいんや。

馬車で1日くらいのところやから飛竜便ならすぐに行ける…どうする？」

私は「ど」のところで踵を返していた。

火竜。

あれはカレンが…ううん、Aランクだって相手にしていい魔物じゃない。

また、この剣を使わないといけないかもしれない。

私はお母さんたちが最後打った剣をみる。

ナイフと並んでドワーフとレプラコーンの技術を使って造った唯一の「武器」。

私には本来もう使う資格はないけれど…。

守るためなら、私は誰との約束だって破ろう。

私はその剣を腰に差すと、もう一本を背中に差す。

何度だって、なってやろうじゃないか。

黒の女神に。

第18話 (後書き)

感想待ってます。

## 第19話

ガシユ、ガシユ、ガシユ、と私の剣は火竜の鱗を剥がし、肉を削ぎ、命を喰らっていく。

私が火竜を初めて殺したのは今から3年前。

その時に使った剣の片割れは3度火竜にぶついただけで折れてしまった。

もう一方は今腰にあるが。

しかし私が滅竜剣トランクスレイヤーを持つて来なかった理由はそこにはない。

私の剣で、カレンを助けたかった。

私が火竜と戦い始めてまだ5分も経っていないが、カレンはすでに半日以上戦い続けていたようだ。

結論からいえば、彼は生きている。

飛竜が過労で不時着（ほぼ墜落）する羽目になるほどのスピードでここに向かって来たが、カレンがまだ戦っているのを見て、驚き呆れた。

因みに不時着して無事だったのはここが砂漠だからだ。（しかも夜）

盾はドロドロに溶け、剣は半ばから折れ、それでもまだ注意を引いては逃げ回るということを繰り返していた。

そんな無茶をした本人は遅れてやってきた黒ずくめに連れられて今は治療を受けているはずだ。

それを思い、一瞬気が抜けた私の足元を火竜の爪が抉る。

私はいつもの癖で後退しそうになったが、思いとどまって前に出

る。

「深紅の鱗が彩る巨体とそれにならう巨翼きょよく。」

そして4足が特徴のこの竜の厄介なところはプレスだ。

まさに火竜の吐息。

それは一度使われただけで周囲の温度が上がるほどの灼熱の炎。回避しようにも、平気で5秒以上吐き続けながらそれで薙ぎ払ってくる。

対処法は、近づくこと。

火竜の矜持：があるのかどうかは分からないが、彼らはこちらが前の足が届く範囲にいる限りはプレスを放って来ない。

といっても前足の攻撃だけで充分脅威かつ致死なのだ。

私はこちらを見下ろしながら爪を振るう火竜の目をじっと見ながら意識が加速していくのを感じていた。

それと同時に、自分の打った剣が火竜に傷をつけていることもうれしく思った。

私が今振るっている剣の銘はアルマース。

ダイヤモンドの名を持つ剣は鉄以上の硬さを持つ火竜の鱗を削っていく。

その間も私は目を逸らさない、逸らせない。

ず…。

不意に攻撃の手を止めた火竜に私は迷わず飛び込む。

そしてそのまま。  
ガアン！という音と共に繰り出した突きを止められる。

今度こそこらえきれずに飛び退いてしまう。

だがよく見ると、防がれた爪の部分にひびが入っている。

そして…そのひびの間に挟まっているのはアルマースの切っ先だった。

どうやら私はまだまだ実力不足のようだ。

思わず苦笑いをし、私は足に力をため込んでいる火竜をもう一度見据える。

そして火竜がとった行動は、私の剣の切っ先が突き刺さった爪を自分で落とすことだった。

「……………」

グルルル…。

私を見ながらそんな風に唸った後、思い切り翼を広げる。  
私は何をするでもなく、その行動を見ていただけだった。

「まあとりあえず、無事で何よりや」

「私はそんなに苦労してないわ。私がのった飛竜と…カレンに特別手当は出るよね？」

私達が帰って来たのはそれから4日後。

カレンが目覚ますまでに3日、帰ってくるのに1日で4日だ。

「ど、どうもスノウさん。お変わりなく…」

なんだかお偉いさんのするような挨拶をしているカレン。

「お変わりなくって…。カレン、スノウは私が初めてお父さんたちに連れられてギルドに来た時　もう　10年前になるかしらね？その時から全く変わらないわよ」

「へ？」

「ちよ、何ゆつてんねん！」

呆れる私と、茫然とするカレンと、あたふたするスノウ。スノウとカレンの様子に、私は思わず吹き出してしまう。

ひとしきり笑った後、もう一度最初の問いを繰り返した。

「っーん」

口で言いながらそっぽを向くスノウ。

「いい年し」

「…なんて？」

「何でもないわ」

何かを孕んだスノウの声に私は黙る。

「…まあええわ。その前にあれどかしいや」

今度は困った顔になって「あれ」を指差すスノウ。  
勿論、火竜が落としていった爪だ。

私の身長以上にあり、加工しようにも、あのナイフがないとどうにもならなかったのでそのまま持ってきたのだ。

「ごめん無理」

「…ふう」

ものすごく疲れた溜息を漏らすスノウ。

この頃無理が過ぎているもかもしれない。

もう少しいたわってあげないと、いい年なわけだし。

そんなことを考えていたら、顔に出ていたのかスノウにすごい目つきで睨まれた。

「……………カレンくんの事についてちや協議中や。まさかB+が火竜とやりあって生き残ったとは信じがたいらしくてな。まあ撃退したのはアリシアやし、ちょっと難しい所やなあ……………」



「…スノウ、紙と何か書くもの」

へ？と生返事が帰ってくる。

「私が直接何があつたか書くわ。送っておいて」

「お、おう」

アリシア…？と不思議そうな顔をしているカレンがなんとなく腹立たしくてなんとなくでこピンをかましてから、私はスノウが持ってきた紙に書き綴り始めた。

最初は何にしよう。

拝啓、とか書かないといけないのかな…

## 第20話

私はある知らせを受けてちょうど店に居合わせたカレンを連れてギルドに向かった。

そして私達がカウンターに駆け寄るとスノウがなんだか微妙な顔で一枚の紙を差し出す。

私は怪訝な顔で受け取る。

「なんて顔してるのよ……」

「マスターに愚痴られたらこんな気分にもなるわ」

その気分とやらの影響が、トーンの低くなった声でスノウが答える。

「…お疲れ様」

私はそれだけしか言えず、追撃される前に紙に目を向ける。

「…B + ランクカレン・シャロンの対火竜戦かじゅうの功績を認め、特例としてB + + ランクとAランクの間に一時的なランクA - ランクを設け、カレン・シャロンをそれに置く。

…マイナス？

これ、どういうこと」

「続き読んでから言い。カレンくんちよいこっちきてーな」

はい、と返事をして寄っていくカレンに心の中で合掌。

愚痴を聞くのが苦痛ではないのは多分聞き上手だけだ。

私はさっさと視線を逸らすと紙に戻す。

『原則としてカレン・シャロンをこれに置くのは半年間のみとし、それまでにギルド本部の用意するAランク試験に合格すること。』

これに落第した場合、カレン・シャロンはそれまでと同じB＋ランクとする。

尚、A・ランクは試験を受ける前に5つのB＋＋ランクと2つのAランクの討伐及び掃討依頼を単独でクリアすること』

……。

「これ…無理じゃない」

黙読の後に私は思わず溜息をつく。

そしてスノウのマシガントークに撃たれているカレンを範囲から引きずりだす。

「た、助かった…」

「あ、何してんねんもー」

カレンの顔は青い。

「カレンが死にそうだったからよ」

一蹴してカレンの前に紙…というが無かったことにするという通知書を突き出す。

カレンはしばらく無言で見つめていたが、最後まで読んだらしいところではあ、と溜息が洩れる。

「あ…わかるんだ」

「やんわりと断られてるようなもんだろう、これ」

珍しく察しがいいね、と言ってからちよつと考え込む。

「まあ、単についてこの間B+になったような奴をAランクにするの問題…ていうか不満が噴き出してくるからでしょうね」

「…大変だなあ本部も」

思わずといった様子で出たカレンの言葉に私の方からも思わず呆れの意味での溜息が洩れる。

「普通はカレンの方から不満が出るもんでしょうが…」

「…そうかな」

「そつよ」

だが私はちよつと腹を立てていた。

まだブツブツ言っているスノウを無視して来たとき以上にカレンを引きずりながらギルドを後にした。

「お帰りなさい！」

「割と早いのじゃな」

ただいま、まあねと返しながら黄金色とアルビノの双子の頭を撫でる。

「さつきパーティが2つくらいきていくつか武器が売れましたよ」

「そっか、良かった。対応には慣れてきた？」

「はい！」

元気よく返事をするシアの横ではアリスが気まずそうな顔をしている。

私は再び彼女の頭に手を伸ばすとぐりぐりと撫でてから二人を見ながら言う。

「あとで鍛錬をするから見に来ること。今日の売り上げは二人で分けていいわ」

二人の反応を見ずに私はカレンを工房に引つ張り込んだ。

「ちょ…アリシア？」

「これ」

私はついさっきスノウに渡された腹の立つ通知書を出す。

「私は怒ってるのよ」

「え？」

「だからこんなものは」

カレンの目の前で2つに裂いて、4つに破って、8つに八つ裂きにする。

べつに洒落って訳ではないけど。

「…つまりは？」

カレンは訳が分からないといった顔で私の破った紙のくずを見ている。

私は炉にそれを放り込んでから言った。

「カレンにはAランクに上がってもらわね。この試験とやらを突破してね」

「…は？」

カレンがそれ以上の反応をする前に私は炉に火を入れる。

その後ろからカレンがまくしたてるように言う。

「それ…どういうことだ」

「文字通り。その代わりに私はカレンに私が今作れる中で一番強い武器を『レンタル』するわ」

そう言いながら私は鉱石をまとめて保管してある場所を見る。

「…レンタル？」

「うん。半年で500000エン」

私の言葉を理解した瞬間だっただろう。

カレンがぐらつと後ろに倒れた。

「…あ、ないわ」

「俺もない！」

予想通りの反応ではあるが、私は「関係ない」と一蹴。

「…ちよつと鉱石が足りないから私後でギルドに行くわ」

「俺は全然足りないからギルドに行く気力すら湧かないよ…」

私は鉱石入れを閉じると、炉の火を落とす。

「大丈夫よ、Aランクになれば多少名指し依頼も入ってくるようになるはずだし。何時ものように催促なしのあるとき払いでいいわ。

壊した剣と楯の代金も含めて150000エン」

「……………」

自分がどういう状況にあるのか理解したのか茫然とするカレン。

「どうする？やる？」

やるなら半年過ぎた後も多少グレードは下げるけど別な武具をレンタルするわよ？」

そうして視線を向ける。

「やります。やらせてください」

「よろしい」

私は茫然としたままのカレンを売り場側に放り出すと着替えを始める。

私はあれからもう1本剣を鍛えた。

アルマースとは別の。

なかなか納得いく出来になったそれを鞘から抜いて見聞した後、背中に納める。

たしか珍しい鉱石を集める魔物の討伐依頼が出ていたはずだ。

私は着替えを終えると、茫然とした様子を面白がられ、アリスとシアに弄くりまわされているカレンに双子と共に店番をするように押しつけるとギルドに向かった。



## 第21話

スパア、スパアンと私の剣はゴブリンの首を飛ばしていく。

ゴブリンとは文字通り小鬼だ。皺くちやで灰色の肌に頭から突きでる同色の角。

大概は襷褌切れを纏っているが、荷車の周りのゴブリンは武装している。

ただそれも大したことはなく、次々首を飛ばしていく。

こいつらの特徴は大の男の人の頭を棍棒で叩き潰せるほどの腕力。言い換えれば、それ以外ない。

単調で、愚直なその攻撃を避け、厚いが私の剣を邪魔できるほどではない皮に包まれた首を刈る。

私達にとってはこれほど簡単な相手だが人への被害が多いのはこいつらの姿や声があまりに原始的な恐怖を味わうからだろう。

何せ、歪んではいるが人と同じ言語なのだ。

その容姿に恐怖を覚えているところに歪んだ声で「どう殺してやるるか」なんて相談する声が聞こえてくるのだ。

恐ろしいったらない。

私はゴブリンたちが上げる歪んだ悲鳴と奇声と怨恨を頭から追いつししながら次々斬っていく。

今回の目的はこいつらの討伐とこいつらの運んでいる魔物の退治。こいつらが大きな荷台に乗せて運んでいるのはゆうに3mはある

石の肌を持ったトカゲ。  
ストーンリザード。

この魔物は鉱石を食らい体のある場所に集中させる。  
食べた鉱石の種類にもよるけどこいつから採れる魔鉱石と呼ばれるものはかなりの値打ちものだ。

何せ純度100%。

食べて独自の酵素を使って金属は体の金属胃と呼ばれる場所に蓄積。

それ以外の不純物　主に石など　は表皮に。

つまりは石の皮を持ったトカゲの完成だ。

特に今回のストーンリザードは以前バハムートもどきと闘った場所に潜んでいたものでかなり良質な魔鉱石ができてはいるはずだ。

そしてなぜこいつがゴブリンに運ばれているのか。

それはこのトカゲのときどき剥がれる表皮をゴブリンがぶきつちよな武器に仕立て上げるためだ。

一鍛冶屋としてはこいつらが「武装ゴブリン」なんて呼ばれるのが腹立たしいことこの上ない。

そんな憂さ晴らしも含めて片っ端からゴブリンを屠っていく。  
ひと際大きいリーダー格らしきゴブリンを倒すと蜘蛛の子散らすように逃げていったゴブリンを見送ってから荷車に向き直る。

ちなみにストーンリザードは荷台にくくりつけられていたりする。  
私は思わず苦笑いしてから顔を引き締め剣を振り下ろした。

今日が初陣のアモルファスはその名に負けることなく石の表皮をバターのようには切り裂き、ストーンリザードの命を奪った。

私はゴブリンのリーダーの心玉を取り出してからあわただしくトカゲの心玉を取り出すと金属胃を探す。

「…！」

硬い感触を感じ、そこを大きく切り裂くと赤く血に塗れてしまっただが艶やかに月の光を弾く魔鉱石が現れた。

金属と宝石の融合すら成したこれなら。

「これなら…カレンの剣も…」

できるはず。

その言葉を心の中で呟くと黒づくめのいる方向に走り出した。

「へえー、これが」

「うん、魔鉱石」

名前くらいなら聞いたことがあるでしょ、といつとコクンと頷くカレン。

「じゃあ…入れるわよ」

「お…おう」

そう声をかけるとカレン、そしてその後ろのアリスとシアに見えるようにしながら私はすでに真っ赤に焼けている炉に魔鉱石を放り込んだ。

すぐに真っ赤に焼け始め、私はそれを金属床に置く。

私はもう言葉を発さずに三人を順番に見る。

あとは、私のやれることをやるだけだ。

どれぐらいかかるかは分からないが、私が考えているのはカレンの事だけだった。

色恋としての「考える」なら、まだ一人の人間の物語としては面白かったかもしれない。

でも私が考えているのはカレンの癖、握り方、体重移動の仕方、振り方、刺突の仕方だった。

そして楯の時には防御のときの癖を。

私がそれを鮮明に思い出せるのは鍛錬を始める直前にカレンが立てなくなるまで徹底的にしごいたからだ。

大きな力を相手にする時のことも考えさせるため。

私は鍛錬のとき基本的には頭を空っぽにするようにしているが今回は決定的な武器を使う相手がいるためにそれが難しかったりする。それが性格から武器の癖まで知り尽くした相手なら尚更だ。

折り返しを繰り返して…各々の工程を経て…。

そしてそれから丸一日。

カレンの見ている前で　双子は睡魔に負けたが　完成した。

楯はミスリルを筆頭に軽さと強さを徹底した雪のような白い楯。穢れ無き雪と同じで光の中で僅かにブルーの色を生むそれは私が打った楯のなかおそらく最強だろう。

銘は…ウアラク。

持ち主に財をもたらす守護神の楯。

剣に使った魔鉱石は金と銀、及びダイヤモンドの含有率が高かったらしく、柔らかな太陽光のような色を返してくる。

これも最も、とは言わないが最強クラスの、と言っている片手剣だろう。

今までよりも重さがあるために多少苦戦するだろうがそこは何とかなってもらおう。

銘は…ハーゲンティ。

知識ではあるが「財を与える」という点ではウアラクと共通する

名でもある。

「…はい」

ハーゲンティをウアラクに納め、カレンに差し出す。

「……」

カレンは無言のままそれを受け取る。

私の手が離れた瞬間にカレンの腕が下がりカレンが顔をしかめる。私はその様子に思わず苦笑してからカレンの額をつつくと言った。

「それから…一つ考えがあるの」

「考えって…?」

少し顔を赤くしながらそれでも新しい武装を片手だけで持ちながらカレンが聞き返してくる。

「ていうか、これに従ってもらわないと例えそのこたちをカレンが持ってたって無理」

「…まあ、そうだろうなあ。考えって?」

ちょっと心外そうな顔をしながらも素直に認めたカレンに私は言う。

「私は3ヶ月カレンに付き合っただけじゃ多分足りないだろうからね」

「俺に付き合ってたって…」

そこで私は自分の間違いに気づき、言葉を付け加える。

「事実はそのけど、状況的には逆ね」

「逆？」

「私への名差しの依頼。あれに付き合えば嫌でも強さは底上げされるはず。」

…死にたくなかったら早く使いこなすことね」

最後の部分を笑顔で付け加えて、私は工房を出てお風呂場に向かった。

「…うーん」

唸っているのはスノウだ。

場所はいつものギルドのカウンター。

「うう」

ん」

「いきんでないで早くして。お手洗いはその後でも行けるでしょ」  
「なんでやねん！」

閉じていた目を見開いて組んでいた腕も解いて突っ込んでくるスノウ。

「じゃあなんだってのよ。」

内心で スノウとは違う言葉とポーズで 突っ込みながら言った。

「賛成できん」

「別に私メインなんだから平気よ」

私が黒の本の依頼を受けると言った時は上機嫌だったスノウが、今は難しい顔をしている。

まあ当然と言えば当然なんだけれど…。

「そりゃあうちのあずかりしらん…でなくとも顔も名前も憶えとらんような野郎やったらいくらでも死地に送ったるんやけど…顔見知りも死地に送るんは後味悪いやん？」

「それ聞いて今何人の難しい依頼を受けようとした奴が心を折られたのかしらね」

受付嬢としてありえない物言いだ。

酒盛りやってた連中のテンションがどん底まで叩き落とされてるじゃない。



私は苦笑しながら言う。

「大丈夫。私が付いてるんだし。それに…」

私はスノウに顔を近づけて小声で、そして目でカレンの武具を注視しながら言った。

「あれにはドワーフの技術を使っている。ちゃんとした名前もあるから加護もばっちりだし」

それを聞いてスノウも同じ様に声を潜めて言った。

「…へえ、やっぱ惚れとるんちゃう？…ぐぎゃ！…銘は？」

奇声の部分は私の攻撃だ。

ジト目になりながら私はぶっきらぼうに言う。

「ウアラクとハーゲンティ」

それを聞いてスノウが溜息を吐く。

私はもう一撃。

「あたっ！…だってそうやないかい。72柱の魔神の名前やる？名前負けしとったら加護やなくて災いやないかい」

「大丈夫よ「与えるもの」の名前なんだし。扱うものはカレンでも主は私なんだから」

これにスノウが思わずといった様子で笑いを漏らす。

「なんや、やったわけじゃないんか」

「当たり前でしょ。カレンのどこにそんなお金があるのよ。…それから、最初はちょっと優しげなやつにしてあげて」

にやにやしながら頷いたスノウにまた一撃をくれる。

「…なんや、あんたに来とる依頼みんなえつげないっちゅうか…酷むごいやつばっかしやな…」

はらはらと本のページをめくりながらげんなりした顔で言うスノウ。

それは私じゃなくて依頼主に言いなさい。

「…ま、一番はこれやろうな。これでええか？」

こちらにそのページを向けてくる。

「…これが一番マシなの？」

私はそのお慄く。

「ああ…残念ながら」

くう、と眉間に指を当てながら言うスノウ。

「…じゃあそれ受けるわ」

「カレンくんの冥福を祈っとるで」

「大丈夫、私が骨だけになっても連れて帰ってくるわ」

真剣な顔で言い合う私とスノウにカレンが呆れ半分恐怖半分で割り込んでくる。

「なあアリシア、それは俺が確実に死ぬって事なのか？」

「……………冗談よ」

「なんだよその間」

「……………」

思わず黙ってしまった私に詰め寄るカレンをスノウが押さえてこの場は落ち着いた。

そして1時間後に到着した飛竜便で私達は依頼に出発した。

## 第22話

「どっつ?」

「こ、これは死ねる…」

カレンが息も絶え絶えになって地面に転がっているのは、たった今終わった依頼の所為だ。

今回の依頼はメルビー…鎧蜂と呼ばれる魔物の巣の殲滅だ。珍しい毒を持たない蜂だが、顎の力は強く、鑄造の剣では噛みくだかれてしまうほど。

だけど勿論私の剣の前では敵じゃない。

名前通り鎧のような外皮をしているが、アモルファスとハーゲンティは苦もなく切り裂いていった。

ただ数が多い。異常に多い。

私はなるべく倒さずにカレンの方に次々はじき飛ばし、9割のメルビーをカレンにたおさせたのだ。

恐らくだが、しばらく筋肉痛は抜けないだろう。

「そ、そうだ…報酬は?」

「…随分守銭奴なのね…」

「しょうがないだろ…これだけやったんだぞ!？」

そう言って喚くカレンは確実に濃い疲労の色を滲ませていた。

「ま、一人手取り1000000エンは固いんじゃないかしら」

「…え…?」

自分で聞いたわりに信じられないといった顔で固まるカレン。

「当たり前でしょ。私にくる依頼をそこらのAランクの依頼と一緒にされるのは困るわ。こいつらは特徴こそ単純だけど数はAAの比じゃないんだし」

私の言葉でいつかのアシッドアントを思い出したのが、苦虫を噛み潰したような表情になるカレン。

「まあ、報酬としては妥当とは言い難いかな…」

「そう、なのか…?」

うん、とこちらに顔だけ向けて言ったカレンに頷くと、続ける。

「私のこれは実質ひとりで受けること旨が伝わってるはずなんだけどね…。報酬としてはちょっと少ない。別に物足りないってわけじゃないんだけど横暴さには呆れるわ」

「俺はその報酬を少ないって言うてのけるアリシアに呆れるよ」

「…ふんっ」

「んぎゃっ」

私は剣を鞘ごと引き抜くとカレンの顔面に剣の腹を思い切りぶつ  
けた。

カレンは当然のたうちまわる。

「じ、この…」

「帰るわよ」

「ふぎゃー！」

もう一撃かましてやった。

この一ヶ月半…約8週間で私とカレンがこなした依頼は10個。  
全てがA++ランク以上の「3パーティ以上混合した部隊用」の  
依頼だ。

通常なら。

例えば、今終わらせて帰ってきた所の「メールビーの巣の掃討」

とか、

それから「グランドアナコンダの討伐」に狡猾かつ身体能力の高い「ウィリーモンキーの群の掃討」

…。

まあ名前から簡単に想像できる魔物の割に厄介さは想像もつかないという嫌な魔物たちなのだ。

実は私が戦っても勝率は100%ではない。

カレンの手前、強がってはみても危ない場面は何度もあった。

背中を取られたら一瞬で命を刈り取られるような相手なのだ。

それでも私はカレンのまえでは「強い剣士」なんだ。

心の時間を止めないまま戦ういつもとは違う感覚に違和感を覚えながらも、私はちゃんと戦っていた。

「…どうしようかなあ…」

私は一度家に帰り、いつものようにお風呂に入って双子に研磨について教えながらオーダーメイドをこなしてからもう一度ギルドに戻ってきてカウンターで黒本をめくっていた。

「あんた大丈夫なん？」

「んー、特には問題ないよ」

そういう私の言葉は嘘じゃない。

私はこれ以上をした経験があるので問題は生まれない。

研磨を教えているアリスとシアもすぐく飲み込みが早く、もう任せてもいいレベルにまでなっている。

「問題はあつちでしょ」

私は本を抱えてカウンターに寄りかかったまま「アレ」を指差した。

「…ご愁傷さま過ぎるわ」

スノウが憐憫を込めて見つめているのはカレンだ。  
辛うじて自宅で風呂を浴びた後来たらしいが、正直目を逸したくなるほど真っ白だ。

「…まあ、アリシアについてったらああなるわな」

「人を化け物みたいに…」

そう言っても私はスノウに本を叩きつけたりしない。  
ある意味事実だし。

やがて本からぴつと一枚切り取るとスノウに差し出す。

「これにする」

スノウはカレンに対しての憐憫のまなざしを向けたままそれを受け取り、目を向ける。

「『アイアンプレラ』…これ、だいじょうぶなん？」



そう言つてスノウが顔を上げ、目を向ける。私ではなく、背中から  
らびる剣の柄と腰に。

ちなみに私の腰には何も差さっていない。

「…確かにちよつと心許ないかな？」

ちよこつとだけ抜き出してみる。今回は双子が研磨してくれてた  
のだが、勿論理由はそこではない。

「じゃあ飛竜便が来るまでに取り替えてき」

「うん」

補足すると、この黒本の中の依頼には全て飛竜便のオプションが  
付いている。

多くが貴族や王族など、富裕かつ権力を持った「ギルドが味方に  
つけておきたい層」が依頼主だからだ。

正直スキではない。

だから私は黒本の依頼、通常のAランク以上の依頼、また黒本と  
ローテーションを心がけている。

もちろん報酬がいいのは黒本だが、私の関わった権力を持った人  
間はろくな人がいなかったのだ。

イヤにもなる。

多少偏見が混じっていることもあるが、だから私は基本的に関わ  
らない。

おじさんもそれを知っているから王への謁見なんかを代わりに行

っしてくれている。

足早に我が家に戻って工房側から扉をくぐると、そこにはアリスが研磨をしている所だった。

「おや…どうかしたのかご主人？」

顔を上げてこちらに向かって言う。

「ううん、ちょっと装備を替えにね」

私はなんとなしにアリスの手元を覗き込む。  
アリスも手元を開けてくれる。

アリスが研磨していたのは売り場にある素っ気無い剣の内の1本だった。

「ちゃんと貰った小遣いの中から出したのじゃ。偉いじゃろ？」

胸を張って言うアリス。  
私はよしよしと撫でる。

「でも新品の剣を研磨してもなかなか上手くなってるかどうかかわからないし、もうアリスたちで研磨を受け付けていいわ」

「ほ、ほんとかの!？」

うん、と頷くと剣を置いて年にあつた「いやっほーっ!」という声と共に売り場方向に駆けていく。

私はそれを苦笑しながら見送ってから私は自分用の武器庫を開け

る。

「……………これ、かな」

私はいつも使う剣よりも大分重い片手剣を持ち出し、背中に背負うとシアに顔を見せてからギルドに向かった。

## 第23話

「…ふむ」

「……………」

私を値踏みするような不愉快な視線をカレンが前に出て遮ってくれる。

「…君は？」

「アリシアが認めなかった奴に名乗る名前はない」

「…そうか」

そう言ってから黙り込む。

見た目は20代ほどだが、実際は三十路らしい。  
まとめたブロンドの髪に青い瞳。  
整った顔立ち。

王国騎士団の騎士団長。

正直吐き気がする。

特にこのひ…いや、こいつの剣。

人を斬ってから血を拭きとる程度しか手入れしていない。  
人を殺していますって…という気配を隠そうとすらいない。

否、恥じてすらいない。

今回私に來た黒本の依頼の中でも、最も最近のものでスノウが「これだけは先に受けて欲しい」と真剣に頼まれた依頼だ。王国からの依頼。

内容はヒュースタイガーの群れの討伐。

彼らは文字通り虎。

前足がとても硬い手甲のようになっていたことが特徴だ。

そしてさらに凄まじい動体視力を持つと「推測される」こと。

何故「推測される」なのかは簡単だ。私達には確かめようがないから。

予知よりはまだまだましな考え方というだけだ。

今回この騎士団長が駆り出されたのはおそらく鍛錬目的。

ヒュースタイガーは生半可な人間より強いのは勿論、獣の格好でありながら、言葉を選ばせて貰うと、人間らしいのだ。

その「動体視力であろうと推測されるもの」を使ったステップによる回避と手甲による弾き防<sup>パライ</sup>御。

そしてやはりその能力を生かした攻撃。

彼らは単体でB++ランクを誇り、繁殖期における群れはA++ランクに分類される。

十数体でそれを誇る彼らを相手にしてこの王国騎士団団長は確実に死ぬだろう。

何せこいつは騎士団長だ。

命令することは知っている。

利用することも知っている。

ただ、知らないのだ。

頼ることを。

縋りつくことを。

助けを求めることを。

私がこいつに名乗らないのは、人を殺したことを誇りに思っていること。

王国の為と、誇りを持って人を殺していること。

そして人を殺す訓練の為に私達を利用することを私は許さない。

「…不敬罪というものがあるのを知っているか？」

「……………」

「これだから学のないものはこま」

「飛竜便が到着いたしましたようなので外に出ただけとありがたいのですが」

受付嬢…スノウの事務そのものの声で遮られるとしかめ面をし、無言で外に出た。

「…まだ来てないわよね」

「来とるで、あと10キロ程度や」

鼻を鳴らして言うスノウに私とカレンは顔を見合わせて噴き出してしまふ。

彼女の千…いや万里耳ばんりみみは本当に良いのだ。

常つねににざわざわして騒さわがしいことこの上ないギルドギルドで薬物の取引とりひきが起きないのは彼女が過去20件ほどそういう輩こゝろをその耳を使って取り締とまった（締め上げた）からだ。

だからよっぱらいも声はかけても手は出さない。

禁断の女神かむろという奴だ。

そして数分後、しかめ面を酷こくした「騎士団長」と共に飛竜便ひりゆうべんで私達は飛び立った。

「そういえばね」

「なに？」

「なんでフードかぶってるんだ？」

ヒュースタイガーの巣を指している途中にカレンは私の格好を指摘する。

どちらかと言えば、口が動くのを止められなかったという感じだ。

「その…」

カレンが声を潜める。

「そんなに嫌いなのか、あいつのこと…」

楯に隠すようにしながら後ろをついてきている「騎士団長」を指さす。

「嫌いよ」

その部分だけ大きくする。

慌てたカレンを見てほくそえみながら音量をカレンに合わせてから続ける。

「…それもあるけど、ヒュースタイガーに目を見られないためなのよ」

何時ものローブのようなコートに付いている　そして今は顔にすっぽりかぶせて鼻が見えるか見えないかの位置にあるフードの先を左手でちょこっと持ち上げてカレンの目を見ながら言う。

「田っっ」



そう、と小さく頷いてから最後に彼らと闘った時の事を思い出しながら口を開く。

「彼ら…うつん、彼女たちは私達の目を見て攻撃される個所を察知するの」

人間なら攻撃する個所を見てしまうのは当たり前だからね、と続ける。

「そ、そんなことするのか…？  
ていうか、なんで教えてくれなかったんだよ！」

語尾を僅かに強めるカレン。  
器用だね、と笑いながらフードを戻す。

「ごめんね、言う暇がなくてさ。  
でも問題ないと言えばないよ」

「…どうして」

「私だって彼女たちを複数同時に相手にしないから。  
…うつん、したくないから」

え…と疑問よりは茫然と言った方がしっくりくる表情で固まるカレン。

「アリシアでも…？」

「まあ、ね。」

彼女たちの厄介なところはアイコンタクトによる意思疎通をしながらの『狩り』。

だから私はなるべく1体ずつ相手にすることにしてるの。同時に3体が手一杯」

「げ……」

カレンが呻く。

「大丈夫なのかね。ただでさえ君のような少女に頼むことで王も不安がっているというのに……」。

勝率が百ではない依頼を組むとは、ギルドも浅いものだな。……あ  
るいは、

君も捨て駒……なのかな？」

その言葉をはさんだのは勿論「騎士団長」。

「……………」

私は無視。

「……私が悪いのならば謝罪しよう。」

だが私は王の代理で来ているのだ。そこをわきまえてくれ」

「……………王の代理なら」

私は呟くように言う。

「ん？」

騎士団長が反応する。

私はフードのまま振り返り、顔も見ぬまま言う。

それは冷徹に。

それは辛辣に。

「王の代理なら見ているだけにしなさい」

「何…？」

「王と同じで、見ているだけにしなさい。」

あなたは何もできない。

あなたは何も知らない。

あなたは何も救えない。

あなたには何も見えない。

人を斬った剣で魔物を斬れると思わないことね。

人が斬れる程度で、

必ず斬ることのできる案山子かかしのような人間を 咎のあるなしは  
この際置いておくとして 何人斬り倒せたところで、魔物は斬れ  
ないわ」

「そこまで言うなら、試してみようか」

私が言った言葉を受け止め。

騎士団長は狂気を向ける。

凶器を向ける。

文字通り、抜刀した。

「化け物を斬れるかどうか」

その狂気の切っ先は

私だ。

## 第24話

「ちよっ！」

「動かないでいいわ、カレン」

片手でカレンを制してから騎士団長に向かってフードの下から微笑んで見せる。

「死も恐れぬか、化け物め」

騎士用の それでも団長というだけあって装飾華美な 剣を、  
がしゃりと鳴らしながら言う。

「単にあなたの剣が怖くないだけよ」

「…しね」

顔に突きつけていた剣を躊躇なく突き出してくる。  
私はゆっくりと迫ってくるそれをフードに傷をつけられないぎりぎりのところで避ける。

こんな風に突然の攻撃で一体いくつの命を奪ったんだろう。

そんな風な考えが僅かに頭によぎるが、続けて剣もろとも突っ込んでできていた騎士団長の体自体を避ける。

「ふむ…。やはり少女なのは見た目だけか」

振り向きざまの一撃も避けた事に苛立っているのか、舌打ちをしながら言う。

「……………」

「なるほど、私の言葉に答えられないのは言葉が通じないからか、  
かわいそうに」

熱に浮かされたようにぶつぶつと呟くそれは、異常だった。

「……………薬物、ね」

自分の中に生まれた考えを口にする、呟いただけなのににもかかわらずカレンの耳には届いたようで、息をのむ音が聞こえた。

「アリシアー！」

「だいじょうぶよ」

カレンには目線が合うようにしてそう言う。

「彼も化け物に取り憑かれていたのか。かわいそうに、これを退治したら解放してやるからな」

もはや私には呪詛にしか聞こえないそれと共に剣が振り下ろされる。

私は黒い革製のグローブをはめた手の人差し指と中指でそれを受け止める。

確か…「シンケンシラハドリ」っていうカタナの奥義の一つだっ

たと思う。

私はカタナが嫌いなだけだ、これはカタナを使っていない、と頭の中で言い訳のように呟きながら続いて記憶だけを頼りにある技を繰り出す。

相手の呼吸を読んで、最も力の抜けたところですからりと意識の外で剣を奪う。

「…ふう」

しっかりと私の手に収まったロングソードを見て溜息をつく。これも確か…えーと…そう、「ムトウドリ」だ。

成功した事に場違いの嬉しさを覚えながら振り返る。

「…っ！」

そこには啞然とする騎士団長の姿。

「…王国騎士団では剣を無くしたときの対処法もならないの？」

懐に隠してある短剣なんかはどう？」

「…!?」

私がそう言うと騎士団長は慌てた様子で懐を漁りだす。そして一瞬動きを止め、少し安堵したような表情になってから鞘のついた小さな短剣を取り出す。

「……何故これの存在を知っている」

「……さあ」

私はもう二つ知っている。

一つは、あの短剣に毒が塗ってあること。

私の言葉に顔をおぞましいものを見たように歪めると、私の手にあるロングソードとは違う構え方で突っ込んでくる。

「……………」

私はカレンが動かないでいてくれることを確認すると、短剣をギリギリまで引きつけてから避ける。

そうすると目論見通り私の背後にある気の幹に短剣が深く刺さる。

「むっ……………」

そしてそれが一瞬では抜けない位置にあることを確認すると手にあるロングソードを振りかぶる。

「くっ!」

騎士団長は短剣を握っていない方の手をもう一度懐に突っ込むと、拳より少し小さい程度の革袋を取り出し、私に投擲する。

これがもう一つの知っていること。

予想していた攻撃を剣で弾くと、そこから細かい砂のようなもの



が飛び散る。

「眼潰し!?!」

「うん」

カレンが思わずと言った叫び声に答えるとその効果範囲外のカレンのところまで下がる。

「なあ、王国騎士団ってみんなあんなの持ってるのか?」

慄いた様子で言うカレン。

「まあね。気付いてないだろうけどあの短剣も眼潰しも毒たっぷりよ」

勿論致死のね、と小さく付け加えるとカレンが跳びあがるように言う。

「そんな危ない奴と闘ってたのかよ!?!」

「その割に助けに来てくれなかったじゃない?」

からかつように言ってみる。

「そ、そりゃ...その...」

「何?」

「...アリシアが「だいじょうぶ」って言ったからさ」

意を決したように言う姿に思わず吹き出す。

カレンがそこに反応しようとするが、騎士団長が短剣を木の幹から抜き、突っ込んできたことでそれを止める。

「アリシア！」

「だいじょうぶよ」

「!?!」

構えもせずに言う私にカレンが目を剥くが、静かに突っ込んでくる騎士団長を見る。

そしてもはや奇声としか言いようがない咆哮を上げながら突っ込んでくる騎士団長は、真上から降ってきた黒ずくめにあっさりと取り押さえられた。

「では、この男は連行しておきます」

「お願いするわ」

意識を手早く刈り取ってから私に一礼して黒ずくめは飛翔のような跳躍で森の向こうに消えていった。

「すげ…」

「さて…邪魔はいなくなったわね」

「邪魔!？」

さっき以上に目を剥くカレン。

黒ずくめに馬車を降りる直前に頼んでおいたのだ。

もし騎士団長が私達に剣を向けるようなら頼む、と。

私カレンを促して歩くと、すぐに道が開ける。

森の淵のようで、洞窟が口を開けている。

「これ…」

カレンが一步後ずさる。

「大丈夫、今回の群れは4体だけだから」

「はあ!？」

大きな声を出すカレンを宥めて少し下がって樹の陰に隠れてから口を開く。

「どういふことだ？十数体でA++ランクって話じゃ…」

「それはそうだけれど、それは強い力のオスを中心としたものだけ。それに群れって言ったら一応3体以上を指すんだから立派な群れよ」

実際、この3体でもランクはA++だ。

「そ、そうかあ？」

カレンが出した間の抜けた声を窺めると、その瞬間に感じた気配に私は勢いよく後ろを向く。

洞窟から音を立てずに出てきたのは手甲を持つ虎、ヒュースタイガーだった。

「あれが…」

「行くわよ」

「は!？」

「あれさえ狩っておけば後が楽！」

弾かれるように突っ込む。

そして大きく跳びあがると上から剣を振り下ろす。

タイガーはこちらを一瞥すると、迫る私の剣を最小限の動きで避ける。

そして当たり前のように鋭い爪を私の頭に向けて振るっている。

「くおっ！」

普段だったら吹き出してしまいそうな声を上げながらカレンがそこに楯を割り込ませる。

私はそこで大きく5歩分飛び退く。

カレンはこちらを見ることなく戦闘を開始する。

私は油断なく構えたままそれを眺める。

カレンは最初の一撃こそ防御されたものの、次々と繰り返される攻撃を楯と剣で叩き落としながら攻撃を刺し込んでいる。

今でこそ互角に見えるが、ヒュースタイガーに次々と攻撃を

それは掠めるだけとはいえ、命中させているあたり、カレンが少しだけ優勢だろう。

「だけどこのままじゃ……」

まずい、そう思う。

カレンに教えるのを忘れていた。

ヒュースタイガーは仲間の血の匂いに特に敏感なのだ。

それは彼女たちの連携は彼女たちが群れを作っている間は単体では狩りをしないことと、その間の狩りでは怪我をしないことに由来する。

つまりは彼女たちがけがをするのは侵入者が現れたときだけ。

私が一人で相手にした時は3体ずつ匂いがばれないところまで巢から引き離れたうえ、剣の血の匂いを毎回消すということをして戦った。

そして私の予想通り、最初の一体とは比べ物にならない程の大きな足音を立てながら残りの3体が姿を現した。

身を固めるカレンを援護するためにカレンの前に立ちほだかるタイガーの背中を深く袈裟がけに斬り裂くと、現れた3体に向けてその剣を払う。

ぴしゃぴしゃぴしゃ、と仲間の血を浴びた3体は、予想通り私に向かって咆哮を上げ、牙と爪を剥いた。

地を蹴りながら私に跳びかかる二体を一閃で退けてから地上の牙をむく1体を力尽くで押し返す。

その瞬間に後ろを横目で確認するとカレンは私に跳びかかるようにした自分の相手をしっかりと捉え、相手にしていてくれているようだった。

あの一撃は深手になっただろうし、すぐ終わるだろう。

そう予想して私は腰に据え付けてあるロングソードを引き抜く。騎士団長のものを拝借したものだ。

時間差で襲いかかってくるタイガーを次々叩き落とし、一体の腕を深く切り裂く。

ギュギヤ、と潰れたような音を口から漏らし、飛び退く際の僅かな着地さえよろけた様子から言って、おそらく使い物にならなくなっただろう。

それと同時に、左手の剣が悲鳴を上げ、崩れるのを肌で感じ取る。

その1体が思うように動けない隙に跳びかかってきた1体の爪を

身を屈めて回避すると、喉笛に片手で剣を叩き込む。

アイアンプレラの鉄の鱗を切り裂いたこの剣は、その重さと私の乗せた体重の力を十二分に発揮し、がつん、いう硬い骨を断ずる感触と共にヒュースタイガーの喉笛を貫通した。

続いて突っ込んできたもう1体を確認すると剣を両手持ちに切り替え、剣を思い切り振るってタイガーの？からだをそいつにぶつける。

そしてすぐさま剣を片手持ちに切り替える。

自分の4倍強の重みを投げたことで手が僅かに痙攣しているような感覚を覚えたが無視する。

先に倍する怒りの声を上げたタイガーが愚直に突っ込んでくるのを見、振り上げられた爪を今度は叩き落とし、隙だらけになった顔面を両断する。

同時にカレンが後ろでタイガーを倒したようで、緊張感が消える。

私はその様子に思わず呆れのため息をつく、残りの片足の使えないタイガーに近づく。

グルルルウ！と威嚇するが、痛みがひどいようで力ないものだった。

「……………」

私は無言のまま近づく。

「……………アリシアッ！」

「上だ！」

私はカレンのその声に思わず勢いよく顔を上げる。

私が点を見上げたとき、私に見えたのは広がる黒。

それは人の形となり、私の目の前に落ちてきて痛みにあえいでいたヒュースタイガーの首を両断した。

その手に持つカタナで。

「っ！」

私は思わず飛び退く。

そのカタナの色はあまりにも白かった。

それは人を引き込む光の色。

あまりにも現世から離れていた。

私は思い出す。

七刀を。

五行の五色に、白と黒。

それが七刀の色。

そしてその使い手は顔を上げる。

首を切り落としてから屈んでいた体を正しい姿勢に戻した時に気付いたが、こいつは少女だ。

こいつは私と似通った服装をしていた。



特に今日の私は速さを優先させるために胸当てすらしていない。

こいつの服装も、動きやすいながらもローブに近いようなコート。だが私ともものと違い、紅いような色のアクセントが入っている。

下も同様だ。

そして上げた顔は、私と同じ長い黒髪。

私と同じ黒い瞳。

私と

「私と、同じ……」

「同じ……顔だ」

最後にそう続けたのはカレン。

そう、この七刀であろうカタナを携えた少女は

私と、同じ顔をしていた。

そのことに私は思考が停止し、体を強張らせていたが、少女の方はさして驚いてもいない様子でこちらを向き、私の目を見ながら口を開く。

「…緋色<sup>ヒイロ</sup>、といます」

ヒイロと名乗った少女は、私と同じであろう声で、そう言った。

## 第25話

「…あなたは…誰…？」

私の声は思うように出てくれず、小さな眩きにとどまったが、ヒイロなる少女には聞こえたようで、無表情に言葉を返す。

「ふむ…刺激が強すぎましたかね。なかなか見分けもつけづらいですし…。」

「……ごうじましよう」

ヒイロはそう言って黒いたすきのようなものを取り出すとササッと目を隠してしまふ。

「……！？」

私とカレンが訝しげに首を傾けるが、ヒイロはそれまでと変わらない様子で口を開く。

「…同じことは、あなたもできるでしょう」

見えていないはずの目をこちらに向け、私の目を捉えて言う。

「……」

その言葉に私は何も言えなくなる。

もしもあの騎士団長の眼潰しで目が使えなくなった時はそのまま戦うつもりでいたのだ。

そうしなければいけない戦いが何度もあつて、私はそれでも戦えたから。

「…それは、七刀か？」

あまりの衝撃で何も言えないままの私に代わってカレンが疑問をぶつける。

その質問に、先の言葉で俯いていた私はばつと顔を上げる。

そうだ、あれは私が探していたものだ。

私が壊したがつていたものだ。

私はヒロが言葉を紡ぐ前にカレンの傍に滑り寄り、するりと楯ウアラケから剣を引き抜く。

カレンの意識の外から　それはさながらムトウドリのようで、ヒロが「はい」と口を動かしたとき　それは同時にカレンが楯から剣を抜き放たれたことに気付いた時　に私は二刀を構え、地を蹴っていた。

「むっ」

自分が普段通りなら自画自賛するほどに音も気配も殺した滑るような移動とそこから繰り出した二発の突きは目隠しをしているにも関わらずこちらを向いて私を捉えたヒロの七刀にはじき返される。

「…ふむ、わたしだけが自己紹介をするのもなんですからね。

紹介します。私の刀、七刀の一、光の白、白銀しろがねです」

ヒロが一息に語ったその名は私の記憶にあるものとは違った。私が出会った　出遭いであつてしまった七刀は…紅と蒼だ。

でも、そんなのは関係ない。

私は左右に弾かれ開かれた腕を戻さずに自分の領域の外から直感だけでヒイロに向かって左の剣を体の内側ハーゲンティに向かって薙ぎ払う。

それを僅かに体を屈めることで避けたヒイロは私の腿を突きで狙うが、私はそれを僅かなステップでかわ躲す。

かすかに腿の生地が切り裂かれた感触がしたが、私はそれを無視すると今度は右の剣をアイアンメイデン叩きつけるように振り下ろす。

ヒイロはそれを横からカタナで叩くことで回避してみせる。

重心を持つていかれまいと力を込めた右腕がみちみちと悲鳴を上げるが無視する。

僅かに顔をしかめるにとどめて左の剣を斜め下　ヒイロの頭に向かって斬りおろすがそれもバックステップで躲される。

「……い、けっ！」

そこを睨みつけながら自分を叱咤する。

地面に突き刺さってしまったメイデンを支点に力を作用させて一気に距離を詰める。

そこでヒイロがカタナを三度四度と振るうがどれも深い傷をつける気はないようなので無視する。

僅かに斬られた傷から血が流れるのを感じながらメイデンに全体重を乗せて突きを放つ。

先の斬撃の所為で避けられないところまで迫っていた切っ先をヒイロはカタナの腹でガードする。

私は思わず心の中で喝采を上げる。

カタナは斬ることに特化した剣だ。

だからこそ、脆い。

だからこそ、弱い。

あまりに一点集中された力は、横から叩かれるという単純な一撃で碎けてしまうのだ。

張りつめた弓の弦に僅かに刃を当てたら弾けてしまうように。

私はカタナとメイデンが接触する瞬間に瞬きをし、続けて起こるであろう破砕音に耳を傾けようとす。

が。

私が次に目を開けた時に飛び込んで来たのはカタナがメイデンの切っ先を弾き返す瞬間だった。

「悪くないです」

重量級のメイデンの最重攻撃の一撃を受けたにも関わらず自分の得物を一瞥すらせずにこちらを見ながらヒイロは言った。

「……………」

「ですが、鉄の乙女程度ではこれは折れません。勿体無いですからこんなところで無駄にしないでください」

「…何を」

食いしばっていた歯から漏れるように声が出る。

「憎しみを、です」

「…?」

私が疑問符を浮かべるとヒイロは「でしょうね」と小さく言う。

そして続ける。

「有限なんですよ、憎しみは。」

こんなところで、無駄にしないでください。

他の感情はいくらでも湧き出てくる安いものですが、憎しみや狂気や怒り…負の感情は大切なものです。

…私の言っていることを、私の言ったことを忘れないでください」

「黙れ」

しわがれた声が出る。

私の憎しみが有限？

私の記憶が消えない限りは。

私の両親に起こったことが無かったことにならない限りは。

私の時間が戻らない限りは。

私の憎しみは無限だ。

どん、と。

先のととは比べ物にならない踏み込みでヒイロの懐に入る。

「！」

目の前が白くスパークするのを感じながら左右の剣を自分も知覚できない程のスピードで振るう。

右左右左右左と。

後手に回ったヒイロを止めていた息を吐き出すのと同時に最後の一撃でカタナごと吹き飛ばすと、背中から地面に転がったヒイロに肉薄し、首にメイデンの切っ先を突き付ける。

「はあ、はあ、はあ、はあ……。」

赤と、青の、七刀の使い手はどこにいる」



息も整えぬまま問う。

「赤と青？」

……嗚呼、火と水の使い手ですか。

私にはわかりませんよ、特に五行思想で天敵同士の癖につるむ彼らの事はね」

得物を突き付けられていることをまるで気にしていない様子で「それはそうと」と一拍置いて言う。

「なかなかいいです。

私に会ったことで新たに生まれた感情もあったようで幸いですし……。

手土産に使い方を教えていきますね」

「!?!」

ヒイロの言葉を理解できず、なおかつ感じた悪寒に一步退く。

「……!」

「構えなさい」

ゆらりと立ちあがったヒイロはそれだけ言った。

私にできた行動は剣を構えることではなく、メイデンを楯のように翳すことだけだった。

そのとき感じた悪寒は言葉にできない恐怖だった。

そして次の瞬間にはヒイロのカタナによってアイアンメイデンが

半ばから叩き斬られていた。

## 第26話

結局ヒイロはその後にもせず消えた。

私とカレンがヒイロの存在を夢ではないと確信できるのはまるで  
やすりで削ったように滑らかな切断面を残されたアイアンメイデン  
があるからだ。

「……ん …………… ないっ」

鉋石入れに頭を突っ込むようにしていた姿勢を跳ね上げるように  
元に戻す。

ふー…と長い溜息をついてから金床の上に乗せてある壊れた剣を  
見る。

これをつなぐのはそう難しくないのだが、つないただけでは意味  
が無いので新たな『つなぎ』を入れて改良しようということだ。

それに適切なのはメイデンの材料の合金の中でも最も比率の高い  
金属…重鉄じゅうてつと私達わたしが呼んでいる圧縮された鋼こうのだが、それはも  
ちろんドワーフの技術で、その元となる鋼が足りないのだ。

それも合金にしなから圧縮するという荒技が必要なので、量がそれなりに必要なのだ。

「…ご主人、買い物済ませてきたぞ？」

もう一度大きな溜息をつきながら頭を抱えた私の後ろからアリスが声をかけてくる。

「…え、シアに頼んだ筈だったんだけど…」

肌は大丈夫？」

見たところアリスの恰好は帽子をかぶっていないどころかノースリーブのワンピースである。

アルビノの人間はメラニンが無いために日光はそのまま毒になる。

サンバーンと呼ばれる火傷のような日焼けをしてしまうのだ。

「アシュモアに貰ったこれをつけていったから大丈夫じゃ！」

ばーん、と口で効果音をつけてアリスがワンピースから何かを取り出す。

「…これは？」

「日焼け止めだそうじゃ」

日焼け止め？

私がそうオウム返し聞くとアリスはそうじゃ、と頷く。

「これを塗っておけばキュウケツキとやらでも外に出られるらしいのじゃ。」

現に、儂も問題なかったぞ」

嬉しそうに言うアリス。

私もつられて微笑む。

キュウケツキが何かは知らないけれど、おじさんには感謝しないとね。

そんな風な思考を深める途中でアリスがおや、と声を出す。

「どうしたの？」

「カレンの姿が見えんの」

私は嗚呼、と小さく言う。

「カレンは一人で依頼を受けてるわ。」

Aランクに上がるための課題の一つ」

「ほー、あの人も成長したもんじゃのう」

なんだか口調によりことさら年をくつっているように聞こえるアリスの感嘆の声。

「…あ、私も後で依頼を受けるからまたしばらくお店お願いね」

私の言葉に任せておくのじゃ、と元気よく返事をしたアリスの手に食費とお小遣いを乗せると、私はシアと二言三言言葉を交わしてから奥に引っ込んだ。

「…は？」

私は耳を疑う。

「やから、一人やない依頼なんやってば」

スノウがあっけらかんと言う。

「この前帰って来た時に確認したときは一人だって」

「アリシアが受けてくれるとは思ってなかったんやろ。」

こっちから知らせ出した途端に『黒の女神』に会いたい言つたん  
や」

私は自分の字あざなに顔をしかめる。

そして今度は不安を前面に出して言う。

「今回 A + ランク依頼だよね？」

「そうや

ついてきはるのもAランクのやつや」

いや、ランク足りてないし。

そう突っ込むが「あくまで同行者や」と一刀両断されてしまう。

「…ふう。

…で、その同行者様はどこ？」

呆れと諦めを主な成分とした長い息を吐き出すと、スノウがきつと入り口を指差す。

ちょうど開いた扉からは一人の少女が入ってくるところだった。

茶色い髪はショートな髪型ながらも美しく流れている。

その冷やかな双眼は褐色。

だけれど私の目は彼女自身ではなく彼女が背負っているものに釘付けになっていた。

「あれは 弓？」

私がそれに釘付けになった理由。

弓がギルドの仕事に使われることはほばない。

いくら矢尻が鉄だとしても、ほとんどの魔物の皮膚を弓矢は貫くことができないからだ。

いや…だけどあれは

「魔剣 なの？」

私のそれには確信があった。

折りたたまれ、彼女の背中に背負われた弓は、金属光沢を放っている。

そしてなおかつ、その弦は鋼の弦だ。

あれを人間の技術で作ろうものなら、弓を引いたものの指を飛ばすただの危険なものだ。

でももしそれが魔剣なら？

もしそれが通常の武器をはるかに上回る性能に偶然なった弓なら？

私が疑問符と推論を頭の中に並べているうちにその使い手が私の目の前まで来る。

「あなたが 黒の女神？

私はセシリア、セシリア・ニユクス。

よろしく」

私は彼女が差し出した手をしばらく眺めているだけしかできなかつた。



## 第27話

「私の實力は私が示す」

彼女のそんな一言で私は何も言えなくなり、肩をすくめながら了承した。

二手に分かれることをだ。

彼女はもちろん後衛。彼女が標的を射抜くことが戦闘開始の合図。

「……………」

私は身を屈め、今回の目標を息を殺して見つめていた。

場所は砂漠だが、岩が多い場所のため、身を隠すのに苦労はしない。

私はいつもの自分イレギュラーにない異分子を左手に構えると何時もの剣

だが今回は相手を考えて軽い、それでいて切れ味の最も高い部類の片手剣カラドボルグ を右手に構える。

そしてついに飛来した1撃がそれを貫いた。

それは一言でいえば巨大な狼だ。

前足の腿を貫かれたそれはまず痛みに咆哮を上げる。

「……………はっ」

だが私の耳にその咆哮は入らなかった。

はっとして走り出した私があるうことか戦場で呆けていたのはセシリアの弓の技術と、それが魔剣であることを確信したのが理由だ。

巨大な狼　ただしそれには目が右側にしかなく、左目がある場所には「銃口」があるのだが　その姿通りガンウルフと呼ばれるその狼の皮は分厚く、俊敏さを生みだす脚の腿の筋肉の太さは私の腰ほどもある。

のだが。

セシリアはそれをあっさりと貫いて見せた。

命中させただけでも素晴らしい技術なのだ。

なぜなら、私の目にはセシリアの姿は見えないのだから。

それも刺さるだけなら分かる。

貫いたのだ。

矢尻は腿を完全に貫通し、ガンウルフの腿には僅かに矢羽が見えているだけだ。

痛みへのたうつウルフは、私を見るや否や、まるで親の仇を見たような表情をすると左目の銃口の6つの内3つから時間差で2発、1発と弾を打ち出した。

私達の世界に「銃」は存在しない。

古い文献にはあるのだが、それを再現するには至っていないのだ。ガンウルフは獲物の肉だけでなく、骨や岩なども食う。それを体内で圧縮精製したものがこの「銃弾」なのだ。

詳しい原理までは知らないが、危険性は知っているので迷わず避ける。

最後の1発を剣で弾くと一気に距離を詰める。

まだ15mはある距離はウルフにもう一度攻撃チャンスを与えた。文献の銃と違い、リロードは瞬間的かつ無制限。

放たれた6発の弾を次々弾くと私は後ろに引いていた左手の異分子　　槍をウルフに突き込んだ。

「！」

槍の一撃を放つために一瞬足が止まった所にウルフがこちらに銃口を向ける。

どうやら槍の一撃は喰らうことを前提にしていたらしく怯んでいないようだった。

思わず舌打ちをしながら回避体勢に入るが、私が動く前にたたんっ、と軽快な音と共に3本の矢がウルフの眉間、右目、銃口を貫く。

私は思わず矢の跳んできた方向を振り向きそうになるが、意思を総動員してその気持ちを抑え込むとウルフの胸に刺したままの槍を引き抜く。

「やあっ！」

一度腕を引いて剣と槍をクロスさせるようにしてから槍で円を書くように3撃。

続いて右手の剣で十字に切りつける。

最後に私のゆうに3倍以上はあるであろう体躯に回し蹴りを決め

てからがら空きにした心臓を槍で一突きにする。

ウルフの命を奪った瞬間私が顔を上げると、顔を蹴りあげられて心臓と同じようにがら空きになった喉には実に4本の矢が刺さっていた。

この戦闘でセシリアが放った矢は僅か8本だが、実力は充分過ぎるほどに伝わった。

弓の銘はレラジエ。

黒と鈍色の姿に、鋼の弦を持つ弓。

私の予想通り、まごうことなき魔剣だ。

しかしこれを手に入れたのかセシリア本人ではなく、祖母だという。

名前も外見も弓も祖母のものを受け継いだ彼女は、祖母の名前を名誉という幻影に悩まされながらもAランクまで上り詰めた。

私が彼女の名前に心当たりがあったのはその所為だ。

お母さんから聞いたことがある。

黒弓くろゆみのセシリア。

二代目セシリアは初代にまだ勝ちえないだろう。

初代の彼女はSランクでギルドも任せられるほどの実力者。だが私には素材としては聞いていた初代以上だと思えた。

それが反感を買って 私には理解できない理由だったが し  
まったのか、何故かこんなことになってしまっている。

「行くわ」

「……………はあ」

私は肩をすくめつつ溜息をつく。

目の前の弓を私に向ける彼女はおそらく最強の弓使いである。  
ぎりぎりぎり、と凄まじい力が込められているのが分かった私は  
反射的に槍と剣を構えると前傾姿勢になる。

そして25mほどある彼女との距離を詰める為に足に力を入れる。

この決闘のルールは簡単。

死んだら負け。

私は彼女が放った4本の矢を槍で一息に落とす。

振り切ったとき出来る隙に差しこまれる矢は右手の剣で払う。

そして私は足にためていた力を放って地を削りながら走る。

私がセシリアに肉薄し剣を突き付けるまでに彼女が放った矢の数は実に26本。

もう呆れるしかない。

「ごめんなさい」

「…別に良いわ、でもどうして決闘なんかを？」

「それは…あなたのようになりたかったから、です…」

消え入るように言ったセシリアに私は思わず「はい？」と聞き返してしまう。

「アリシアさんはS・ランクなのに自分に奢ることなくなおかつ最高の鍛冶屋だと聞いてあなたのようになりたいと思ったんです！

生意気言ってますいませんでした！

…その」

一息にそこまで喋った彼女に面くらいながらも何故急に敬語になったのだろうかという疑問だけが渦巻いていたりした。

それが呆けてしまった理由だ。

「…その、私と一緒にまた組んでいただけますか!？」

「あ、嗚呼…うん？」

「…やったーっ!」

あ…面倒事を引きよせたかな？

遙かに年下…アリスやシアを思い起こさせるような感情表現で跳ねまわる彼女を抑えつけたのはしばらくたってからだった。

## 第28話

「あ、そこはそうじゃなくて…」

私は傍らのセシリアを制すると見せるように弓を引く。

彼女のものとは少し色の違う弓術の型なのでセシリア自身のフォームを歪めないようにアレンジしたものだ。

セシリアが横から「わー…」と子供のように目を輝かせるのが気になって仕方がないが、必死に意識の外に追い出すと、弓を引きながら息を吐く。

最後にふつと大きく吐いた時に矢を放つと、弓は 自分で言うのも何だが 見事に的の中心を射抜く。

「わーっ…」

その感嘆を切ると、よし、と自分で掛け声を掛けてから表情を引き締める。

とても同一人物とは思えない真剣な表情になって、矢をつがえる。

そしてさきほど私が行ったのとは僅かに異なったフォームで射る。

たん。

私の狙った的とは別のものだが、その真ん中を彼女が打ち抜く。

セシリアがふう、と息を吐いたところで声をかける。

「…うん、力<sup>りき</sup>んでる感じは多少抜けたね。

あとはこれを意識して使えるようにして…」。



そうだね、あと一週間くらいは仕事を休んで様子を見ながら練習してみて」

「はいっ！」

元氣よく返事をするセシリアにはほえましい気持ちになる。

なぜ私がギルドの裏に用意された訓練場を利用して、あるうことか弓の名手に弓を教えているかというところ、セシリアの弓の技術がなんとというか…すさまじいながらも拙かったからだ。

任務の直後に飛び跳ねていたセシリアが弦を引いていた右腕の痛みを訴えたのだ。

痛みの症状自体はそれほど重くなく、冷やすことで収まったのだが、聞いてみればそれは慢性的なものらしいのだ。

多少全体の技術も教わっていた私は、それは主におじさんからだったりするのだが、マッサージでコリをほぐすとともに、ギルドの練習場で、彼女独特の癖を直す訓練をしていたわけだ。

聞けば、セシリアの弓は予想通り彼女の祖母から習ったものだった。

黒弓のセシリアの技術は素晴らしいものだが、大事な事を教わり終わる前に祖母は逝ってしまったらしい。

再現しようと苦心した結果これでは報われないと思ったのだ。

聞きかじりの知識しかないため、私に再現は不可能。

出来ることは、多少威力が落ちることになってでもセシリアの弓使いとしての寿命を削らせない打ち方を教えること。

キュウドウという名の古い技術を応用したものが私の弓術だ。

これも両親の残したもの。  
少ししんみりした気持ちになる。

「…どうかしました？」

「あ…ううん、何でもない」

大丈夫、と付け足して答える。

「じゃあわたし宿に戻りますね？」

弓と矢を片付けながらセシリアが言う。

「うん」

そしてしばらくギルド近くの宿に滞在するので何か手伝えることがあったらいつでも言うてくださいます云々（うんぬん）という言葉を残して二代目黒弓のセシリアは去って行った。

彼女が二代目ではなく新たな二つ名を持つ日が来るのを心のどこかで予感しながら私はそれを見送った。

「あ、カレン　　！？」

私が言葉を失った理由は簡単だ。  
セシリアと別れてから数時間。

アリスとシアに買い物頼み　アリスはあの真つ赤な日焼け止めのおかげで肌が全く焼けないことが証明できたので頼んだ　幾つか来ていたオーダーメイドの依頼をこなすために炉に火を入れたところでカレンが裏口の扉をノックしたのだ。

カレンの恰好はどこかゴースト…黒づくめに似た　それは同時に私に通ずるところもあるのだが　全身黒で鎧が最低限の胸当て程度しかない服としか呼べないもの。  
左手には楯ウアラクとそれに納めた剣ハーゲンティ。

そして右の腰には　カタナ。

彼が以前捨てたものではない。  
私はそれすら覚えてしまっている。

そのカタナはどうしてか私に瓜二つの少女ヒイロを連想させ、それでいて彼女の振るっていた光色のカタナとは似ても似つかない。

それはおそらく雷鳴の黄色。

そしてそのカタナに見え隠れする黄金こがねの色。

古いゴギョウシソウと呼ばれるもの一つだ、と思った。

そのなかの、金。

土から生まれ、水を生むものの象徴。

私はそこまで分かった所で顔をしかめながら目を細める。

「それは…？」

「……話、聞いてくれるのか」

カレンが憔悴した声で言う。

「私を誰だと思ってるの。」

それが何かぐらい理解できるわ。

それに…

カレンがカタナよりも私の剣を使っつて言った約束も、覚えてい  
るわ」

だから、話さない。

私はいつももよりずっと尊大に、偉そうに、自信を持って、胸を張  
ってそう言った。

## 第29話

「俺の今回の依頼は問題なく終了した。  
こいつらのおかげでまた一歩進めた」

ありがとうな。

そんな妙に哀愁漂うカレンのそんな言葉をさらっと流し、私はカレンに先を催促する。

普段ならばB++ランクを一人でクリアしたことを褒めるべきなのだが、それはAランクに上がってから、少なくともこの件が片付いてからではないと駄目だと思ったのだ。

「それから黒ずくめに報告に行こうとして馬車に向かい始めた直後に『あいつ』が現れた」

椅子に座った自らの膝の上に乗せた金行のカタナを顔をしかめて見ながらそう言った。

「『あいつ』?」

カレンらしくないわだかまりの様な不満の様な…。

兎に角濁った感情を感じた私は思わず怪訝そうな口調になりながら言う。

「『ヒイロ』」

「!」

ついこの間敗北した相手の名前を出されて私は思わず息をのむ。  
私の今回行った依頼も剣を打ち直す為のものでもあったのだ。  
アイアンメイデン  
忘れられるはずがない。

私がどんな表情をしていたのかはわからないが、カレンが心配そうに「大丈夫か？」と聞いてきたので頷く。

「…ヒイロは前会った時みたいに急に出てきて右手に抜き身の光色の七刀と左手に鞘に入れたままのこれを持ってた。

それでこれを差し出しながら言ったんだ。『これをあなたに継いで貰います』って」

私の脳裏にあの時のヒイロの姿が甦る。

そういえば、ヒイロは鞘を持っていなかった気がする。

あんな危険なカタナを常に抜き身のまま持ち歩いているのだろうか、とくだらない疑問が浮かぶが頭を振ってそれを消す。

「…で、馬鹿正直に受け取ったの？」

そんなわけはないと内心では思っていたが、わざわざジト目を作って言う。

「違いーよ！モチロン断った！」

「……………その…ぶちのめされたんだ」

「へ？」

後半だけがあまりに小さい声の為にほとんど聞き取れない。

「だから！ぶちのめされたんだよヒイロに！」

ヤケクソになったのか叫ぶように言う。

私は今度こそ作ったものではない　しかも先ほどよりずっと湿度を増した　ジト目をカレンに向ける。

「……………」

「……………」と、兎に角！

気付いたら倒れてて、こいつが腰に差してあったんだよ」

こつこつ、とカタナをつつきながら言う。

「それ、処分しようとは思わなかったの？」

「思ったさ、アリシアの為に……」

「…8回、いや9回だ」

「何がよ」

私の為にも、という部分はあえて聞こえなかったことにする。

そこが気まづかったのか、頭の後ろを掻きながらカレンが口を開いた。

「俺がこいつを手放した回数」

「……………」

疑問符を浮かべた私に、だろっな、と苦笑を見せると言った。

「ぶちのめされて起きた時にその場所に置き去りにしたんだよ、この刀」

「……じゃあ、わざわざ取りに戻ったと、9回も」

私はさっきからジト目のままだ。

「それも違う！」

大声で否定したカレンは私を仰天させる言葉を放つ。

「この刀、馬車でうとうとして気付いたら手元にあったんだよ！」

「!?!」

「……………へえ」

自分でも驚くほど低い声が口から出る。

この声、いや音はまるで低級な怪談のような、あるいは出来の悪い噂話のようなカレンの話聞いて出たものだ。

そして私の目はこれまでの人生で一度もなかったほど、そしてこ



れからの人生でもおそろくないだろうほどジト目になりながら言った言葉だ。

「ほ、本当なんだってば！  
信じてくれよ！」

「……………はあ」

今度は溜息。

カレンが言うには、戻ってくるらしいのだ。

カタナが。

欲しいという輩に渡したり、質屋に入れたり、そこらの盗賊に投擲したり（もちろん鞘に入れたままだ）したらしいのだ。

が。

ことごとくカタナは戻ってきた。

そのたびにカレンは払い戻しに行く羽目になったらしい。

「…とりあえずは信じておくわ」

「じゃあその可哀相な人を見る目でこっちを見るのは勘弁してもらえないか…？」

ほとんど涙目になりながらカレンが言う。

私は苦勞してその「可哀相な人を見る目」を解くと、カレンに向かって手を差し出す。

「…な、なに？」

「カタナ、渡しなさい」

「え、でも…」

いいから、とカレンの鼻先に手をつきつけるとカレンは膝の上のカタナを差し出す。

カレンが渋ったのは無駄だと思っているからだろっ。

「……とりあえずは…」

私はカタナを受け取ると、カレンに背を向け工房にある棚を開く。カタナを持っていない方の手でこそそこそと中を探ると『それ』は時間をかける前に出てきてくれた。

『それ』で金行のカタナの鞘と柄つか、鏢つばを結び付ける。

これでカタナは抜けないはずだ。

私がカタナを「封じる」のに使ったこの紐はどういう技術か、金属でできている。

その割に紐としての機能を果たすのに支障が無いほどの柔軟さを備えている。

「それ…なんだ？」

「とりあえずは封印よ。カレンの話の通りなら何をしても無駄だろうけど、これで人を傷つけることはないはず」

普通人を傷つけるのは人だけれど、これはべつでしょう。  
そんな言葉を付け加えながらカレンに投げ返す。

「それもそうなんだけど…って重っ!？」

何で出来てるんだよこの紐!？とカレンが叫ぶ。

金属とは言っても紐レベルなので、それほど重くはなっていない  
はずだが、やはり紐としては驚くべき重量なのだろう。

「さあ?金属でできてるのは確かなんだろうけど私はそれを教わっ  
てないから」

うちの先代の特別品だから平気な筈よ、と笑いながら言う。

「帰りましたよー!」

「ご主人、全部揃ったぞ!」

ちょうどそこまで言った時、アリスとシアが工房の扉を開ける。  
二人だったためにいつもよりも多い買い物頼んだせいか、二人  
ともいろいろ抱えている。

「ありがと、じゃあご飯にしようか?」

「はい!」

「おう!」

元気よく返事する双子に思わず微笑を浮かべながら続いてカレン  
を見やる。

言葉にするまでもない」「カレンもどう?」「といついつもの誘いだ。

「んー…じゃあ、頼む」

これまた何時ものカレンのセリフを聞いて場が和み、続いてすぐに用意を始めたため私は違和感を忘れてしまっていた。

私がかたナに恐怖を抱かなかったことがどれだけ異常なことをか。

### 第30話

「な、なんだそれ!？」

私の姿を見てカレンの出した第一声がそれだ。

私は恰好こそいつも通りだが、装備が違う。  
左手に楯、そこに差した剣。

要するに、カレンと同じ恰好だ。

「な、なんで…?」

「最後の授業って所かしらね、Aランクまでの」

「……………?」

「いいから行くわよ」

疑問符を浮かべたままのカレンを引きずっていく。  
カレンは無事に五つのB++ランクの依頼を成功させた。

残りの猶予期間は一月。充分間に合う。

ただB++とAの間には巨大な溝が存在する。

そこに至るまでに必要なのは剣術の完成だ。

カレンの剣はもともと使っていたカタナから使い方も体重移動も  
変わっている。

最も変わった点は、持ち手。  
諸手から片手に。

今でこそ自分のものに完全ではないものの出来ている。

だから最後に、見せる。

あくまで模倣だが、完成形を。

私はカレンの襟首をつかんだままギルドのドアを開ける。

私の様な体格で同じ程度の体格のカレンを引きずっている様子にか、一瞬中がざわつくが、すぐにいつもの喧騒を取り戻す。

「……ふーん、あんたがなあ」

私の装備を一瞥すると、スノウが微笑を湛えながら言う。

「まあね。今回は特別」

そして私はいつもの黒本ではなく、依頼板の一番上についている依頼を指差す。

「……やっぱ古き竜……か。  
エンシェント・ドラゴン

手に負えるんか？」

「負えるか負えないかじゃないわよ。

それから……ここで古き竜なんて言っているの？」

コラプト・ドラゴン  
腐敗した竜をさ、と皮肉を込めて言う。

「余計な御世話や。あーあ、ここで素直に送りだしたら叱られるん

やるつなあ…」

は「、とわざとらしくこちらに視線を向けながら溜息を吐く。

そして私を相手にする時には珍しく、大きく深呼吸してから受付嬢の顔になって言う。

「同行者一名、の腐敗した竜狩り、確かに承るわ」

「カレンは腐敗した竜についてどこまで知ってる？」

揺れる馬車の中で問う。

「……すこしだけ。  
セイクリッド・ドラゴン  
聖なる竜が堕ちた存在だって事くらいか」

「まあ、それだけ知っていれば十分ね」

頷きながら答える。

「でも、俺たちだけでそいつに何を仕掛けるんだ？」

「スノウが言ったたでしょ？狩るのよ」

私が真顔で言つと、カレンが呆れたという様子でふるふるふる首を左右に振る。

「冗談：だろ？SSランクだぞ？」

SSランク。

カレンが恐れるでも笑うでもなく呆れたのはこれが理由だ。

ギルドの主を任せることができるほどの人物数人に対して出される依頼、ではない。

ギルドの全てを持って相對せよ、という依頼だ。

それが緊急であることは少ない。人のあずかりしれない地を人のものにするための依頼がほとんどだ。

「いいえ、冗談じゃないわ。

大丈夫よ、最強種を相手取るのは初めてじゃないから」

最強種、というのはSSランクの別名だ。

文字通り最強、その代わりに人の住む地には現れない事が条件のある種の神とも言える存在。

私の言葉を聞いてカレンが恐る恐る、と言った様子で口を開く。

「それは：ギルドで、だよな？」

「いいえ、一人で」

結局死にかけたけどね、と笑顔で付け加える。



「それ、二の舞になるだろ!？」

「そんな訳ないじゃない。そのときだってちゃんと倒したわよ。私の最後のやんちゃとしてね」

「……嗚呼……黒の女神ってそこから来たのか……」

何かを　主に私の所業の異常さだろうが　悟ったような表情  
になって言うカレン。

「あはは、まあね」

私は意気揚々としている。

以前に別の最強種と相対した時私の胸には何もなかったというの  
に。

黒ずくめによるいつもの説明が終わると、私はカレンに向き直る。  
因みに腐敗した竜の巢は洞窟。

その奥の奥にあると言われている《神の鉱石》を守っている、ら  
しい。

私には関係のない話だが。

「カレンは今回手を出さないでね？」

「はあ!？」

そこから続く小言は耳に手を当て「聞こえないー」と妨害する。

「今回は危険になったら逃げてもらっし、見捨ててもらっわよ？ 実際の目的は倒すことじゃないし」

「…じゃあ何のためにこんなところまで…」

私の話を聞いて最強種への恐怖が希薄になっているのか、カレンは呆れた様子で言う。

「今のままじゃカレンにAランクをこなすのは無理だから。価値観を壊しておくのと地力の底上げをしておこうと思ってね」

「ああ… Aランクよりも先にSSランクを体験しておけばちょっとはましになるだろうっていう素敵滅法な理由か…」

「そんなところね」

笑顔で言うとカレンが項垂れる。

私が壊したい価値観というのは、カレンの中で弱くて薄くなってしまう最強種のことだというのに。

「ッ……！」

「……………ふふふ」

カレンが膝を笑わせながら足を止めたのを見て思わず忍び笑いを漏らしながら、私は剣を楯から引き抜く。

その刀身はあらゆるものを被い清める炎の緋色。

伝承に登場するヒイロカネほどではないが、私の最高傑作の内  
の一本であるまだ名もない

ワンハンド・ロングソード  
片手用直剣。

腐敗した竜を相手取るのにこれほど相応しい剣もないだろう。

楯はお母さん作のものを借りた。

いつもとは違う構えで腐敗した竜を見据える。

もう顔をこちらに向けた竜は、洞窟の最奥部にあるこの部屋に漂う死臭の源だということがはつきりとわかるほど不吉な存在感を撒き散らしながら咆哮した。

他の生物とは違う、無音の咆哮。

カレンが動けずただ腐敗した竜を見つめているのを確認してから私は地を蹴った。

第0話 出会う前に 1 (前書き)

外伝です。

本編はこれが終わり次第再開します。

そう長くはならない予定です。

## 第0話 出会う前に 1

「ッ…やつ！」

小さな気合の声と共に、振り下ろされようとしている鋭い足に向けてカレンは刀を諸手で腰だめに薙ぎ払った。寸分違わず標的の関節に潜り込むと、足を関節から丸々一本切断する。

牛ほどもある巨大な蜘蛛型の魔物は片側の足を3本切り落とされたために、遂にバランスを崩して転倒する。

予見していた状態に持ちこめたことに僅かな安堵を感じながらそれでも構えを解くことなく身を翻すと、一気に大蜘蛛に近づき首に向かつて刀を振り下ろした。

骨を持たぬ蜘蛛の、それでも硬い表皮を刀の刃は貫き、蜘蛛がもがき始める前に絶命させた。

命を奪うその感触に伴って背筋に走る怖気を必死で押しとどめると、カレンは膝をついて刀から離れた右手で顔を覆う。

背筋を走る怖気が収まるのをしばらく待ってから、大きな溜息をつき、立ち上がる。

これで依頼は終了だ、帰ろう。

そんな思考を浮かべながら刀を汚している蜘蛛の体液を左右に斬り払うことで飛ばすと、鞘に納める。

そうすることでさらに疲労が増したような気がして、後悔する。

戦闘に必要なあらゆる神経　主なところで言うと視神経やら反射神経やらの話だが　が毎回悲鳴を上げるほど酷使して戦う今のスタイルでは、自分が強くなっているかどうかを確かめるほど余裕

が無い。

そこまで考えたところで、心玉を取り出し忘れていることを思い出す。再び刀を抜く気力すら湧かない。

考えるのすらもどかしくなつて首のない胴体に歩み寄ると、傷口から手を突っ込んで 勿論その感触に顔をしかめる羽目になるのだが 心玉を取り出した。

疲れた体を引きずりながらゴーストの元へ行き、心玉を手渡して馬車に乗り込んだところで意識が途切れた。

「おお、相変わらず不景気そうな面してんなカレン」

「……………」

カレンは目をぐりぐりと押していた指を離して声の方向に向く。

「なかなか伸び悩んでる。

そっちはどうだ？ネスト」

果実を搾った飲み物を一口飲んでから言う。

カレンよりも二回りほど体格の良いネストは唇をひん曲げる。

この顔さえしなければ色男なのに、などと場違いな考えを浮かべながらも耳を傾ける。

「俺らのレギオンは良い感じだ。依頼も順調だしな。…なあカレン」  
そこで唇を曲げるのを止め、真面目な顔をする。

「どうしても俺らのレギオンには入る気はないのか？」

カレンは力無く笑いそうになったが、抑えて気安い笑いに変える。

「あんなあ、大組織レギオンなんて呼べるほどの人数かよ？

…誘いはありがたいけど、断る。  
刀の手入れには金がかかるしな」

前半のくだりで今度は不機嫌さを表す為唇をひん曲げていたネストだったが、カレンが言い切った所で大きく溜息を吐く。

「お前、そいつを捨てる気もないのか。

そいつは正直足枷だと思っぜ？お前の腕でならもうちょっと扱いやすい武器を使えば」

カレンはその先を言いかけたネストの顔の前に右手を翳して制する。

「それは、本当に必要なら俺が決める」

その言葉にネストはまた大きく溜息を吐く。

「…だな、余計な口出しして悪かった。ただ俺らはいつでも歓迎するからな」

真面目な顔をした後にニツと笑って色男は出ていった。

「はあ…どうするかなあ…」

思わず溜息をつきながらカレンは立ちあがった。

宿に戻ってシャワーと軽い食事を済ませたカレンは続けて依頼を受けた。

珍しく刀の刃こぼれが無かったため、そのまま行くことにしたのだ。

今回は珍しい若い刀使いに興味を持ったのか、五人グループらしい男達と共にガルム討伐任務に就いた。

ガルムは大きな狼だ。漆黒の毛皮を特徴としている。

その大きさは馬以上で、なお且つ俊敏さは狼のままなので厄介なことこの上ない。

「んん…まあ大したことねーよなこの人数でかかればよ」

リーダー格の男が声を出す。

場所は深い森。何故こんなところのガルムが討伐対象になったのかは分からなかったが、鬱蒼とした森の中に月の光を浴びながら立



つそいつはカレンが何度か目にしたことのあるガルドとは違っていた。

「でもあれ、何か違いますか…?」

「確かにな。でもここまできてカラ振りでしたじゃスノウ嬢に愛想尽かされそうだな。トンボ帰りしたきやしてくれ」

こっちはこっちでやるからよ、と続いた。

カレンは一瞬考えて、それもそうかと思考が落ち着いたところでしかけますか?と声を出す。

「そうだな…。一応花火は俺の方で用意する。あんたは俺らの前衛と仕掛けてくれ」

このパーティは、カレンを含めて前衛四人、後衛二人というそれなりにバランスのとれた陣形になっている。

月の光以外でも青白く光っているガルドを見、そばに同じ様に潜んでいる前衛のうちの一人に目配せする。

頷いたのが見えたところで得物を抜き放ちながら立ち上がる。

その前衛とともに地を蹴り、刀を振り下ろしたところで一旦視界が途切れる。

第0話 出会う前に 1 (後書き)

意見感想待ってます。

誤字脱字があればご一報を

## 第0話 出会う前に 2

ごろごろと地面を転がり、体中に激しい痛みを感じながら無理矢理立ちあがったところまで目に入ったのは、同時に突っ込んだ前衛の男の頭が銀色のガラムによって噛み砕かれるところだった。

「ヤスパーツ!!」

後衛にいた男が食われた男の名前を叫ぶ。

その声に反応したらしいガラムは、ぶん、という異様な音を立てて声を出した男の前に姿を現す。

「ひっ!？」

それ以上声を上げる前に男はガラムの前足の一撃で絶命した。

全く見えなかった!

その異常さに戦慄を覚えながらも、カレンは構え直す。

「っ」

だが、そこで自分の手が震えているのに気付く。

それによって生まれた一瞬の隙を疲れることこそなかったが、前衛の男がもう一人やられたところを目にしてしまう。

「っっ…」

立て続けに襲いかかるリアルな死に吐き気を覚えながらも、遂に

自分の方向を向いたガラムに得物を向ける。

そいつが目を細めた瞬間に、刀を切り上げる。

カレンの放った斬撃は、一瞬にしてその身に迫ったガラムの前足を退ける。

カレンの足に倍するほどの太さと、それに見合った威力を孕んだそれを退けられたのは僥倖以外の何物でもなかったが、それを喜ぶ余裕はない。

数歩後退して、また動いたガラムの前足と牙の攻撃をカレンは全て直感で避ける。

腹の下にスライディングで滑りこみながら両手で刀を切り上げる。

「ぐっ…おっ！」

危ういところで腹の下から抜け出す。

だがそれで湧いてきたのは絶望だった。

刀が、通らない。

切れ味を最も武器とする刀にとってこれはどうにもならない相手だ、と悟ってしまう。

実はここは通常のガラムと同じで、腹を守るために毛皮が異常に分厚くなっていることが理由だったのだが、極限状態のカレンにそれがわかる筈もなく、ただ立ち尽くしてしまふ。

今度こそカレンに襲いかかった死を退けたのは、ゴーストだった。

カレンに向けられた牙を素手の左手で下から顎を持ち上げること

で閉じさせると、そのまま掴みあげる。

体格に差があるので、勿論ガラムが持ち上がったりはしないが、それでもガラムの動きを完全に止めた状態で黒ずくめの男は言った。

「カレン様。失敗を告知する明かりが打ち上げたのでこの依頼はここまでにさせていただきます。ギルドにも非がある依頼で下が、どうかご了承を」

カレンが聞いたのはそこまでだった。

「っ!？」

唐突に全身に走る痛みに飛び起きる。だが、その所為でまた走る痛みに顔をしかめる。

「大丈夫ですか？」

「えっ？」

まだ混乱する頭を整理しようとしたところでカレンを覗き込んだのは、ギルドの受付嬢兼マスコットガールのスノウだった。

スノウは柔らかな栗色の髪を揺らしながら顔を上げる。  
カレンには自分と同年代に見えるのだが、やけに落ち着いた雰囲気はそれを感じさせない。

「治療はしておきましたから」

笑顔で言われ、近づいていた名前と同じ雪色の肌にしどきまぎしながらも自分の体を見る。

いつもの戦闘用の装いではなく、ゆったりとした見慣れない服になっている。その下には包帯などで治療された痕。

カレンがこれを着流しと呼ばれる恰好であるという事を知るのもう少し後になるのだが。

「あの、依頼は…?」

「ごめんなさい、こちらの情報ミスです。依頼の成功報酬の2倍の慰謝料をお渡ししますのでご容赦願えませんか…?」

スノウが抱えた袋に入った額の大きさに思わず目を剥く。

「で、でも、俺たち依頼を放棄したんですよっ?」

体に走る痛みを無視して大きな身振り手振りをしながら言う。

「今回はギルドの側の情報ミスだからです。」

カレンさん達の標的だったあれは、ガルドではありませんでした」

「ガルドじゃ…、なかったのか、やっぱり」

「はい」

再びスノウが「申し訳ありません」と繰り返す。

「じゃああれは、なんなんですか…?」

「おそらく、ヴァナルガンドと呼ばれる獣です」

「ヴァナルガンド…?」

聞き慣れない名前に、オウム返しに聞く。

「はい。…ですが、これ以上はまだ機密事項なのでお話しできません。申し訳ありません」

もう何度目になるか分からないスノウの謝罪を止める。

「いいえ、仕方ないです。その…他の人たちは…」

「…あなたが聞くべきではないと思います。どうか、忘れてください」

「……………はい」

残酷な、それでいて慈愛に満ちた言葉に素直に頷く。

「…アリシアの出番になりそうだな。あいついつまで引き込もつとるつもりや…」

「…え?」

スノウが呟くように言った言葉は、カレンの耳にはほとんど入らなかった。

「あ、い、いいえ。なんでもありません。

そうだ…感謝料に関してなんですけど…」

「え…充分ですよ？」

何度か刀を手入れしても充分贅沢できる金額を貰っていたため、その点では委縮していた。

「私個人としては、危険な目に逢わせてしまったので、お詫びとして一つ紹介しておきたい武具店があるんです」

「武具店？」

「ええ。全てにおいて信頼できる武具店なので、行ってみたいと思っております…」

はにかむように言いながら、小さな紙を渡される。

「地図…ですか？」

「ええ、名前はアリシア武具店。私のお墨付きです。良ければ行ってみて下さいね。」

あ、動けるようになったらで良いですからっ」

そう言った後、ウインクをして可憐な受付嬢は仕事に戻って行った。





第0話 出会う前に 2 (後書き)

意見感想待ってます。

誤字脱字があればご一報を

## 第0話 出会う前に 3 (前書き)

諸事情でPCが使えず、携帯からになります。  
見にくいとは思いますが、よろしく願います。

## 第0話 出会う前に 3

「うーん……」

カレンはショーケースの前で唸っていた。

目の前にあるのは一品物らしい刀。確かに刃紋は美しく、装飾は華美になりすぎずかつ綺麗に仕上げられ、鞘も文句なしなのだが……何かが違う。

自分が求めているものとは何かが違う、そう思ったのだ。

そして値段はギルドから支払われた感謝料がほとんど吹っ飛んでしまうほど。

まずカレンがこんなに悩む羽目になったのは、あのヴァナルガンドという名らしい獣のせいだ。

カレンの刀は、感謝料が払われた次の日に日課の点検で見ると細かくひびが入り、修復不可能なレベルまで壊れてしまっていたのだ。

スノウに薦められた店に行こうかとも考えたのだが、地図上で街の外れのあの場所にマニアックな装備である刀が置いてあるとは思えず、隣町のそれなりに大きな武器屋を訪ねたのだった。

他にもいくつか刀は売られているが、とても刀らしくない刀……すなわち刀鍛冶が打ったものではなさそうだ、と一目見てわかるものばかりで、ひどいものでは見ただけで鑄造だとわかるものもあった。自分の目も疑わしいカレンは、値段で判断することにしたのだ。

今までカレンが使っていたのは、カレンの両親が持っていたもので、だからこそ使おうと思ったし愛着も湧いたのである。

いくら一品物もので一級品でも代わりにはなれない、そう思った。

だがそれはそれである。

依頼を受けるためには仕方がないのだ。

そう自分を納得させると、店員に声をかける。

店員はカレンと刀を見比べて驚いた顔をしたが、何も言わずに会計をした。

このときカレンが一括払いをしたのを見て店員が顎を落としたのは余談である。

カレンはその次の日にスノウに薦められた店を訪れた。

ギルドからそれなりに離れた町の外れと言っている場所にある

店。

「……………」

アリシア武具店、と書かれた看板の下には控えめな入り口。

「……………はぁ」

期待はしていなかったが、やはり昨日の店と比べると明らかに見劣りする。

店主が聞いていたら雷を落とされそうな理由でため息をつく。

一応見るだけ見ていくか、とこれまた失礼な理由で店に入ることを決めると、扉を押し開く。

「いらっしやいませ」

その声のした方を向くと、自分より小柄な少女が笑顔を浮かべていた。

少女は鍛冶をするときの格好なのであろう作業着らしきものを

着ていたが、カレンはしばらく呆けてから自分が彼女に見とれているのに気がついた。

慌てて会釈すると武器の置いてある棚に近づく。

カレンは武器を見るふりをしながらたった今見た少女の顔を思い描いた。

カレンにとっては多少身近な言葉である和風の顔。

和風という言葉が今まで人に当てはまることはなかったなあ、と思考を浮かべてから、嗚呼、これが大和撫子ってやつかあ、と更に思考を武器から逸らせていく。

アリシアという店の名が彼女の名前なのか、あるいは別の例えば母など 女性の名前なのか、などを考える。

そこで少女が作業着だったのを思い出し、この店の武具は彼女が作ったのかなあ、などと考えたところで自分がどんな下らない思考を浮かべているのかを認識する。

「…なわけないよな」

思わず口に出してしまい、少女に聞かれていないか確認してから自分自身に苦笑したところでやっとカレンの意識は武器に向いた。「…!!」

なんだ、これ。

武器を認識したカレンの頭はそんな疑問に支配された。

カレンはプーカとセイレーンの力を持つ。

それ故に、声無き声が聞こえた。

今まで聞いたことのない歌、祠、うた。

昨日買った刀からは何も聞こえなかった。

今まで使っていた刀からは壊れてしまう前にはかすかに聞こえることがあった。

それと同系統だということはわかるが、圧倒的だった。

これが自分を求めてくれたら、そう思った。

カレンの目は自然とそれを探す。

だが、無い。

店を一通り回っても、見つからない。

小さな店だ、見過ごしはしないはずだ。

少女に目を向けた。

そしてカレンは、始まりの言葉を紡ぐ。

### 第31話

こんこん、と私の部屋のドアがノックされる。

「どうぞ…わざわざノックしなくてもいいんだよ？」

「そういう訳にはいかないだろ、着替え中だったらどうするんだよ？」

「その時はカレンがちょっと痛い目に遭っただけよ？」

「その『だけ』が怖いんだが…」

「ふふっ」

カレンの困り顔に、私は思わず笑いを漏らす。

「とりあえず食事。…それから、俺は午後から依頼を受けてくるよ」

「あれ、私が治るまでは店を見てくれるって話じゃなかったの？」

特に怒りを込めることもなく、素朴な疑問を込めて言う。

「いや…ちょっと生活費がね…」

今度は笑ったような困ったような顔で言う。

「……………」

「……………」



「……………」

「……………あの、アリシア、さん？」

私は大きな大きな溜息をついた。

「うう……」

「もしかしてアリスとシアが何かねだったりしたの？ だったら私に言ってくれれば……」

「や、違う違う。ちょっといろいろあってさ。」

そうそう時間はかからないと思うから……」

どうやら私はもっと家族を信用しても良いらしかった。

「そっか……ん、いってらっしゅい」

「ん、行ってきます」

最初に言っておくと、私がカレンと結婚したとか、そんな非現実的な状況でカレンが私の家に住んでいるわけではない。

原因は二か月前の淵との戦い。

私は大けがを負った。後遺症こそないといえるが、全治三カ月。

個人の決闘としてはぼろ負けした形だが、ギルドにとってはこれ以上ない程の吉報、らしい。

私の剣は歪んでしまったものの深刻なダメージは無く、楯には傷一つなかった。

そして私の剣は淵 腐敗した竜の翼を切り裂き、足を動かなくし、その体をそこそこ傷つけるにまでは至ることができた。

痛めつけた淵は私達が消えた後気配を潜めたらしい。目下調査中らしく、これ以上の情報は無かったが。

その時のけがの看病をするために、カレンが私の家に泊まり込んでいるというわけだ。

双子の世話と、しばらく体の動かせない私の看病 勿論着替えなんかはアリスとシアに頼んだ と、店番。

そんなところ。

そしてカレンは、Aランク昇格を蹴った。

私は本気で怒ったのだけれど、ミイラのような姿では殴って送り出すこともできず、諦めた。

その時のことを思い出し、はあ、とまた溜息をつくると私はベッド

から起き上がる。

まだ体は痛むが、大したことは無い。

問題と言われていた内側の傷も、大分癒えてきている。

自分の恰好を姿見で確認する。

着替えをするのもしてもらうのも楽な着物を着崩した恰好に、その下は包帯。

「まるでミイラね」

自分で言っても笑ってしまえるようになったのは最近だ。

私がドアに向き直り、開けようとしたところで外側から勝手に開く。

「…シア」

「ご主人！…起き上がって大丈夫ですか？」

「もちろんよ」

多少痛む手を持ち上げて彼女の頭を撫でる。

彼女の呼び方から「様」が消えたのはそう昔の事じゃない。

「食器を受け取りに、と思ったんですけど…」

「ありがとう…それから、今日はちょっとシア達にやってもらいたいことがあるの。

いいかな？」

食器を渡しながらそういうと、シアは困ったような顔になる。

その顔がカレンと重なるのは気のせいだろうか。

「でも…ご主人は…」

「私は大丈夫。…でもシア達はとても苦労しちゃうの。」

「…やらない方がいいかしら？」

「い、いえっ！」

それならやります！やらせて下さい！」

勢いよく言う彼女に向かって、私は微笑む。

「ん、じゃあ食器を片づけたらアリスを連れてきてくれる？」

「はい！」

「理論編から実践編へ、だね」

お母さんはこんな気持ちだったのかな、と想像しながら思わずにやにやしてしまう私はやっぱり変なのかな、と思ってしまった。

## 第32話

「ただいま、アリシア」

着物を着崩したままの姿を貫いて三日。カレンは訪れた。

「ここはあなたの家じゃないわよ。…あら、随分可愛らしいお客さんじゃない」

「こ、こんにちわっ」

「ふふ、こんにちは」

カレンの後ろにくつついて入ってきたのは明らかにカレンよりも年下の少女だった。

全体的にどこか小さな生き物のような印象を受ける。鎧は各所をガードしながらも動きを阻害しないもので、武装は片手剣と楯。

いささか緊張気味なのかつつかえ気味の少女に笑いかける。

「……………」

「……………？嗚呼、この恰好が珍しい？」

これは着物っていう別の地域の服なの」

「キモノ…ですか？」

そう、と小さく頷く。

「それで、何をお求めですか、お譲さま？」

「あ、あの！えとえと…ね、細剣レイピアを探してるんです！」

私の悪戯っぽい呼び方に真つ赤になった少女が言ったのは、扱いが難しい剣の名称だった。

「細剣を？」

カレンにちらりと目をやる。

「えーと、彼女　　キリカつていうんだけど…今までの武装は見たまんまなんだけど、動きが細剣向きだったからとりあえず使ってみないかって勧めたんだ。」

頑丈なレイピア、ここなら置いてあるだろ？」

照れ笑いを浮かべながら言うカレン。

うーん、と私は難しい顔になってしまう。

「別に無くはないけど、彼女がどれくらいの筋力なのかとか実力なのかとか具体的に示して貰わないとちょっとねー」

それに、と付け加える。

「細剣って、むちゃくちゃ扱いが難しいのよ？  
こんな風な」

カレンに「抜きなさい」と合図を送る。

カレンが剣を抜き放ったところで、商品の内の一本を逆手に持ち、

カレンの剣の切っ先に切っ先をぶつける。

「!?!」

カレンは小さく弾かれた自分の剣を見ながら、少女：キリカは私の手元の細剣を凝視しながら驚きの声を上げた。

「…こんな風な芸当が目をつぶってでもできない限りは、細剣で戦おうと思わない方が賢明よ」

一つの依頼に10本も20本も剣を持っていくなら別だけど。そう言いながらも、私作の武器をバキバキ折りながらバハムートもどきと相對していたおじさんを思い出して苦笑してしまう。

カレンも同じ様に苦笑を浮かべている。

「?」

「ごめんなさい、なんでもないわ。

さて…どうする?」

「え…うー…」

唸って黙り込むキリカ。

「ま、自分の武器のことだしゆっくり考える方が得策よ。ここにあり武器、素振りならしてもいいからゆっくり考えて頂戴」

は、はい、と頷くキリカに笑いかけて私はカウンターに戻った。

「なんか、悪い魔女みたいだよな、アリシアって」

「余計なお世話よ」

「いつ!?!」

カウンターに近づいてきて小声でそんなことを言ったカレンの足を本気で踏みつける。

キリカはまだ悩んでいる様子で店内をうろろしている。

「カレンが異常なだけよ、あんなに簡単に自分の武器を捨てるなんて。」

ところで、あんなに可愛い子をどこから盗んで来たの?」

「失礼な、依頼で一緒になったただだよ。危なっかしかったから助けたんだ」

あー、と唸りながら、頭の後ろをばつが悪そうに掻きながら、カレンは言った。



「ふうん…」

「あ、あのー！」

私が微笑みながら頷いたところで、キリカは私に声をかけた。

「お決まりかしら？」

「い、いえその…どれも素晴らしいので目移りしてしまっ…て。弟を待たせてるのでまた来てもいいですかっ？」

「勿論。またおいで、キリカちゃん」

「なんであなたが答えるのよ、カレン」

「いつ!?!」

先ほどと同じ場所を、先ほど以上の力で踏みつける。

「ま、カレンの言うとおりいつでも来て構わないわ。どうせ私は店を出られないし。」

「昔前までのカレンみたいじゃないあなたならいつでもお待ちしてるわ」

「あ、ありがとうございますー！」

「またどうぞ」

ばたばたと駆けていくキリカを見送る。

「…弟さんの世話が忙しいから彼氏は要らないって」

「あのな…」

流し目で言った私にジト目で返しながらカレンは溜息をついた。  
実はこの時、キリカに心の中で「いいまじよさん」なんてあだ名  
をつけられているのを私は知らなかった。

それよりもずっと問題のある来客がやってきたからだ。

「こんにちは、武器の研磨の依頼です」

「……！」

私とカレンは揃って驚愕した。

「良い店ですね。…それを所持したままでいて頂いてありがとうございます」  
「…尤も、封印はされているようですが…」

私と同じ顔、私と同じ、ただし緋色のアクセントの入った戦闘用  
の服装。

黒い眼隠し、抜き身のカタナ。

ヒイ口はカレンの腰のカタナを見ながら言った。

### 第33話

「驚かせてしまいましたか？申し訳ありません」

「……………」

本当に申し訳なさそうに言ったヒロに、私の隣でカレンが自分の剣に手をかけた。

「……………私に貴女の依頼を受ける義務はないんだけど」

私も身構えながら言う。

「そこまで警戒しなくても大丈夫ですよ。言ったでしょう？依頼があるだけです」

「抜き身の得物を持っている人間が言うセリフではないわね」

「…それもそうですね、失礼しました」

ヒロが言った瞬間に手元に持っていたカタナが霧のように消える。

「!?!?」

「……………」

「これでいいですか？…確かに貴女には依頼を受ける義務はありませんが、権利があります」

驚きを隠せないままのカレンを柔らかい横目で見ながらヒイロが言った。

「まるで、私が喜んでそれを受けるように聞こえるけれど…?」

私は怪訝さをにじませながら言う。

「ある意味ではそうですね。料金で、と経験的な意味でとても他にはない依頼ですから」

「……………」

「金額は」

こんなところでどうですか?とヒイロがどこからともなく紙を取り出す。

そこには馬鹿らしいほどの大金が書かれていた。

「……………」

「現金で用意します。そして研磨してほしいのはこれです」

またどこからともなく取り出したのは…少なくとも私には錆びた鉄塊にしか見えないものだった。

大きさもそれほどではなく、ヒイロの…おそらく私と同じ大きさの手に握られている。

「…わかりませんか?うーん…正式名称コルト・アクション・アーミー、通称ピースメーカー」

「ぴーす、めーかー？」

「ええ」

たどたどしく同じ様に返したカレンに小さく頷くヒイロ。

「…わかりません、よね？」

「さっぱりだわ」

「そうですね…端的に言えば『銃』ですね」

「…銃？」

自分の耳に聞こえたあり得ない単語を今度は私が返す。

「伝説の武器の名は武具屋魂に触れましたか？どちらにせよ貴女にしか頼めない話ですから。どうです？」

「御伽噺の、の間違いでしょう。そんなものが存在するわけ無い。してはいけない。そんなこともわからないのかしら」

「……………」

「でも」

そう私は続ける。

ヒイロは私と初めて話したときから嘘をついていない。

「…もしそれが御伽噺に出てくる武器なら尚更、私はその依頼を受  
けられない」

「……………？」

きよとん、というような表情になるヒイロ。  
私は続ける。

「それは魔物を倒す武器じゃなくて、人を殺すための武器でしょう  
よ」

「…！」

私の横でカレンが息を呑む。

「…わかりますか」

少し目を細め、鋭い表情になりながらも、穏やかに言う。

「御伽噺で銃は戦争の引き金だった。それはたったそれだけの大き  
さで人をたくさん殺した。そう書いてあったわ」

「……………」

ヒイロが黙ったままなのを見て私は続ける。

「それに、銃の…弾丸、でいいのよね？それは魔物を相手にするに  
は小さすぎる。

私が作るのは、人殺しの武器じゃないわ」

そんなものを研磨するだけでも、嫌よ。  
そう吐き捨てる。

「……………やはりあなたは……………」

ヒイロが小さく呟くが、私の耳には届かない。

「なに？」

「いえ…とりあえず設計図とこれは置いていきますね。どうせ貴女  
がないと意味の無いものですから。」

これで失礼し　ッ！

「…よく捉えたわね」

私は投擲姿勢のまま小さく溜息を吐く。

「…容赦ありませんね」

「聞きたいことがいろいろあるからよ」

「そう、ですか」

私の放ったダガーナイフを柄を捉えるという常人離れた技で防  
いだヒイロは、それでも穏やかな声で言った。

「何を聞きたいですか？」

「答えてくれるのかしら」

私は一番近くの柵の洗練された一本を手に取りながら言う。

「ア、アリシア」

「さがってて」

私はカレンを遮ると切っ先をヒイロに向ける。

「とりあえず一度捕まえてからゆっくり聞く、わ！」

ぎし、という体の軋む音と痛みをどこか意識の端で感じながら私は右足で踏み込んで剣を突き出す。

「く…」

ヒイロはいつの間にか顕れていた右手に持つカタナを複雑な表情で一瞥した後、さっき左手で捉えたダガーで私の突きを僅かに右側に逸らした。

「…ッ！」

だが私は、みし、と音がするほど力を込めて軌道を修正する。

「！…！…っ！」

自らの喉笛に向けた切っ先を、ヒイロはカタナを持った右手…あらゆることかその甲で受けた。

「な…！」



カレンが驚きの声を上げる。

「…ち」

それが私の耳に届く時、私はヒイ口と鼻の先を突き合わす形で静止していた。

私はヒイ口の顔の左側に逸らされた剣を戻すことも忘れて言う。

「…なんで」

手の甲で私の剣を刀身を受けたヒイ口に答える。

「貴女のような素晴らしい鍛冶師スミスが、刺突剣エストックのような完成された武器に手を加えるとは考えにくいですから」

「………」

ぎり、と歯を食いしばってから私は剣を引き、一歩下がる。  
だが、私はこれで退くつもりはなかった。

## 第34話

「ああ、もっつー!」

私は思わず手に持っていた剣を店の床に突き込む。

びいいん、と振動したそれに一瞥もせず椅子にふらふらと戻る。

体のあちこちが痛い。

ヒイロには逃げられてしまった。

こちらも、あちらもけが一つ負っていない。

「…その、ごめんな、アリシア」

「………なんでカレンが謝るのよ」

ふーっ、と溜息をつきながら言う。

「いや、一応………あのさ、聞いていいか?」

「あれのこと?」

「あ…おう」

私が椅子から動かずに床に刺してある刺突剣<sup>エストック</sup>を指差すと、カレンが小さく頷く。

「見た目通りよ。あれは普通の刺突剣じゃなくて刺突剣らしさを極

限まで究めたものなのよ」

「らしさ？……突きについてか？」

「文字通りって意味でね」

珍しく鋭いカレンに笑いながらも、思わず苦笑に変わってしまう。

「針のような一撃を放つ…尤もこの剣は針を大きくしたと考えていい形をしてるから…」

視線を流す。

「あつ、攻撃に使える場所が切っ先だけになる…？」

「当たり」

それを見抜き、例え見抜いていても躊躇せずその前に手を差し出すヒイロに、私は少しだけ畏敬の念を抱いてしまう。

「…なるほど」

カレンは自分の剣を納めると近寄っていつて苦労しながらもエス  
トックを引き抜いた。

「重…しかもこの床…うああ、石なのに…」

「当たり前よ。私はいくら怒ってっただって武器を壊すようなことは  
しないわ」

私の言葉にカレンが苦い顔で「納得」と呟く。

エストックは店の床を深々と貫いていて、なおかつ傷一つない。私の自慢の一品なのだから。

「カレン？」

「……ん、ああ、何？」

「ごめん。床を埋められるもの、買ってきてくれる？」

「…わかった」

顔色が悪いまま、コクコクと頷いてカレンは店を出ていった。

「あら」

「お、おはようございますっす」

「おはよう」

次の日、私が店を開けるとそこには可愛らしい訪問者が立っ

た。

「朝早くからごめんなさい」

「ここはお店よ？開店しているなら問題はないわ。さ、どうぞ」

扉を大きく開けてキリカを中に招き入れる。

「ど、どうもですっ」

「じゅっくり」

私は相変わらずががちに緊張したままのキリカに微笑みかけると椅子に戻る。

しばらくは可愛らしくためつすがめつしているキリカの様子に微笑ましいものを感じることに集中していた。

だが、しかしというかやはりというか、思考は昨日のヒイロ、そして今日の私の体についてに流れていつてしまう。

先ほど、というか起きた時から感じていた。

調子が良いのだ、良すぎると言ってもいいくらいに。

「……………」

椅子の上で体を軽く伸ばしてみるが、痛みが走ったり、軋んだりしない。

うーん、と唸る。

傷跡が消えたわけではないのは確認している。

体に残っていたダメージそのものだけが消えたような、そんな感覚なのだ。

ヒイロが去ってから、これが起きた。

今度はそちらに思考が行く。

ヒイロに関して私が知っていることはほとんど何も無い。  
私と同じ顔。

それでいて、鋼鉄の剣を叩き斬るといって、脅力なのか技術なのか相変わらずわからないままだが、  
並はずれた実力の持ち主。

そして七刀の持ち主。

これくらいだ。

わからない。

彼女が私と同じ顔をしていることに対して、私はなんでこんなにも何も感じないんだろう。

双子でもなんでも無い、突然自分と同じ顔の人間が目の前に現れる。

普通はそういう状況になったら何か気持ちを抱くものではないの  
だろうか。

嫌悪感とか、そういうもの。

まるで、違和感がない。

それが一番不思議で、一番恐ろしい。

何もわからないまま、時間が経っていった。

「…あの」

「…あ、ごめんなさい、何かな？」

私が二度三度と瞬きをすると、椅子の前にはキリカが立っていた。ちょうど太陽が真上にある時間帯にまでなってしまうている。

「きよ、今日は午後から依頼に行こうと思ってるので、これで…」  
何が申し訳ないのか、緊張気味につつかえながら言うキリカ。

「そう。またいつでもいらっしやい」

「え、えとその…ひ、冷やかしみたになっちゃってごめんなさい」  
「っ」

「え…あははっ」

私は思わず吹き出してしまう。

「え、え！？」

「ふふ…そんなことは気にしなくていいの」

彼女のふわふわとした髪を撫でると、彼女は目を細める。

「…あ、ありがとうございます……」

顔を真っ赤にして俯きながら答えるキリカの背中を押し、「ほら、いってらっしゃい」と言うと、何度も頭を下げながらギルドへ走って行った。

嵐が来たのは、そのすぐ後だった。



### 第35話

ギルドと言うのは、曖昧な枠を作ると無限に増えていってしまうものだ、と父は言っていた。

だから、ギルドはそう数があるわけじゃない。

別に父の言葉がそうさせたわけじゃなく、暗黙の了解のようなものがあるのだ。

ランクがSのギルドマスターがいること。

そのギルドマスターが『聖剣』を携えていること。

聖剣。

私の目標でもあるもの。

世界に確認、いや認定されている聖剣は十本弱に止まる。

聖剣は、魔剣だ。

かなり矛盾していることを言っているのはわかってる。

魔物の突然進化種、魔剣持ち。

心玉と融合した中でもかたちを歪めず、より高みへと至ったものだけを指す『魔剣』。

その魔剣の内、10人いたなら10人が。

1000人いたなら1000人が。

「人智を超えた」と言うであろう魔剣。

それが聖剣だ。

だから、それを携えるギルドマスター達は『マスター』を名乗るのだ。

しかし実はというか、私のすぐ近くに例外が存在する。

おじさんだ。

聖剣を携えたギルドマスター達のギルドは大抵その聖剣の名前で呼ばれる。

対しておじさんのギルド　おじさん本人が呼ばれることもあるが　デュラハンと呼ばれている。

聖剣が無い＝頭が無いと言う事だ。

もつとも、それを皮肉で言う人はほとんどいない。

そんなおじさんを私は尊敬している。

私なぜこんな話をしたのか、早めに言っておこう。

それはおじさんと同じ高みにいる人間が私の店を訪れたからだ。

「……………聖剣使い…？」

燃える様な赤毛と対照な色の青い瞳をもつ優男という表現がふさわしい男に向かって私は呟く。

私は彼の名を知っていた。

「おや、私のことをご存じか？これは光栄」

皮肉ではなく、本当に嬉しそうにしながらうやうやしくお辞儀をする。

「一応、改めて自己紹介させてもらいましょうか。」

ギルド、ミスティルテインがマスター、ノルドです。お見知りおきを」

「え、ええ……」

差し出された手に応えながらも、私の目は彼　　ノルドの腰に集中していた。

「気になりますか」

「あつ　　ごめんなさい、不躰でした」

慌てて一歩下がって頭を下げる。

「構いませんよ。どうせ　　この剣を余すところなく見てもらうのですから」

「……………え？」

彼は腰の剣を抜き放った。

抜き放ったと言っても、ノルドが私に斬りかかって来たとか、そういう事じゃない。

研磨ではなく、修理の依頼。

あるうことが、最強の証である聖剣の、だ。

「ご内密に、と念を押して剣とやたら大量の金貨を押しつけるとノルドはさっさと引き上げていってしまった。

「…どっしりってのよ」

深い緑色の鞘に収まる細剣を見ながら思わず私は呟いていた。

### 第36話

「……………っつ！…！」

私はそれを握っていた右手を左手を使って引き剥がす。  
それ　つまり、預けられた聖剣の柄、である。

「……………」

二人がいなくてよかった。

最初に思い浮かんだのが双子のことなのは自分ながらに苦笑を誘うものだったが、すぐに表情を引き締める。

『これ』は何。

そんな疑問すら、挟んだら『吞まれて』しまいそうだった。

小さく深呼吸。

そうしてから、ふと思いついてある剣を左手で引き寄せる。

バハムートを斬り裂いた剣。

お父さんとお母さんの最高傑作のそれが、今はただただお守りだった。

左手でそれを握りしめつつ、聖剣の柄に手をかける。

どくん、と。

剣が脈打った。

「……」

握った右手から何かを流し込まれているような不快な感覚を嫌というほど味わいながらも、剣を抜きだしていく。

どくん、どくん、どくん。

剣は脈打ち続けている。

ぎり、と奥歯が鳴った。

そして、およそ30秒をかけて抜き出された聖剣<sup>それ</sup>は、確かに呻いた。

スワセロ。

「!!!!!!」

それは、酷く弱々しい声だった。

弱々しい、弱り切った。

それが残念ながら私の幻聴でない事は、繰り返されている現状が示している。

スワセロ。

クラワセロ。

ササゲロ。

それは明らかに人を惹き込む類のものだった。  
魅せ、惹きつけ、墮とす。

そんな類のもの。

私がそれを冷静に観察できるのは、一重にその声が小さい  
つまりは、剣が傷<sup>よわ</sup>ついているからだろう。

傷。

つまりは、これが彼 ノルドが私にこの剣を託した理由なのだ。  
深緑の刀身 細剣と片手直剣の中間程度の太さを持つこの聖剣  
のちょうど切っ先から三割ほど。

そこに、刀身の太さをほぼ二分するのではないか、と思うほどの  
ひびが入っている。

そのひびはどういうわけかどす赤い色をしていて、どうしてか私  
に血を連想させた。

ずっと見つめていることすら怖くなり、ゆっくりと瞼を閉じる。  
その事でより鮮明に聞こえてくる声は左手に力を込めて右手を引き剥がして対処する。

左手の剣に宿る優しい気配に心の中でお礼を言いつつ、私は目を開きながら理解する。

この剣は聖剣たりえる強さをもっている。

ただ、その実態は聖剣からは程遠い。

「むしろ 邪剣とでも称すべきね……」

思わず口から洩れたのは皮肉をたっぷりと含んだため息交じりの言葉だった。

「……………よし」

すぐに立ち上がって炉に火を入れる。

同時に手に嵌めるのは、蛇の鱗を持つ籠手。

剣の代わりに、このグローブに護ってもらおう。

元々お父さんたちのものであるこれを私が使うのは忍びないけれど、今回ばかりは勘弁してもらおう。

この邪剣は、私が封印する。



がつん、がつん、がつん。

頭がおかしくなりそうだった。

がつん、がつん、がつん。

まるで、剣に心を喰らわれたような気分だった。

がつん、がつん、がつん。

自分と剣の境界線がわからなくなる。

がつん、がつん、がつん。

それでも、私の手は勝手に動いてくれる。

がつん、がつん、がつん。

私が剣に打ち込んでいるのは、翠色の金属にして宝石。

がつん、がつん、がつん。

そして、鞘そのものも、その打ち込むものの一部になっている。

がつん、がつん、がつん。

鞘を剣の一部に。

がつん、がつん、がつん。

意味するところは、封印。

がつん、がつん、がつん。

鞘と剣を一体にしているのだ。

がつん、がつん、がつん。

鞘に剣を収めるどころか、剣を鞘にするようなもの。

がつん、がつん、がつん。

魔物を飼テイムするいならすかのようじ。

がつん、がつん、がつん。

牙を抜いて、爪を切って、首輪を付けて、鎖につなぐように。

がつん、がつん、がつん。

刃を潰して、刀身を錆びつかせ、重しをつけて、鎖につなぐ。

がつん、がつん、がつん。

私が。

わたしが。

わたしが、やる。

### 第37話

「……………」

双子は おじさんのところに預けた。

「……………」

カレンは 依頼を受けている。

「……………」

そして、私の目の前には ノルド。

「直して、頂けました？」

「……………ええ」

私は包帯だらけの手に下げていた前よりも一回り太い鞘に納まった剣を手渡す。

包帯の理由は…自分を保つため。

とてもじゃあないけれど、誰かに見せられるような状態でなくなっているのは確かだ。

「……………では、私のギルドに移籍していただけますね？」

「……………ひとつだけ」

「何でしようっ？」

恐らく、この男は私がこの剣に魅入られたと思っているのだろう。そうしてまで 邪剣を外に出してまで、叶えなかった目的はなんなのだろう。

勿論、ただこれを直したかったというのもありうるが。

私は、そんな疑問をぶつけた。

「ああ…驚いた、そこまでの理性が残っているんですね。…流石はデュラハンの聖剣、と言ったところでしょうか？」

「……………？」

「ああいえ、こちらの話ですよ。貴女にこの剣を託した理由、でしたね？」

小さく頷く。

「勿論貴女が優秀な鍛冶師だというのが一番です。ですが、私個人としてもみすてイルテインというギルドとしても貴女を獲得しておくのはこの先必要なことでしてね。

ここまでさせてもらった、という次第です」

にこにここと、笑う。

「さあ、こちらへ」

「……………」

私には、その笑みが死神のそれに見える。

「……………もう、ひとつだけ」

「……………なんでしょう？」

「……………貴方は、その剣で何人の人間を殺したの？」

私がそれを避けられたのは僥倖以外の何物でもない。

緑色の軌跡。

寝不足に救われた、というのは自分のことながら情けないと思う。

私の酸素の行きとどいていない頭がふらりと揺れたところを緑色の軌跡が通ったというわけ。

「……………か弱い乙女に酷いマスターさんもいたものね」

「一人以上は数えていませんよ」

「は……………？」

「貴女を『か弱い』と表現するのは非常に遺憾ですがね」

「んん……………」

何だか会話がかみ合わない。

「『は…?』『ん…?』とは聞き返しの意と取ってよろしいですね?」

殺した数は一人以上は数えていません。

貴女をか弱いと表現するのは遺憾だ、と申し上げました」

……………、ああ。

私は気付いたことがおかしくて思わず吹き出してしまっ。

「なるほど。ひとつひとつの問いに答えないと気が済まない人、というところ?」

色々な意味で難儀な人ね」

「答えは是ですね。難儀と言われるのには少し抵抗がありますが、教師などには向いているとは自負しています」

言いながら、緑色の剣を構える。

「とんだ聖職者ね」

「貴女こそ」

「なにかしら」

「風の噂では冷徹な方だと聞いていましたが」

「…剣のせいで眠れなかったのよ。噂と違うのはそのせいじゃない

かしら」

言いながら一步下がって用意していた剣を引き抜く。  
あの籠手と同じ種類の蛇の魔物の鱗を柄に纏わせたもの。

鋭い突きをその柄で受け流す。

それだけで包帯に紅いモノが滲む。

「その手、どうしたんです？」

「寝るな、寝たら死ぬぞ。ってやつよ」

「……理解しかねますが」

「そりゃあ、その剣に抗わない人には理解できないわ」

言葉と共に激しい切り払い。

少し力を込めただけで紅く濡れるこの手の状態では弾き<sup>バリイ</sup>防御は流石に遠慮したい。

曲がりなりにも大人の男にして聖剣使いだ。

物理的な威力だけなら上がっているわけであるし。

重量を減らしつつ刃を潰しつつ元の剣の柄や刀身を覆い隠す。

最初の一つは…流石に無理だった、というわけ。

「……む」



「よかった」

「何がです」

「声。聞こえないみたいだね」

「だけならまだしも、という反論を期待していますか」

「まさか」

「でしょうね」

完成されたステップと共に突き。

「く……」

仕方なく柄を持つ手に力を入れ軌道に割り込ませる。

相手の腕が伸びきった所に合わせるように大きく踏み込んで切り上げ。

ぶしゅ、と手から音。

しかも、相手はのけぞって避ける。

「ち……」

体を一回転させることで十分な威力を追加しつつ二撃目。

これは剣を盾代わりに防がれる。

先のものより大きな舌打ちをしまつてから、剣を左手に持ち

替えつつ右手を振るう。

「む……！」

「ふっ！」

剣がすっぱ抜ける予感をひしひしと感じたために、血で視界を一瞬潰されたノルド相手に蹴りを一発。

距離ができる。

「……やれやれ、あれだけ鋭く美しかった剣が今やただの鈍なまくらではないですか」

刀身を撫でつつ言うノルドに、私は思わずにや、と笑ってしまう。

「頑張った甲斐はあったみたいね」

「……とんでもありませんね、躊躇なく聖剣の刃を潰すとは」

「それは聖剣じゃあないもの」

「いいえ、これは聖剣ですよ」

「それは聖剣の条件を満たしていないわ」

ありとあらゆる人が聖剣と認めるモノが聖剣でしょう。  
そんなことを、言った。

「……では、貴女以外の万人が認める状態に戻すのでしょうか」

「……………な」

私に出せたのはそんな声だけだった。

ノルドは変わらず刀身を撫でているだけなのに。

私の作った『鞘』にひびが入る。

エメラルドのような刀身に、ひびが入る。

ぴしぴしぴし。

ぴしぴしぴし、と。

次の瞬間には、私を悩ませたあの邪剣が再び目の前に現れていた。

### 第38話

私の放った突きは、寸分変わらず邪剣の突きを捉えた。

だが、『ヒアーシング突き』というよりも《トウシユ突き》という表現の合つその攻撃を放った剣は、あり得ない事にその刀身をたわませた。

どこか遠いところから見ているような客観的な気分で、思う。

猫の類のようだ。

ぐぐぐ、と足に力を溜めて得物を狙う、ハンターのようだ、と。

数瞬後にそれは現実になる。

まるで引き絞られた弓から飛び出す矢のように、それでいて金属めいた甲高い音を立てて私の剣との力比べを抜けだす。

偶然なのか、狙ってなのか、その針の如き切っ先が捉えたのは私の左肩だった。

「くっ……っっ！」

剣の中ほどまで貫かれ、背中側から切っ先が飛びだす。

それ以上に侵攻される前に、文字通り返す刀で更に突きを繰り返す。

どちらかといえば『ヒアーシング突き』に分類されるであろう突きは、擦じられた胴に僅かに掠る程度に留まってしまう。

そして、ノルドがそれに押されて下がる際に、体の内側から立つような鳥肌と共に剣が引き抜かれる。

「……………っ、なんて剣よ。まともじゃないわ」

肩を剣をもったままの右手で押さえながら言つと、あるうことが返つて来たのは笑みだった。

「安心して下さい。私の知る限りではこのように特殊な形を持つているのはこのミスティルテインだけです」

「私が目の前に相對してるのがその剣じゃなければ笑い話なのだけれどね」

そもそもあの剣で竜族や一部の亜人族が持つ堅い皮膚を貫けるのか、と思つてしまつが、恐らく相手によって柔軟さと硬さを変動させるのだらう。

でなければ、アークギルドのマスターなどという役職はやっていられないだらう。

アーク 神器。つまりは聖剣の、だ。

「大丈夫ですか？ こちらとしては剣も直りましたし、目をつぶつて力を抜いていただければ一瞬で終わらせて差し上げますが」

笑顔でそんな事を言わなければ普通の人間に見えてしまうのが恐ろしい。

これが、人間の本质なのかもしれないな、と自嘲気味に考えつつ「冗談」と吐き捨てる。

「ですが、現状貴女が生き残る確率はゼロですよ？」

「否定はしないけどね。守らないといけない子たちがいるの。最期まで、ううん、あんたを退けるまで足掻かせてもらおうわ」

「それこそ『冗談』ですよ」

「言ってなさい！」

店のすぐ外で戦っているながら、人が通らないのは立地の所為。

ギルドからも民家が集まるところからも絶妙に突かず離れずという場所ながらも、人目につきにくい場所。

自分たちがひっそりとやるには充分だ、と言うには人が知られ過ぎていてる。

それでも、人が通りにくい場所だからこそ私はこんな馬鹿な事をしたんだろうか、とも考えた。

勝ち目のない戦い。

斬り合いが十合を超えたところでそう思った。

その時には、私の体に開いた穴は七つにも及んだ。

左肩を含めた上半身に四つ。

左右の腿に三つ。

右脚の二つの内の一つがかなり深く、もうかなり足が重くなって

いる。

「……そろそろ諦めどきでは？ 痛むでしょう？」

「まあ、ね。でもまあ刺し違えるくらいはまだできるでしょうから」

「やれやれ、貴女は体や技だけではなく、心も強いんですね」

挑発のつもりという言葉にもこれだ。

もう、皮肉を言う余裕すら残ってない。

僅かに残った力をかき集めて左脚を前に出すと、後ろ手になる蛇の剣を引き絞る。

「聞き忘れていたのですが」

「……余裕がないから早くしてね」

「ええもちろん。…その剣、何かの魔物の素材を取り込んでいたりしますか？ 私もミステイルテイン以外の魔剣を幾つか見た事があります、そのどれもが魔物そのもの、という気配がしました」

「これも同じ気配がする、ってことかしら」

「いえ、むしろ温もりと冷やかさが同居するようなら、まるで、誰かが《創った》魔剣のようにも思えるのです」

皮肉を言う余裕はなかったが、口角を僅かに上げる にやっと笑って見せる余裕はあったらしい。

「私に勝つたら教えてあげるわよ」

「それは暗に命乞いをしているのですか？」

「まさか。私はあんに勝つから暗に教えないって言ってるのよ」

「なるほど、ではもの言わなくなってしまうですが、勝たせていただきますしよう」

僅かに音を立てて構えるノルドを見ても、私の中には恐怖が生まれなくなっていた。

私にはこの剣があったのだ、と。

そんなところ。

蛇の形をした魔物の中でも《淵》を除けば最大級の大きさを誇る三頭の蛇。トレス・サーベント

その《淵》とは正反対の色である漆黒の鱗を取り込んだ剣。

大きな街の近くに居を構えたそれを30人近くで屠った際に、その姿に魅入られた私が打った剣。

生前にしかないあの鱗の輝きを完全に取り戻すことは叶わなかったが、それでも出来は良い。

そして、蛇という単語で私は思い出した。

「しなやかさで蛇が負けるわけは、ないわよね」

物言わぬ剣に話しかける様はノルドにどう見えたか。



そんなのがどうでもよくなるほど、集中する。

左半身にしたのは失敗だったかな、と僅かによぎった考えをすぐさま否定して、文字通り左足で地面を掴むように力を入れる。

次の瞬間、大地を割り砕かんばかりの勢いで飛びだした。

「むっ」

私の表情が変わった事を察してか、僅かに表情を硬くしたノルドの鋭くなった突トウシエきが迫る。

「っー！」

無音の気合を発しつつ、右手に持った剣とぶつかり合わせる。

そして、今までの打ち合いで何度もあったようにミスティルティンが撓たわむ　　ことは、今回に限ってなかった。

「!?!」

ノルドが戦いを始めておそらく初めてになるであろう驚愕を露わにする。

撓まなかった原因は単純。

私が剣を持った手首を僅かに回転させ、切っ先同士がぶつかり合いを避けたからだ。

そして、私主導の攻撃線の変更は、私の体にミスティルティンの切っ先を届かせることを許さない。

「ッッ！」

「やあッ！」

止めとばかりにもう一度左脚で踏み込む。

そして、次の瞬間には　私の剣が宙を舞っていた。

「……………え？」

ざくり、と私の後ろで何か地面に刺さる音がした。  
確認するまでもなく、私の手の中にあつたはずの剣だ。

「……………な、何が」

「……………ここまでさせたのだ。答えておきましょう」

私の喉に心臓のあたりに剣を突きつけつつ、頬に汗を光らせたノルドが言う。

ようやくというのか、その表情からは余裕が失われていた。

「貴女の剣に剣を巻まきつつかせて上に振るつた。剣を奪うつ技の中でもこの剣でしかできない極め技です」

「……………」

「ここで何も言わないのは矜持故、ですか？　それとも言葉も出ない程の恐怖ですか？　こちらとしても、改めて貴女を失うのが惜しいと思いました。　どうです？　私の下に就くつもりはありませんか」

まあ、この状況ではイエスと答えざるを得ないのでしょうが、と  
呟く狂気の、それでいて最強に近いであろう剣士に、私は形容しが  
たい感情を抱きつつ、それを否定して呟いた。

「殺しなさい」

「……………そうですか。貴女のごことは、覚えておきましょう」

僅かに剣を引き絞る。

私はただ剣だけをずっと見ていた。

そして次の瞬間　私の視界は、真っ黒に染まった。

私とノルドの間に割り込んだ、誰かの背中によって。

「　やれやれ。久方振りに挨拶しよけと思っただらこれ、か。まさ  
か《聖人》の中さかい罪人つみびとがでるとはな」

聞いた事のない鈍り方。

スノウのものとも、他の地方のものとも僅かに違うようなその言  
葉を口にしたのは、あるうことか女性だった。

声からも、後ろ姿の華奢さからもあきらかだ。

背は、女性にしては高いほうだろうか。背を向けているが、私が  
目を見ようと思えば僅かに見上げる形になるだろう。

髪型は、私のような長髪をうなじが見えるあたりで剣で斬り落と  
したようなおかつぱだった。

しかし、それでいて、全く乱雑という様子を見せない鴉の濡れ羽  
のような美しい黒、いや、美しい闇だった。

その全身漆黒の服装も相まって、まるで自分を見ているような錯覚を覚えた。

錯覚、なのだろうか？

あるいはそう思ってしまうほどに、私と彼女は近い…気がした。

あのヒイロよりも。

そう思った。

その背には、左手で抜けるようにだろうか、私とは逆位置に、斜めに差された純白の鞘に納められた、これまた純白と言っていていい、それでいて美しい装飾をされた剣があった。

何故か惹きつけられ、見蕩れている内に、彼女の前にいるであろうノルドが声をだした。

「……まさか、あなたが何故ここに？」

「なんやてええやろう。観光や」

答えるんだ。

それも恐らく嘘だろう、と内心で突っ込んだ。

私のどこにそんな余裕があったんだろう、とも思う。

「とりあえず、や。おどれをこかす」

すごみは、なかった。

はあーあ、と欠伸のようなため息をついてさえいる。

「ここであなたとぶつかるのは避けたいですね。退かせてもらいま

！？」

「とろい」

瞬きすらしなかったはずなのに、私の視界からはその女のひとは消えていた。

そして、彼女の手にはミスティルティンがある。

「な！？」

「……………なるほど。理由はこれか」

ただ目を見開くだけのノルドを一瞥して言う。

「やけど。この剣、随分血を吸つとる」

そこでようやく、殺気が放たれた。

圧力を持ったそれに、向けられたわけでもない私はあえなく押しつぶされた。

痛む足から力が抜けて、ぺたんとすわりこんでしまう。

ノルドはどれだけの圧力を いや、恐怖を味わっているのだろう。

想像することすら、理性と本能の両方が拒否した。

「まあ、おどれは人間やさかいに、ちつとは手加減したる」

言葉通りに、僅かに殺気が緩む。

「……………」

しかし、次の瞬間には、ノルドは自らの剣を鳩尾に深々と、それこそ鐔辺りまで刺され、そこからさらに頸動脈に一撃を受けて倒れていた。

それをした本人は僅かな間ノルドを見下ろしていたが、やがてこちらを向いた。

守ってもらったはずなのに、本能的に身を固くしてしまう。

だけれど、彼女が浮かべたのは申し訳なさそうな、それでいて柔らかな苦笑だった。

「……………やあ、かんにんな。おどれを訪ねるだけのつもりやってんけど。」

「っと、まず治療やな。歩けるか？」

伸ばされた手を取って連れて行って貰った先で、私はようやく彼女の事について知ることができた。

### 第39話

私でも名前くらいは知っている、このギルドに所属するA以上のランクを持つ数人が彼女がギルドに入った瞬間に目を見開いていた。

スノウも例外ではなく、いつも以上に丁寧な対応をしていた。

私の手当て役を買って出たスノウを「ゴメンな」の一言で下げさせた。

そこまでの周りの反応で、私はこの人が一私知っているべき誰か(・・・・・・・・)である事を確信した。

「……ほな、デュラハンは知っとることやし、あれが戻る前に自己紹介させてもらっわ」

例の、独特ななまりの混じった言葉で言う。

「ギルド『カラドヴルフ』の長。アーサー・ヴォーダンや。あんじようよろしう」

手を差し出し、私の手を見て慌てて引っ込めるのは彼女が優しい故だろう。

二代目アーサー。

そうなるときに元の名前は捨てたらしい。

それにしても、と私は首を傾げてしまう。

アークギルドの中にそんな名前はあったらどうか、と。

思わず彼女　アーサーさんの顔を見上げてしまう私のそんな疑問に答えたのは、やたらと疲れた顔をした顔で部屋に入って来たおじさんだった。

「……知らんのも無理なかるうよ。こやつが先代から受け継いですぐに改名しおったのじゃからな」

しかもほとんど広まっとらん、と笑って見せる。

正直、疲れ過ぎて苦笑しか浮かばない人にしか見えなかったのは秘密。

「うるさいで、デュラハン。エクスカリバーなんて錆びついた名前乗っとられるかいな」

小さな舌打ち混じりに彼女が呟いたその名前で私はようやく気付くことができた。

エクスカリバー！

十数年前、『淵』を広げた、最も強いアークギルドである。

私の場合とは違う。

交代するところだった一瞬の老いた『淵』ではなく、本当の。

そこにあるべき姿の『淵』を広げたのだ。

私は子供だったためにほとんどが掠れた記憶なのだが…。

その直後に誰かが店を訪れていた気がする。

……気のせいだと他人に言いきられてしまってもそう思い込んで



しまうような曖昧な記憶を弄くりまわしても仕方ないだろうけれど。

「……どうした？ 痛むんか？」

「あ、いえ……。その、ちゃんとお礼を言ってなかったな、と」

立ち上がるうとして、やっぱり止められてしまったので、改めて謝罪を口にしてから頭を下げる。

「助けて下さって、ありがとございました」

「……ひゃひゃひゃひゃ」

「……え？」

思わず顔を上げる。

流石に、笑われるとは思っていなかった。

痛くないようにとの配慮で半ばソファーに寝かされる形になっていたが、ちゃんと体は起こして礼をした。した、はずなのだけだ。

「ひゃひゃひゃひゃ……ふう、すまんすまん」

笑いを収めて、それでもやっと笑いかけるのを止めはせずに、彼女は続けた。

『「デュラハンの心」なんちゅう輩がどんなもんかと思いつたんがあほらしいなってるわ……」

「!？」

困惑する私を余所に、「ふーん」と唸りながら顔を近づけ、私の体のあちこちを値踏みするように見回していく。

「あの……」

「それについてなら本人に聞いたらええやろ」

私の体を見ている癖に私の眼を見る気はないらしく、手だけ指だけ？ を私の顔が向いている方向に向けておじさんをゆびさしながら言った。

遭遇して一時間と少しでこれである。

前言撤回させて欲しい。

どこも近くない。

むしろ私の方から遠ざかりたい。

「……………おじさん？」

だけれど、とりあえずはアーサーさんの言う通りなので、文字通りに指示通り 指示された方向にいるおじさんに視線を向ける。

デュラハンの 『心』。

心…中心。

大事なもの。

大事なもの 頭。

頭。

デュラハンの頭の比喩、だろうか。

そうになると…少々、悪い意味ではなく遠慮したいものではあるのだけども。

「どづいづこと？」

特に怒りや戸惑いを込めたわけでもない純粹な問いに、しかしながら『デュラハン』は弱り切ったような笑みを浮かべた。

「むづ…。なんとはいえは良いかの…」

「正直に言ったらええ。自分の仕事押しつけた結果や、て」

「ぐ…もう少しオブラートに包んでもらえんか？ 後が怖い…」

「自業自得やろ」

そこまで言われれば私でも十二分にわかる。

「……そうよね。ギルドマスター級の依頼が本一冊分なんて」

どうして気付かなかったのかな、と思わずため息交じりになる。

いくら仮初めのSランクを与えられているとはいえ。

私はまだ子供に過ぎない。

そんな風に思わされた気がした。

「……まあ、デュラハンとは『淵』が近い所為もあるさかい、しようのないこともあるやろ」

そんな風に取りつてつけたような理由を口にしながら、ようやく私の体に向けていた視線を剥がす。

そしてやっと私の眼を見、続いておじさんを見る。

「……まあ、あんたの『心』がこの先どうなるかはわからんけどな」

「……ミスティルティン、か」

おじさんの視線の向きが変わる。

机の上に置かれた　粉々のミスティルティンに、向く。

アーサーさんが文字通り一捻りにしたものだ。

おじさんと同じ強い力を売りにしているようだけれど、もはや剣が要らないじゃない、とか。

そんな風に思っほどの破壊だった。

「ま、後釜はいくらでもおるやろけど……」

変わらずおじさんの方を見ていた視線がまた私に。

「うち、押してみるわ」

「……まさか」

おじさんが唸るやうに言う。

「おお。おどねの『心』をせ」

## 第40話

「……………」

言いきられたおじさんは、何も言わずにアーサーさんを見、私を見た。

私は口から吐き出されそうになった大きな空気の塊を飲み込みつつ言った。

「言うまでもないわ」

この場合は言わなかったという方が正しいのだろうけれど。

「……………はあ」

アーサーさんは私の飲み込んだその空気の塊をあからさまに吐く。

「見たかデュラハン。即答の上に本気やでこれ」

「儂の娘だ」

「ひゃひゃひゃ」

また、特徴的な訛りの混じった笑い。

「あーあー、損得勘定の下手な奴らばっかで嫌んなるわあほんと」  
言いながらも、堪えきれないように笑いは顔に張り付けたままだ。  
さてさて、と呟きながら私の隣にどすんと腰を下ろす。

その衝撃で走った痛みを噛み殺すのに必死な私に平謝りをしてから、彼女は再び口を開いた。

「ええ機会や。おどれの立つとる位置、確認しとき」

彼女が用意した紙に走り書きしたのは、今のギルドについてだ。

「まず手始めに『カラドヴルフ』。うちやな」

樹形図のような勢力図。その頂点を一番上と言わないのは彼女の  
人柄らしい。

因みに、一度Ex エクスカリバーの頭文字 を書いてしま  
って慌てて斜線で消したのは見なかったことにしておくべきだと思  
う。

「まあ形式上は一番上にあるけども、実際に『淵』たる《あいつ》  
を倒したんは先代やからうち個人はなんも偉そうなことは言えん」

おどれのほうが強いかもしれんで？

そんな冗談には私としては辟易するしかないのだけれど…。

彼女が自らを最強と認めていないのは確かみだった。

「……………続きを」

「ひゃひゃひゃ、可愛げもねー」

愉快そうに笑うアーサーさんには見蕩れてしまいそうな美しさがあったのだけれど、本人に言ってしまったら私が珍しく誉めたときのカレン以上に調子に乗ることが目に見えていたからなんとか口を噤んだ。

そんな私を見て愉快そうに目を細めるとは何事か、とか。

これ以上はきりがいいから止めておくけれど。

私が改めてアーサーさんの指差す先を見ると、そこには見慣れたただしこのギルドでだけ No Arksの字がある。

追記させてもらうとすれば、これは正式名称ではなく仮称であるということ。

あるいは『デュラハン』と同じく通称か。

まあどっちでも構わないのだけれど、私が追記したい事というのは、私たちのギルドに名前がないということ。

本題としては並び立つ残り二つだ。

『Arroundight』と『Gallatin』。

『アロндаイト』、そして『ガラティーン』。

どちらも初代アーサーと共に戦い、淵を広げた剣士 あるいは



騎士　　たちが立ち上げたギルドだ。

「まあまあ、知ってると思うから細かいことは省くで」

「はい」

「んじゃー…と、ここまででええな」

アーサーさんはその三つの下に続けて『Clair?omh Sol  
ais』、『G?e B?lg』、『Fr?garach』まで書  
いたところで手を止めた。

クラウ・ソラス、ゲイボルグ、フラガラッハ。

因みにミスティルティンも本来はこれに並び立つのだけれど、そ  
れは言うまでもあるまい。

そしてそれ以外のどの聖剣も、私は見たことがない。

「……なんや、一つ一つレクチャーしていかか?」

「個人的には興味がありますけど……、まずは自分の位置を把握し  
ておくべきだと思うので……」

きつ、とおじさんを睨みつけつつ言うと、おじさんは苦笑いで目  
を逸らしてアーサーさんはまた「ひゃひゃひゃ」と笑う。

「そやなあ、ま簡単と言えば簡単や」

とんとんとん、とエクスカリバー　　ではなく、カラドヴルフの

下の三つのギルドの名前を叩く。

「……」でおどれの取り合いをしとる」

「……………」

カレンのように間抜けな声を出すようなことは避けられたけれど、私の驚きがとも言葉で表せるものじゃあなかった。

「初耳か？」

「……………ええ」

「ひゃひゃひゃ、デュラハンも上手いこと隠しよる」

私とおじさんの両方を視界に入れつつ笑ったアーサーさんは本当に楽しそうだったけれど、私はそれどころじゃない。

今度は睨む余裕もなくおじさんを見るけれど、返ってくるのは申し訳なさげな困った表情だけだ。

「……………」

「うちは身勝手やからほいほい先に進ませてもらうて？」

……………元々おどれは目え付けられとったんや。鍛冶屋としてもギルメンとしてもな。

んでもデュラハンはおどれを離さん。建て前としては聖剣がないことを理由にな。

やから気に入らんギルドはある程度はこっちの事情も加味せえや

つてがつんがつん依頼を放ってくるわけや。『デュラハンの心が受けますよ〜』ってな具合にな

「……………」

「そこで、や。今回の一件。

後釜はそれこそおどれを取り込む理由が出来てもうた。うちも押す。

……………なあ、どないなと思う？」

私は、ただ黙るしかなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5589n/>

---

刀嫌いの鍛冶師

2011年9月21日23時37分発行